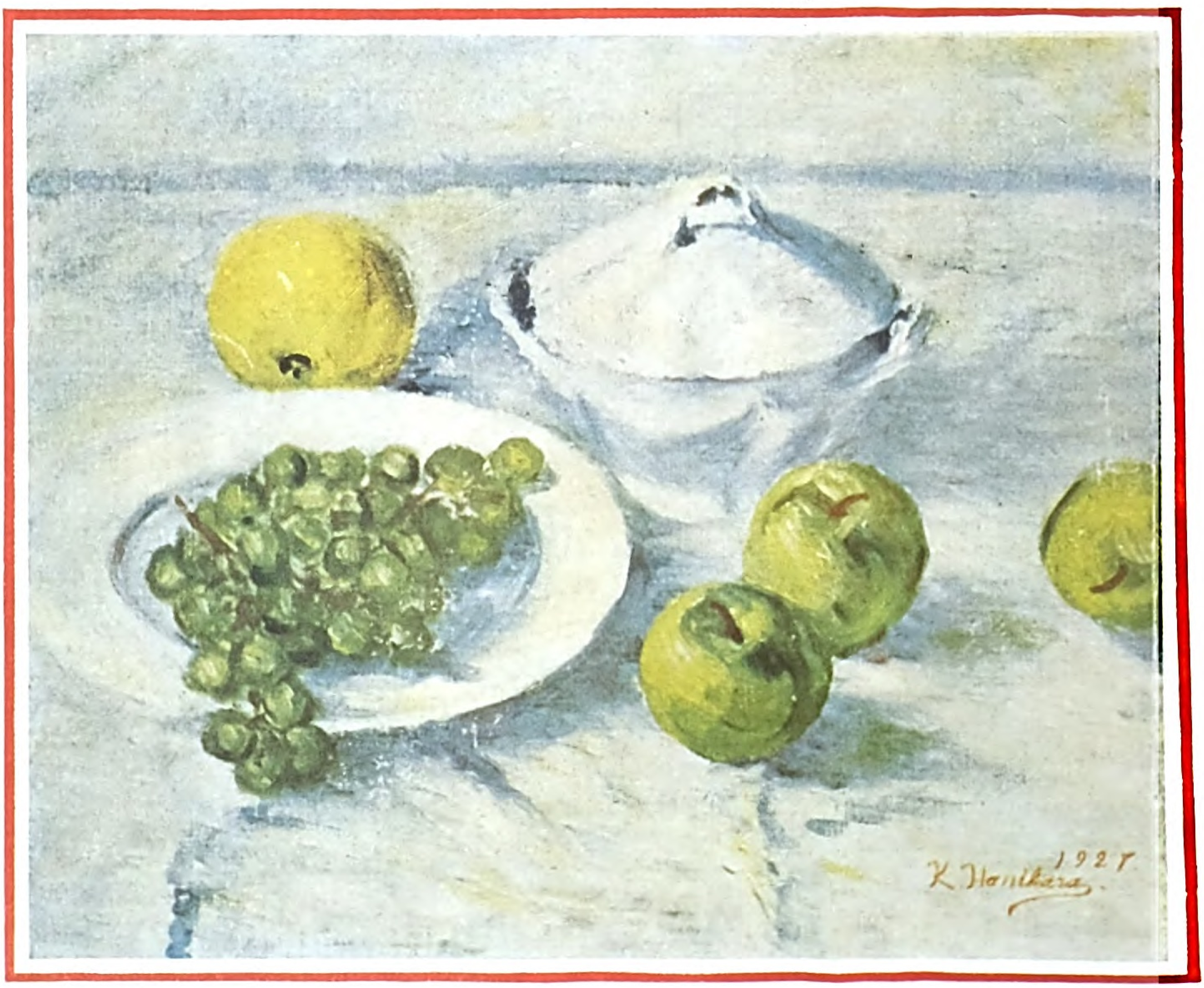
女人藝術

創刊号





女人藝術創刊號目次

評論

感想・隨筆



七月上旬

映畫・音樂・舞踊の夕

女人藝術社の別方面として映畫・音樂・舞踊の夕を、七月上旬開催いたします。委しくはその節新聞紙上で發表いたしますから奮つて御來會下さいませ、

バートランド・ラッセル氏曰く　私は此の素晴しく大膽な本を讀んで深い感銘を受けた。茲に初めて婦人に關する眞實が語られたのだ。頗る意義ある作品である。



ロマン・ローラン氏曰く　それは大天才の創作だ。力ある作品だ。

ヴイクター・マリゲリット氏曰く　此の美しい本は偉大な個性を否認する事の出來ない保證だ。

婦人評論家として知られた山田わか子女史が佛蘭西の閨秀作家であり兼ねて共産黨員として活躍してゐるマグダレン・マルクス女史の創作を譯されたものである。單に一人の男性を對象とせず萬人の男性を愛する事が新時代の戀愛だと喝破し女性として或は母性として一々鋭い内省のメスを振ひ女の赤裸々な魂の正體を最も大膽に描寫し歐洲の讀書界を震駭せしめ本國の佛蘭西では羽が生えて飛ぶ様に賣れ到る處で盛大な講演會が開かれ凡ゆる著名な哲學者、批評家、小說家から熱狂的賞讃の聲を浴せられ今や爭ふて各國語に飜譯されつゝある世界的空前の名著である。新時代の婦人を語る者は先づ本書を繙け。

四六判四〇〇頁

定價一圓八〇錢

送料（書留）一八錢

東京麹町下六番町

平凡社

電話九段 一六六四番 三六四七番 三四七五番

振替東京二九六三九番



モスクワに於ける中條百合子氏の近影

秋田雨雀氏

湯淺芳子女史

ニキチナ女史

鳴海完造氏

中條百合子女史

女人藝術

七月號





評　論

フェミニズムの檢討

山　川　菊　榮

謂ゆる『女性文化』の意義

近頃よく聞く言葉に『女性文化』とか、『婦人文化』とかいふのがある。文化といふものを、人類社會の歴史的發展の結果として考へてゐる吾々には、例へば奴隷經濟を基礎とした古代文化、農奴經濟を基礎とした封建社會の文化、現代の、賃銀奴隷制度に基礎をおく資本主義文化、そして社會主義經濟に基礎をおく未來の文化といふものは考へ得られても、男性によつて作られた男性文化、女性によつて作られた女性文化といふようなものは考へ得られない。どんな社會でも、男女兩性によつて成してゐないものはなく、その意味で、或文化そのものは、常に或時代、或社會を代表する性質をもつてゐるもので、一方の

性を代表する、一方の性のみによつて導かれた性別的な文化といふものはあり得ないのである。たゞ人類の社會が私有財産の發生と共に、階級的に分裂してこの方、文化も、教養も、政治的、經濟的權力を掌握してきた少數支配階級を中心として發達し、彼等のために、彼等によつて維持存續せしめられて來た關係上、原則として政治的、社會的權利を剝奪されてきた婦人は、他の一切の被壓迫者と共に、自主的 積極的に文化の創造や享樂に參與することを許されなかつた。勿論支配階級の間では、婦人も或る程度の教養を與へられてはゐたが、それはどこまでも主人たる男子を樂しませるためのものであり、決して婦人自身の個人的發達のためでもなければ、社會生活への寄與のためでもなかつた。しかしこれは廣く一般に被壓迫者の階級に屬する男子の場合も同じことで、學問や智識や、すべて社會を指導し統制してゆく上に必要な教養や訓練は、支配階級の男子の獨占するところとなり、被壓迫者階級の男子は、婦人と同樣、いかにしてよりよく支配階級の利益に奉仕し得るかといふことを基礎として割出された道德と教育のみを與へられてきたのである。であるから、今日まで、謂ゆる高級社會の文化は、男子中心の文化ともいひ得るが、支配的權力を握つてゐた者は全男子ではなくて、一部の男子にすぎない限りでは、男性中心の文化といふよりも、支配階級的文化といふ方が、一層適切であり、妥當である。

資本主義の時代に入つて、婦人が獨立の生産的要素となると共に、その思想も一變した。今や婦人は、獨立の經濟的要素としてのその新しい社會的地位を法律的に承認させるために參政權を要求し、更に教育、職業の平等をも要求してゐる。謂ふところの『女性文化』とは、かういふ經濟的地位の變化に應じて發達した婦人の自發的活動の要求を意味し、婦人が自主獨立の立場に立つて、婦人自身による、婦人自身のための文化の建設を意味するものと解せられる。

婦人が附隨的、依屬的でなしに、男子と對等の獨立の立場に立つて、自主的に文化の建設に努めやうといふことの要求はもちろん正しい。これは、婦人が人間として、社會の一員として當然もたねばならぬ要求であり、その義務でもあれば、同時にその權利でもある。

けれどもこの要求が原則的に正しいといふことは、それが現在の社會で、單なる法律上の平等によつて實現せられ得るかどう

かといふこと、は、全然別問題である。現に男子の間では、政治、教育、職業等に關する權利には、法律上何らの差別も制限も設けられてゐない。にもかゝはらず、單なる經濟的地位の相異によつて、それらの形式的には普遍的な權利は、實質上、社會の一少部分の特權と化し、大衆はそれらの行使を禁壓せられてゐると同然である。民衆の大多數が無智と貧困のために眼前の生活問題よりほか、何物をも顧慮し理解する能力を奪はれてゐる時、言論や集會結社の自由が、官權の威力をもつてその好むがまゝに制限せられてゐる時、教育も職業の自由も要するに經濟的條件によつて決定せられてゐる時、即ち一切の權利の行使が全力と、それを基礎とする權力とによつて權限せられてゐる時、名目上の自由や平等が一片の言葉、一抹の幻影にすぎないことは、いふまでもないことである。

男子の間におけるこれら形式上の平等が、事實上の平等を少しも亡ぼさないと同樣に、女子の場合も、單なる名目上の平等が、原則的、一般的にその地位を變化する何らの力をも持たないことは、これ又いふを俟たないことである。世界大戰後、名目上では婦人の地位は改善せられた。參政權や教育職業の自由は、文明國の一般的な原則となつた。然し資本の攻勢による無產階級の犧牲は、ます〳〵その悲慘を加へ、殊に團結の薄弱なその階級の婦人は男子以上に其苦しみをうけてゐる。勞働時間延長、賃銀低下、失業、組合の壓迫破壞は世界的な現象であり、無產者の生活苦とその奴隸化は、留まるところを知らない有樣である。男子の參政權が、かゝる形勢を阻止する何らの力も持たないと等しく、女子の參政權も、この資本の暴威の前には全く無力である。國內的には無產階級の徹底的彈壓と搾取とによつて其力を加へてゐる資本主義は、國際的には弱少民族の壓迫搾取によつてより强大となり、同時に到る處に帝國主義戰爭の危機を胎ませてゐる。かうして全人類の平和な發達と創造的な文化とは、むざんに蹂躙し破壞せられてゐるのである。かような事實を前にして、謂ゆる『女性文化』とは事實的に何を意味することになるだらう。全人類の生活と文化との破壞を伴ふ資本主義そのものとの徹底的抗爭をよそにして、婦人の解放を說き、新文化の創造を說くことは、事實の上では、それが實現を不可能にする兇暴な資本主義政府に協力して、社會の進步と婦人の解放とを妨壓する結果を齎らすにすぎない。全人類の解放を離れて婦人の解放はなく、全人類の文化から獨立した婦人

獨自の文化といふものはあり得ない。全人類による、全人類のための文化を不可能にする政治的經濟的條件との徹底的な鬪爭をよそにして『女性文化』を提唱することは、事實において、資本主義文化――壓迫と搾取の上に築かれた、少數特權階級のための文化――への女性の協力を意味するほかの何ものでもあり得ない。明かに資本主義の內部における、少數特權階級の婦人しか、均霑し、參與することを許されない謂ゆる『女性文化』の提唱は、一見進歩的に似てその實反動的な實質を內藏するものである。それは、淺薄皮相なフェミニズムの一表現でしかあり得ない。

國際平和とフェミニスト

女性が公生活から排除せられてきた反動として、資本主義經濟の內部において、女性が一切公的權利を囘復し、公的活動に參與することによつて、人類の政治が、その道徳が、その生活がすべて根本から建直されるだらうといふ幻影を抱くもの、これがフェミニストである。吾々は男女の性の相異は、人間としての本質的な共通點以上に大きなものでないと考へてゐる。男子が社會的環境の支配をうけるがごとく、婦人もそれによつて支配されると、考へる。現在の社會を動かしてゐるものは、表面、權利を代表してゐる男子であつても、事實においては、その男子の意思を動かすところの社會的條件こそ、基礎的、根本的な力である。だから婦人――そして同時に全人類――の解放を目がけるものは、鬪爭の對象を男性に求めるのではなく、その意思を支配してゐる社會的條件に對して向けねばならぬ。その社會的條件が變らない限りは、女子が男子の地位に立つて政治を、經濟を運用したところで、同じ社會的條件の支配するところにより、同じ結果を生み出すにすぎない。現に婦人參政權その他いはゆる婦人解放の諸條件が滿たされた國々で、婦人の大臣、官吏、議員、教授が輩出しつゝある國々で、人口の九割を占める無產者の生活がます〱窮乏化し、奴隷化しつゝある。事實によつて證明されてゐる通り、同じ結果が生み出されてゐるのである。男性中心論者は、女子をその性の故に卑しめた。フェミニストは、女子をその性の故に崇める。彼等は、同一

社會的條件のもとにおいて、男性のよくし得なかつたところを、女性を、たゞその性の故に、よく爲し遂げるであらうと信じてゐる。これには何らの科學的根據もない。彼等はたゞ自分の希望を、そのまゝ無條件で客觀的事實として信じようとしてゐるのである。吾々は婦人を男子と同じ人間だと考へる。だから男子のなし得るほどのことは、女子にもなし得るものであると考へると同時に、男子のなし得ぬところは、女子が、その性の故のみによく爲し得るところではないと考へてゐる。婦人は神でもなければ、惡魔でもない。要するに婦人はたゞ人間である、男子と同じ人間である。男子以下の者と見ることもが誤まつてゐると同時に、男子以上の者とみることも誤まつてゐる。

或る人には、世界の平和を婦人の團結の中に求めようとする。これは婦人は平和を愛するといふ抽象的、一般的な前提から出發した無條件的な、非科學的信條に基づいたもので、何ら、具體的、實際的な觀察と結合したものではない。抽象的、一般的な原則として、人類が――男子と雖も――無條件で戰爭を讃美するものでないことはいふまでもない。一般的な原則として、戰爭よりも平和を愛する點で、男子が女子に劣らうとさへも思はれない。然し問題は、さういふ抽象的、一般的な原則の場合ではなくて、現實に起つた、又は起りつゝある戰爭に對して、いかなる態度、いかなる手段を執るかといふ點にある。

大戰前、世界のフェミニストは、婦人參政權によつて世界の平和が確保されると主張し、宣傳した。しかも彼等は屢々切迫した戰爭の危機と軍備の大擴張とに對して、一言の抗議をも敢てしたことはなかつた。果然、大戰の開始と同時に、彼等は最も兇暴な帝國主義政府の、最も兇暴な侵略戰爭の武器となることを辭しなかつた『最後の血の一滴まで戰へ、最後の一戰まで敵から奪ひとれ』といふロイド・ジョーヂの、血に渇した惡鬼のような狂亂の叫びに、最も忠實であつたものはパンカースト以下のフェミニストではなかつたか。彼等は戰爭の遂行のためには一切の犧牲を辭しなかつた。かくて二千萬人の人の子の生命は損ひ、妻から夫を奪ひ、母から子を奪ふために、かくして全人類の文明を破壞するために、資本の走狗となつたものは、かの『女性文化』論者、かのフェミニストそのものではなかつたか。『戰爭中止』『即時講和』『非併合、非賠償の平和』『そして『戰爭に反對する戰爭』の叫びをあげたものは、フェミニストではなくて、國際無產階級ではなかつたか。戰爭を終結せ

しめたものは、血迷つたフェミニストではなくて、自國の帝國主義政府を葬り去つた露獨無產階級の力ではなかつたか。

今や第二の世界戰爭の危機は刻々に切迫してきてゐる。特にその危機が、支那問題を中心として極東の空に迫りつゝあることとは、何人の目にも明白である。この時に當つて『女性文化』論者たるフェミニストは、戰爭を防止するためにどういふ努力を拂つてゐるか。婦人の地位向上を主張する團體のうち、無產階級と共に世界戰爭の危機へ導く出兵問題に對して抗議したものが一つでもあるだらうか。區々たる婦人雜誌の改善を議する暇はあつても、支那四億の民衆と七千萬のわが國民の生命そのものを脅かすところの、この最大重要、最大緊急の問題については、全然無關心のふりを裝うてゐる。もし裝うてゐるのでなく、眞實に無關心であるとしたなら、それは救ひ難き無智と無自覺とを意味し、裝うてゐるものだとしたならば國際平和への意識的サボタージュを意味し、これまた救ひ難き僞善と僞瞞を意味してゐるに過ぎない。

かゝる重大な時機を前にして開かれる太平洋沿岸諸國の國際婦人會議は、いやしくも國際平和を云々する限り、支那出兵に對する徹底的反對を中心的な議題とするのでなければ全然無意味である。太平洋沿岸の諸國の婦人が、支那の婦人と力を併せてその國民的解放を成就せしめることを主眼とせず、支那における帝國主義者の妄動を是認して國際平和を云々することは明らかに平和に對する裏切であり、婦人の名において、四億の隣人に對する搾取と掠奪とを幇助する。許しがたき國際的罪惡である。平和の使徒か、帝國主義の走狗か、汎太平洋婦人會議の本質は、その代表者自身によつて曝露せられるであらう。

婦人解放の道

望月百合子

婦人の解放と云ふ事が唱へられます。一體婦人の解放とはどういふことを意味するものでありませう。どう云ふ束縛から婦人を解放しようと云ふのでありませうか。どう云ふ自由に婦人を生かさうとするのでありませうか。一口に婦人の解放と申しましても、差あたりいろ〳〵な異つた意味に解釋することが出來るでありませう。たとへば、家庭から婦人を解放するとか、政治上に積極的の自由を與へるとか、經濟上の平等權を與へるとか、言ふやうな、種々な問題として考へられるでありませう。またこれに附隨して種々な婦人問題が起つてまゐります。たとへば産兒制限問題だの、賣笑婦問題だの、婦人職業問題だの、婦人參政權問題だの、と云ふ風に重大な問題が澤山私達婦人の前に横はつて居ります。併しその中最も重大なのは婦人參政權問題でありませう。それは婦人が參政權を得れば、從つて他の凡ての婦人問題が、婦人自身の力で解決できると思はれるからであります。併しこれは甚だ皮相な考と言はなければなりません。

太古に於ける母系組織の存在を發見したバホヘンと云ふ人や、エンゲルス等は、その母系組織から父系組織に變じたのは、生産手段の變化に伴つた自然的進化に基づくものだと言つてゐますが、新らしい社會學者は、それは誤つた觀察だと言つて居ります。男子が婦人に勝つて母系組織が覆へされ、父系組織の社會が出現したのは、全く男子が暴力に依つたのだと言ふこと

であります。即ち男子が暴力に依つて家長權を獲得し、强權政治を確立し、近世の國家と社會とを達成したのであります。果してさうであるならば、今日の强權的政治組織が存在する限りは、愛と道德とに依つて存在の意義を認められたる婦人の地位は、依然として服從關係におかれねばなりますまい。たとへ婦人が參政權を得、或は官吏に就職する權利を得、またその他職業上に於ける男子と平等の權利を得たとしても、それには法律上の平等權に過ぎず、文字の上の平等權に過ぎず、或は極めて特殊な婦人にのみ適用される權能に過ぎないでありませう。そして一般婦人は依然として哀れむべき奴隷の境涯に苦しみを忍ばなければなりますまい。單なる婦人參政權の獲得、單なる職業上の平等權等は、些か婦人の意氣を高め、婦人の自覺を促す助けにはなるでありませう。それ故これを全然無益な運動だとは申せません。が併し、かうした權能の獲得に依つて、從來、同情同感の同性的共同戰線に立つて來た婦人同志の間に、新らたに階級的差別が生じてまゐります。即ち今日の社會に於けるブルジョア階級と、プロレタリア階級との差別と同じ差別が、新らたに婦人同志の間に起つてくるのであります。今日の政治組織は要するに强權を基としたものであります。この强權組織に基づいた政治上の權力に、一部の婦人が近づくと云ふことは、强權の爲に奴隷化されたる一般婦人に裏切つて、敵の陣營に降服すると云ふことになりはしないでせうか。宛かも階級鬪爭を主張する勞働黨の指導者が勞働階級全體をそのまゝにしておいて、自分だけがブルジョア政府の一人となつたのと違ひはないでありませう。

　母系組織の轉覆が男子の暴力に依つたとするならば、その暴力を基礎とする强權的政治は、母性にとつて仇敵と言ふべきでありませう。强權なしには政治はありません。政治は强權に依つてのみ行はれるものであります。その强權に依つて行はれる政治圈内にはひらうと云ふ婦人參政權運動の如きは、私達婦人を甚だ侮辱するものでありますまいか。

　併しまた、若し現代の政治組織を肯定するならば、それは自づから別問題であります。現在の政治組織全體を肯定しないまでも、少くとも强權政治といふものを、人生自然の社會條件と認めますならば、婦人參政權運動には深い意義があると言はなければなりません。併しながら若し强權政治が是認されるならば、たとへ婦人の參政權が男子と完全に平等に認められましても、

それは決して婦人全體の解放とはならないのでありませう。それは單に婦人のみではありません。男子も同樣に解放されはいたしません。たとへ完全に普通選擧制度が行はれましても、强權を基礎とした政治組織、經濟組織が存在する限り、男子も女子も決して自由にも、平等にもなることは出來ません。大多數の人は、やはり少數者の踏み臺となつて生活しなければなりません。

これ迄、論じてまゐりますと、婦人解放と云ふことは、男子の解放と離れることの出來ない問題になつてまゐります。母系組織がくつがへされて、父系組織が建てられたのは、男子の暴力に依るのだと、社會學者は申しますが、その暴力に依つて建てられた社會に於ては、男子は女子を奴隸化したばかりでなく、同時に大多數の男子をも奴隸化したのであります。でありますから、この奴隸生活から私達婦人が解放されやうとするに當りまして、當然共同戰線に立つべき多くの男子が見出されるのであります。

解放と云ふことは全部の上に行はれて始めて眞の解放となります。一部分の解放と云ふことは、直ちに新らたなる階級制度を建てることになります。たとへば、今迄は參政權のなかつた婦人同志は平等の味方となつて居りましたが、それが代議士になり官吏なる資格を得ました時に、大多數の婦人と、選ばれたる婦人との間に、新らたな階級が出來てまゐります。選ばれたる婦人は絕大なる强權を背景として、權勢と虛榮とを貪り、大多數の民衆婦人は依然として奴隸生活に呻吟しなければなりません。

自由は平等に依つて始めて獲得するものであります。平等は必然的に自由を條件として存在するのであります。自由のなき處に平等なく、平等のない處に自由はありません。然るにその平等と云ふことは、社會全體の上に行はれてこそ始めて意義があるので、一部分の平等と云ふことは全く意義をなさないものであります。即ち一部分の平等と云ふことは、他に不平等の部分があると云ふことを予想されるものでありまして、實は平等ではないのでありますo私が解放は總體のものでなければならないと云ふのはこの理由に基づくのであります。

以上、述べました處に依つて、婦人の解放と云ふことは、同時に人類そのもの丶解放を伴ふものでなければならないことを説いたつもりです。婦人職業問題だの、婦人參政問題だの、何れも多少の意義はありますけれども、婦人解放への道程に於ては、寧ろ岐路に屬するものでありまして、その本道は別に見出されねばなりません。私達はその道を進むべく、單に婦人全體でなく、男子全體をも抱擁し得る自由と平等と相互扶助の精神を體した、連帶生活を打建てて行くことに努力しなければならないと思ひます。そしてこの進路に横はる、あらゆる障害と鬪つて、自由の天地に自分達を進めて行かなければなりません。

汎太平洋婦人會議代表者

六月二十五日の午後六時半から、朝日新聞社の講堂で、東京聯合婦人會主催の汎太平洋婦人會議出席者の意見發表會が開かれることになつてゐる。汎太平洋婦人會議とは、從來太平洋沿岸に關係のある諸國が、世界の平和を維持するために一種の國際會議として開いて來た汎太洋會議を、特に婦人の立場から議さうといふので今度がその第一回の集まりである。

代表者としては、教育の方面で日本女子大學の井上秀子女史が女子の高等教育を大多和たけ子女史が性格教育を、家政學院の大江すみ子女史は家政教育を、その他日本で最初の女の小學校長に擬せられてゐる木内きやう子女史、石川房子女史及び黒崎悦子女史などである。保險問題については、日本女醫界の第一人者吉岡彌生女史が繁忙な公私生活のうちからわざ〳〵ハワイまで出掛けるといふ事であるし、婦選問題では婦選獲得同盟の市川房枝女史が、社會事業については藤田たき子女史が、平和の問題では、婦人平和協會のガンドレット恒子女史が日本女子大學の正田淑子女史が婦人の勞働問題を提げてそれ〴〵出席されることになつた。

代表者の選定については幾分の議論もあつたらしいが、とにかく大體は各〻の所屬團體によつて決まつたらしい。意見發表會の講師及び、題目は次の通りである。

標準生活——井上秀子、汎太平洋會議と婦選問題——市川房枝、日本の高等女學に於ける性格教育——大和田たけ子、婦人と平和——ガンドレット恒子、日本婦人に對する社會衛生の考察——吉岡彌生、家事科教育について——大江すみ子、日本に於ける國際教育——黒崎悦子、婦人の職業及び勞働問題——正田淑子、社會事業について——藤田たき子、日本に於ける新教育とその一般——石川房子、未定——木内きやう子

外に關西からの出席者に、大阪の井田菊枝女史、吉屋登代子女史などがあり、また社交を受持つて出かけると評されてゐた上海總領事夫人矢田千代子女史はいまだに決まらないのか、知らせないのか、はつきりしたことが判からない。

婦人と無產政黨

神近市子

一

この二月に行はれた衆議院の總選擧に際して、婦人選擧權の獲得を望んでゐる進步的な婦人達の間で、新舊何れの政黨を援助すべきかといふことで議論が分れ、それが最後には可なり的はづれな主張にまで走つて行きさうな形勢が見えたので、私はとりあへず選擧の直前『讀賣』紙上で婦人の解放を望む者は無產政黨を支持すべきであることを總括的に主張して置いた。

あの記事は、時が時であつた故であらうが、一般に可なりに反響をよんだやうであつた。しかし讀者の間には同時に、無產政黨と一口に云つても各黨派の間には主張に可なりな相違を持つてゐる筈であるが、私はその中のどれを支持せよと云つてゐるのであらうかといふことを問題にして、今でも時折りそれについて質問をされることがある。無產政黨がそれ〴〵にうけついで來てゐる傳統と各黨派の相關々係に充分に深い理解がなければ、この問題は十人が十人に當然起つて來る疑問であつて、實際に社會的に立つて婦人の爲めにそれ〴〵のところで働いてゐる婦人達の間でも、その對立關係も相關關係も一緒くたにして考へられてゐる徵候がないでもない。今又府縣會議員の選擧が始まつて婦人達もその應援で仲々忙しい様子であるのに刺戟されて、私はこゝでごくザツともう一度無產政黨と婦人との關係について觸れて見たいと考へる。

ポスターを書かうとする時に、その原因結果のやゝこしい一聯の論理を書きつける者はない。主張する時は、場合によつては言葉は短ければ短かいほどよいことがある。

二

總選擧前に發表した無產政黨と婦人の關係に關する私の文章は、問題を根本的に闡明するには餘り短かつた。それ故に讀者の間に種々の疑問を生じたのであつたが、私としても實はあの文章をもつて問題をあのまゝ放置する積りはなかつた。反對に、婦人運動界にひろがる民主々義的傾向に對して引續いて私としての批評を試みるつもりでゐたのであつたが、多忙の爲めそれを果すことが出來ないでゐるうちに社會の事情が變化して、私のやうに自由な言論の發表機關を持たない者にはさうした批評的文學の發表は益々困難となつて來た。それで今日迄その儘に來たのであつたが、幸ひ本誌が發刊され婦人の問題に關する自由な議論がある程度迄許されることゝなつたので、今後は機を見てそれらの諸問題に觸れて行くつもりである。

日本無產政黨は、二つの異なる主張の下にこれ迄四つに團結して來たことは人が知る通りである。四つの政黨の中では社會民衆黨と日本農民黨とが社會民主々義を主張する政黨であり、日本勞農黨と舊勞働農民黨とがマルクス主義を背景として團結してゐる。前者は專ら合法的の手段によつて議會になるべく多くの議席を得、投票權を行使することによつて理想社會の到來を促さうとする黨派であり、後者の方は合法的な議會運動もするにはするがしかし前者のやうにこれに重心を置くことをせず、それと並んで大衆の日常鬪爭を行つて勞働者や農民の幸福を確保しようとする政黨である。

社會民主々義の主張の根本には、議會政治に對する絕對の信賴がある。議會は民心を反映する機關であつて政治の正邪を見分けるバロメータアであるといふ見解は、社會民主々義のよつて立つ土臺であり、同時に又その致命的な缺陷である。議會に對するかゝる無批評的な態度は、日本のやうに大衆の政治的意識が既にある程度迄進步した後迄も長く普通選擧權すらも與へられないで放置して置かれたやうな國柄では、最初からその本質の批判をもつて見られ、到底智識的階級の熱心な支持をうけ

ることが出來ない。

實際に、社會民主々義が期待してゐるやうに、議席の獲得とか權力の分配とかいふことで、（序に云つて置くが、社會民主々義はその理想的な姿では明らかに分權主義である。資本に隷屬後の姿のみを見て集權主義であると考へるのは、粗暴な考へ方である。）階級矛盾の解決が完全に出來るなら、誰にも文句はない筈である。それが實際上に獲得するものは、無産階級にとつては反古同然なものであることが各國の政治闘爭の過程によつて證明されたからこそ、無産階級の苦惱と動搖とが生れたのである。

手近い英國の例を取らう。英國は二三年前勞働黨が選擧で絶對多數を制することが出來て、二度内閣を組織した。民主々義がプロレタリヤの眞の解放の爲めに何かゞ出來るのであつたら、こんないゝ機會はないと思はれた。しかし根強い資本主義の政治的からくりは、勞働黨に政權を明け渡す迄には、必要な權力の中樞は、閣外に完全に引上げられてあつた。『一度資本がこの政體の支配權を得その勢力を適確堅固に樹立した以上は、人とか制度とか黨派とかゞ變ることは、何等問題ではないのである。』實際に勞働黨は、二三の國家的施設に成程他の政黨よりは幾分かは進歩した施設を見せようとしたことは事實であるが、それらも大部分その實現を見ないうちに内閣が瓦解した。

けれど、全無産階級が望んでゐるのは、その種の一部分の小數プロレタリヤの生活を幾分かよくする程度の施設であつてはならないし、又實際にさうではない。無産階級は、全體として浮み上らなくてはならない。この點でブルジョア階級の支配權の××を主張する××××の主張が最も正しいのである。從つて××××の指導精神による政黨である舊勞農黨と日勞黨とが、最も正しい眞の意味の無産政黨であるといふことが云へる。

同じ無産黨でも、その右翼と左翼とでは指導精神にこんな開きを持つのである。しかしこれらの無産政黨は又一方で一つの共通した立場を持つてゐる。それは階級の對立を認め、その對立が必然に伴ふ階級闘爭を認めてゐる點である。私共がこの共通點で無産政黨を一つのものと見、一つのものとして語ることは少しも差支へはない。私共は最右翼の日農黨あたり迄を含む

無產政黨を、この一線の上では一つのものと見る。(でなければ、無産政黨の合同問題など起る筈はない。)こゝ迄がプロレタリヤの鬪爭的前衛が直接に且つ効果的に働きかけることの出來る境界であつて、例へばこの境界内の凡てを私共は自分達が望む通りの鬪爭的分子とすることは出來ない迄も、この分界線は又反動の勢力によつて動かされる怖れのない一線である。であるから、私共は社會主義に幾分でも理解を有する婦人に對して主張する時は、無論無産政黨中の最も鬪爭的な政黨を支持することを勸告する。しかし一般大衆の婦人は、これと同じ譯には行かない。これらの婦人達は決して一時に鬪爭論に變質せしめることは出來ない。急務は彼女達をそれ〴〵の境遇と力とに應じて無産政黨の中に吸收して行くことである。そして一方彼女達に鬪爭的な教育への機會を與へると共に、一方未組織の原野にさらして置いて反動勢力の荒らすに委ねて置くことの危險より救ふことに努めなければならない。

三

無產政黨が婦人の投票を喰物にしようとしてゐると云つて、もう今から大變頭痛にやんでゐる人もあつたやうであつたがあれなども無産政黨の内の二つの指導精神の對立關係と相關々係とがハッキリ分つてゐなかつた爲めに、甲の本質を乙にとり違へ、乙のそれを甲に當てはめて批判した結果である。

無產政黨が婦人の投票を喰物にしようと心がけてゐるといふ非難は、或る社會民主々義の無産政黨の場合になら、或る程迄は當つてゐるとも云へよう。

前にも云つたやうに、社會民主々義は投票によつてその理想を行はうとするのであるから、理想を正確に實現せしむる爲めには、第一に何でもかでも議席を多く獲得することを必要とする。第二に、それは努力によつて議席をうることに成功し、例へ政黨としての最大限度の權力を振ふことができる地位にその政黨が押し進められることが出來たとしても(それすら仲々容易には出來ないのであるが)與へうるものは法律上の不平等の除去だけである。法律上の不平等の除去は、更に進められるべ

き經濟的平等への運動を圓滑ならしめる爲めには獲得せられねばならないが、それ自身では無いより有るが優しな程度のもので決して無產階級の境遇を本質的にかへることは出來ない。

この結果を見通しての上でなら、社會民主々義の無產政黨が、婦人を喰物にする危險があるとは云へると思ふが、しかしそれ故にこそ無產階級の指導精神が是非共マルクス主義のそれに置きかへられなくてはならないのであつて、マルクス主義を背景としてゐる政黨のみが、被壓迫民衆の眞の解放を遂行することの出來る唯一の政黨であることが證明されて來るのである。

マルクス主義は、議會に於ける議席獲得運動をその廣汎な社會の全般にわたる鬪爭の僅か一つの形と見てゐる。議會運動は勿論無產階級の解放運動にとつて可なり重要な性質のものではあるが、それは社會民主々義に於けるがやうに解放運動の全運命を支配するほどの重要性を與へられてはゐない。從つてマルクス主義を標準する政黨が一つでも多くの議席を得やうとしてたゞその爲めに狂態を演ずるといふことは論理上想像を許さないことで、（總選擧に當つて立候補した人々が、政戰たけなはな頃政黨の本部に當てゝ『當選のおそれあり』といふ悲鳴の電報をよこしたといふことが同志達の間で樂しい笑話の種に傳へられたことがあつた。又その反當選第一主義が一部のフアンの間で問題になつて非難の聲をあげてゐたことがあつた。）婦人の政權獲得を見越して、心にもなく婦人の利益を保護しその解散を約束するやうに綱領を示してゐると想像するなどは、穿つてゐるやうでゐて實はその人は無產政黨について常識以外のことは何物をも加へないことを曝露してゐるに過ぎない。

四

益々意識化し組織化されて行く資本の勢力は、既に多くの婦人團體を製造して來た。愛國婦人會、赤十字等の强い反動的色彩はこゝでは問題にしない。しかし更に新しく組織運動を進めて行く女子青年會、處女會、乃至は教育その他の國家的施設に働く婦人從業員の組合的傾向のものに至る迄、整列されつゝある婦人反動豫備軍の隊列の何と長いことであらう！これらは勿論政治運動の團體ではないが、資本の一令の下に何時でも反動化す團體であることはいふ迄もない。婦人に參政權が與へられ

た時、彼女達は個人的に又團體的に既成政黨の支持に舔直に走るべく準備せしめられてゐる。

これらの反動的婦人の大列隊を前にして、私共は無産階級の婦人達の組織が一向に進捗しないことを遺憾とするものである。工場や農村にある者は組合に、その他の散在してゐる者は無産政黨に婦人も男子と共に組織の中に引き入れる運動が起されなければならない。そしてそれは早ければ早いほどよいのである。

婦人を婦人として孤立せしめようとする企てほど、現實を知らぬ向ふ見ずの議論はない。組織化し意識化して行く資本に對して、これと對峙して無産階級を一つの勢力に形づくつて行くことが今日の私共の焦眉の義務である。この間にあつて婦人を孤立せしめることは絶對に出來ない。婦人を今少しでも長く孤立せしめて所謂『自由』の原野に放置して置くことは、婦人を反動化の爲めに騙して待たせて置くと同様である。私共はこの種のまことらしげな反動論は、絶對に排撃しなくてはならない。

婦人を政治的に孤立せしめようとする非政黨運動は、それがブルジョア階級の婦人達の方にさし向けられ、ブルジョア婦人の政治運動を封ずることに役立ちうる時にのみ無產階級的である。

ブルジョア婦人團體の反動化に對して熱情的な抗議を得せず、却つて僅かにその最初の一歩を始めたばかりの無産婦人の政治的行動を誹謗しやうとする態度は、その結果として無産婦人の結成を妨げ、その事が直ちに有產階級の利益となるのであるから、全然反動的であると云はなくてはならない。

イギリスでは、保守黨が最後の婦人選擧權の擴張を行はうとしてゐる。恐らく保守黨はこの選擧權の擴張が自黨を有利に展開して行くといふことの見極めがついたので、この法律案を通過せしめようとしてゐるのである。婦人はイギリスの保守黨によつてその强い反動性を世界に證明されようとしてゐるところだ。資本主義はイギリスでも日本でも今が眞實間である。反動的化物の横行は敢へて珍しいこともない。

しかし、私共は？　組織へ！　組織へ！　今日の無産婦人の急務はこれである。組合のあるところは組合へ、政黨のあると

ころは政黨へ、私共は加入しなければならない。そして眞に階級的な闘爭團體によつて明日の爲めの訓練をうけなくてはならない。若しそれが不可能な何等かの事情の下に置かれてあるのなら少くもその階級の活動を妨げない程度に行爲する立場を今日から自分の爲めに選んで置くことは、自己の解放を無產階級の勝利に負ふ私共婦人の義務であると私は考へる。

（この稿は三月下旬書き上げたものであつたが、ある理由の下に發表の機を得なかつたものである。今回多少の加筆は試みたものであるが、材料その他心に充たないものがないでもないが、多忙の爲めに全部の構圖をかへて再び新しく書き下す餘裕がなかつた。讀者がこれを諒とされんことを乞ふ。）

婦人先覺者の死

エリメン・パンカアスト夫人、六月十四日朝逝く。年七十四。人も知る如く女權擴張論者として世界的聲望をもつてゐた。

夫人の著作には「マイ・オウン・ストーリー」やその他女權運動、救貧事業のパンフレット類が澤山にある。夫人の超人的の努力は報いられたといつてよいが、若かりし頃の夫人の運動は狂暴で頑强で、投獄された事も幾度かあつた。その度ごとに飢餓同盟を敢行して、あくまで主張の貫徹に突進した。

一九一四年の世界大戰勃發には、夫人は一先づ參政運動の休戰を叫び、熱心な愛國運動に移り、自ら農場や工場で働いた。夫人のこの行動によつて、戰後三十歲以上の婦人は、遂に參政權を獲得することになつたのだつた。

夫人もこれを轉機として傳道運動に従事したりして、往年の女闘士も晩年には、神妙な女說教師などといはれてゐた。

令孃シルヴィア、パンカアスト孃も亦母夫人に劣らぬ婦人參政運動家として知られてゐる。

今年は英國に於けるフラッパーウォーツも認められ、頃日の總選擧にはまさに、空前の盛況を見られたのに先だつて、夫人の逝かれたのは、誠に惜しき極みである。



「母をこえる

伊福部敬子

婦人雑誌や新聞の戀愛小説が、同じ筋と構成舞臺とをいく度くりかへしても女の心に飽かれないのは、何故であらうか。これをよく考へてみると、女の心理、その男と異るところがわかつて面白いと思ふ。

小説の、筋の運び方や、性格描寫の巧拙や、すべてそれらのことを味つて見て、よいとか悪いとかいふのならば、一度で足りる。少くとも、數度數十度、同じことをくりかへされたならば、もう興味に値しなくなつてしまふ筈である。けれども、女が戀愛小説や通俗小説をよむのは「小説」の世界を自分以外のところにおいて見たり考へたりするのではない。自分自身がその小説の女主人公になつてしまふのである。自分自身が愛しき人を得て幸福境へ急ぎ、自分自身が美しく悲しい戀をして涙をながすのであつてみれば、いく度とても飽くことがないのは、むしろあたりまへであらう。事實は、貧しい家の、男ならばさういふものに對しては興味をもたないであらうと思はれる境遇にある女が、やつぱりピアノや自働車や眞珠色のプロムナード服で飾られた小説を好むのは、客觀することを少しも出來ない女の特質のためではないだらうか。もし悲慘な彼女たちが、悲慘な生活を描いた物語をよむとすれば、彼女は現實にも空想にも、二重にその悲慘を味はなければならないから。

女のもつてゐる意識の灯は、丁度螢火のやうに小さい。そして、男のそれは、高い柱の上にともつてゐる街燈である。双方、手元にまで來る光度は、或時は同じでもあり、或時は

異るとしても、その光の性質は根本的にちがつてゐる。女の持つ意識の灯は、常に自分と共にある。自分をはなれては、無い。そしてこれは即ち「愛」といふ字と書きかへて誤りでない。

これは余談に亘るけれども、先日新潮誌上に載せられた諸家の婦人雜誌についての合評會の記事をよんで、私は、誰もこの婦人の心理の特異性を承知せられないのを、不思議に思つたことである。

私はこの頃、「女の演繹論理には不得手である」といはれた言葉を、思ひおこしてくりかへしてゐる。「日記や手紙を書かせれば女は男よりも上手だ」この言葉も尤もな言葉であると思ふ。女は、どのやうなものをでも、自分のもつてゐる螢火の光圏の中にまで持ち來らねば、わからない。他人の意見や主張や、まじめな生活記錄をでも、自分との間隔をおいて觀ることは出來ないで、「それでは不自由でせう」とか「私にはそんなことは出來ない」とかいふのが、一般である。さうして、女の、自己肯定の殼は、男のそれよりもかたい。

これまで稱へられた「母性」、婦人の最高の榮譽として禮讚せられた「母性愛」は、このやうな心に子を抱いてゐる女の相である。子のためには自分を捨てゝ省みずに、といふのが母である。それほどに、母の子供にかける愛は强い。といふのも、子は母にとつて、別のものではない。自分の一部が子供なのである。自分といふものが、母となつて、子供にまで擴がつたのだと思ふ。このやうにあれ、かのやうにあらせ度い、母は子を抱いて、母と子のゆくべき道を、自分のもつ螢火の光で照らして、ひたすらに幸福境にいそぎつゝある。そしてそのためには、あらゆる苦難にたへることが出來、又鋭敏に感覺することも出來る。けれども、螢火の光圏外のことは、何にも知らうとしない。子を抱いた自分の一生活體が、今何れの部位にあるか、そのやうな光にてらされ或はかげらされてゐるか、彼女はそれを考へてみようともしない。

母の心境一杯にひろがつてゐるものは、その子供である――そしてこれは、過去の「母性」である。私はこの「母」を越えなければならないと思ふ。

かつて私は、いや今も、「母性」を禮讚した。婦人として到達しうる最後の境遇、最高の榮譽であると思つた。かつて彼

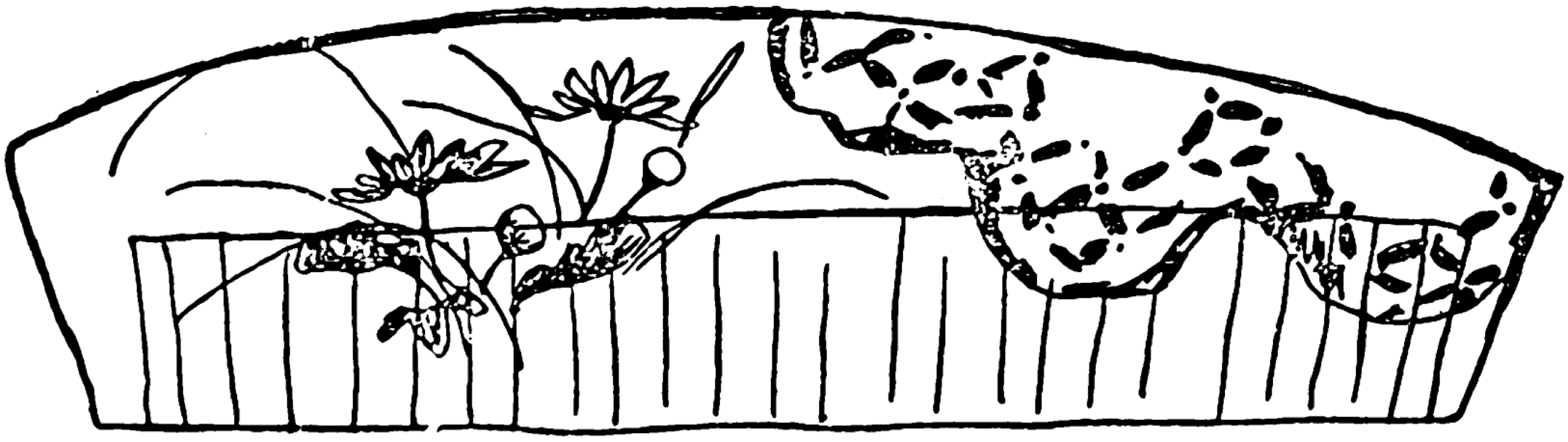
女は少女であつた、處女であつた、妻であつた、そして今「母」である。彼女の抱含する世界は女として最大のものである。洗練され精選され變化されつゝ、母の中に殘つて生きてゐるものは、本當の、確かなものである。彼女の感ずること、考へることには、信頼することが出來る。――私はいく度もこのやうなことを書いて來た。けれども、今私はこの「母」を越えたく思つてゐる。母をこえて、より高く、よりひろきものへ――これが私のいのりである。

自分を中心とした母と子とを映し出す螢火の光圏、個人主義的な「母」をこえて、更にひろい「社會」を意識し、「社會」を感覺する。かうなつた時、それは從來の自己中心、自分がその夫と子供にまで擴大した「母」ではなく、あらゆる子供、あらゆる人間をその心に反映する「社會母」ともいふべきものであらう。「母性」の心にはとほく、些かもひゞかなかつた社會の歪、醜、不幸、それらのものが社會母の感覺にまで一一ひゞいて、默視するに堪へられないであらう。これこそ、私は婦人として「母性」よりもより高き榮譽であると思ふ。

けれども、私のおそれるのは、個人主義的な「母性愛」を通らないで、直ちに社會愛に向くことの危險である。今日いろ〳〵の社會運動に身を致してゐられる婦人たちはさうでもないであらうが、「母」を通過しないで、社會愛にいつてしまふことが往々あるやうに思はれる。

或時、私の尊敬してゐる婦人運動家は、「自分には乞食の子も自分の子も區別はない、自分の子だから、かくありたいとも、かくあれとも特別に思はない」といはれた。その當時、どうしても私にはそれがわからなかつた。私は、私の子供のことばかりしか考へられなかつた。私の心境一ぱいに擴充して、私の子供が在つた。けれども、今私は、自分の子供たちだけの母、これまでの「母性愛」を通越しようとしてゐる。そして思ふことは、自分の子と乞食の子と區別がない、とはいつても、それは乞食の子と同樣に自分の子を思ひ捨てることであつてはならない。自分の子と同じにまで乞食の子を愛することでなくてはならないといふことである。

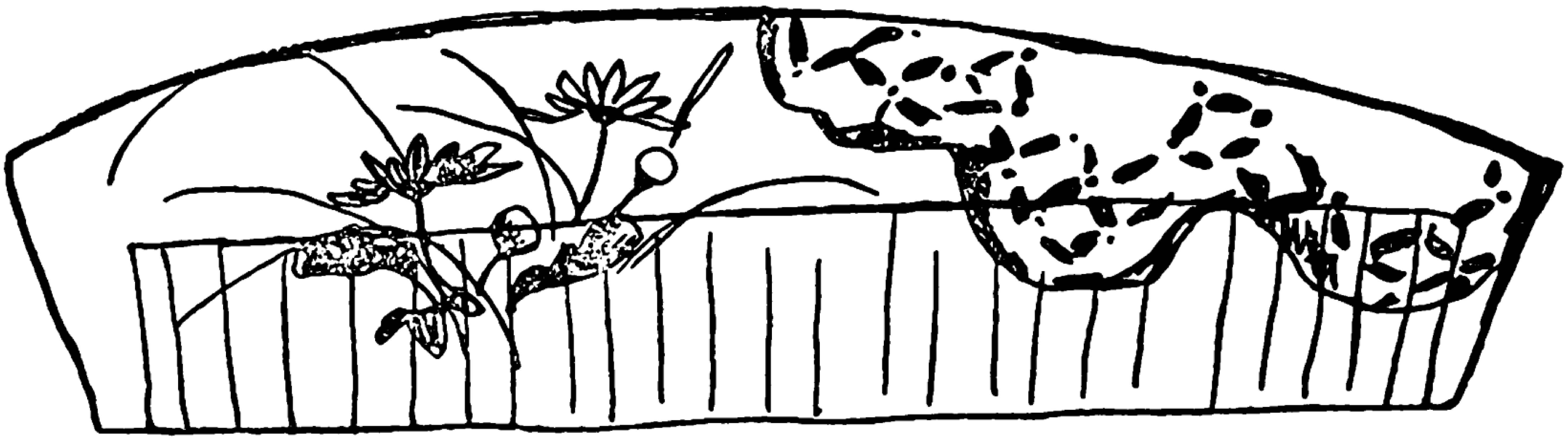
「母」を超絶したのではなく、超越しなくてはならない。小さな、個人的な「母」に徹し、擴充し、それを超越して、更にひろい社會母にまで到達したい、――これこそ私のいのりである。



春の臺風

今井邦子

夕刊は台風（おろし）來ると報じたりしみらに雨は降りいでしかな
台風は琉球東南をおそひ居り此蒸（む）す宵に螢つかまへし
台風にかはらむ雨か萩の芽をしみらにぬらしこの降る雨は
琉球の東南大東島を北東に台風（おろし）本土に進みつゝあり
庭若葉ややあれだちし雨にもまれ台風東京をそれて去りけり
あれすぎし若葉の照りやひとときに夏來るごとし苗賣りの聲
そことなく歩む道べに片よりに雑草（あらくさ）の花さかる頃かも
降りやみし雨間ともしく庭石に伏したる萩はややおきにけり
春の台風（おろし）すぎ去りにけり庭石に伏す若萩のうれみじかくて



尼寺にて

柳原燁子

五月なかば今年四つになるふき子をつれ久しぶりにて京都に行く、紫野の尼寺に宿る。

尼僧らの洗濯物のしろききぬ裏庭に見えてまひるしづけき

おつとめの鐘さへけさはしらずして寝入りたりけり旅疲れ覺ゆ

ひとあさは我もまぢりて本堂のみあかしのまへに手を合はせけり

めさむればいざこなたへと尼僧らのあつきもてなしの嬉しき朝風呂

雨戸さゝぬ寺のならはしの氣樂さよ障子の外は月あかりなり

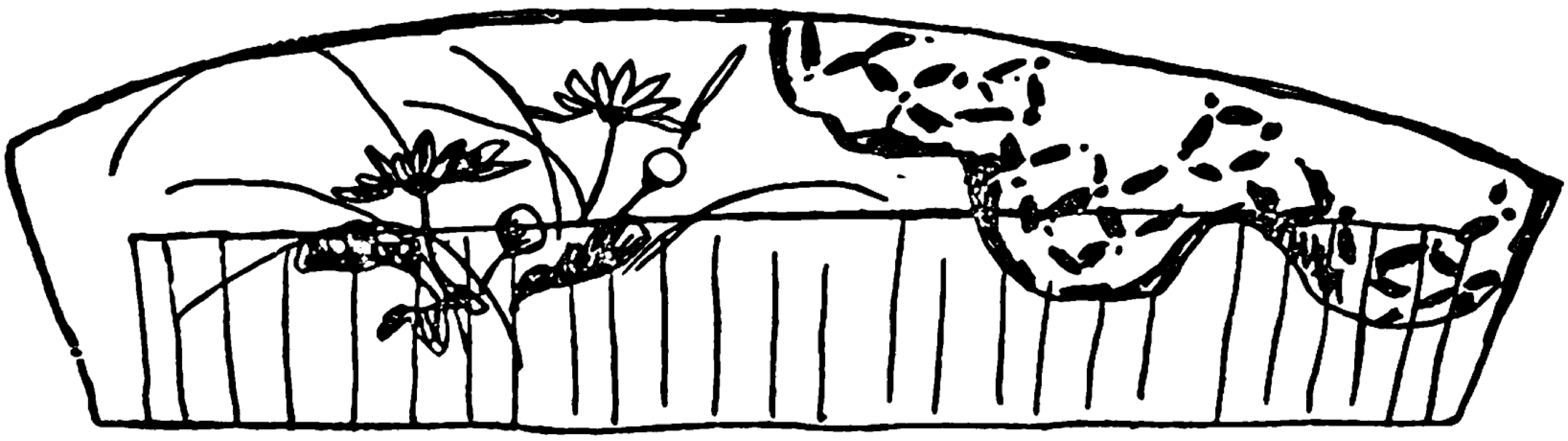
ほの〴〵の明けそめたれは尼僧らの看經の聲の聞えくるなり

教へられ耳そばだてゝきゝにけりめづらしきかも山ほとゝぎす

尼たちとなれてあそべるわがふき子人形の髪をみなむしりける

瑞孝尼と同じ姿よとよろこびて母にぞ見する髪なし人形

障子あくれば衣笠山はま近かなり初夏の風も京にぞありける



みとりつつ

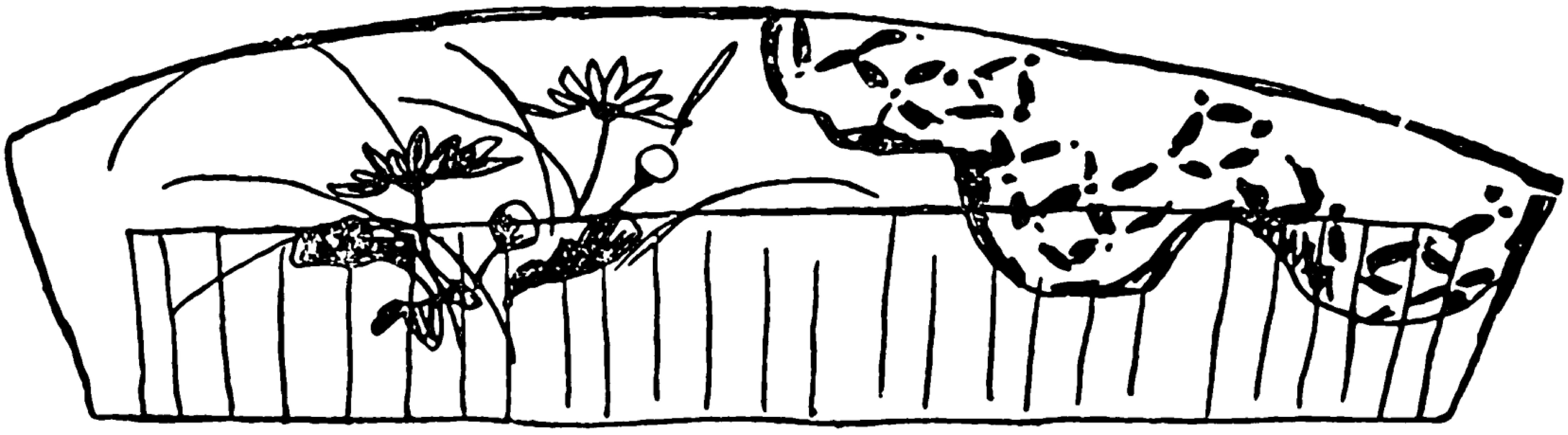
岡本かの子

みとりつつ

わが夫のいためる足をさすりつゝ見上ぐる松の翠更けたり
わが夫の身のいたみをばさすりつつ小夜にして聞くほそき蚊の聲
病むひとの怒り易きを堪えにつつこのごろ親し松風の音
わが夫の病よろしきたまさかのうれしさやわれは聲擧げ唄う

初夏雜詠

この丘の竹の林の間よりはろけき街の燒くる火を見る
この年の夏の暑さを思はせて茂りそめたる青桐若葉
をみなごの夜の歩みを遠く來て夏の凉けを覺えぬるかな
水無月の雨曇る空やうち渡し野に敷く草の花の濃かさ
葉がくれに晝ともりたる電球の紅きはまがう大き木の實に



朝夕にみる

若山喜志子

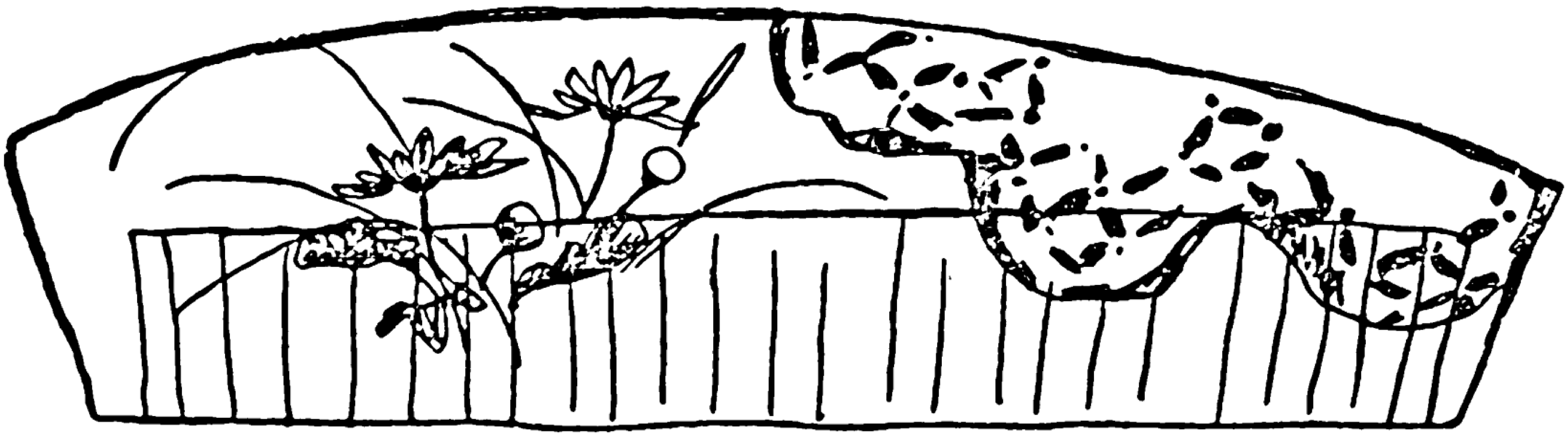
縁先

台所先きの噴井の親土管から鉛管でひきまわされてある水が、茶の間の縁先きにも一本出てゐて、家の者の誰彼が随時に手や顔を洗ふようにと、簡單な流しがとりつけてある。子供たちが「只今」とカバンを置くとすぐこの手洗場に來て、のどをガロガロし、手と顔と、しまひには足まで拭いて、それからおやつを食べるといふことに、いつかしら癖がついてしまつてゐる。朝など、××さん、ガロガロは?、と注意すると「あさう〳〵」と快く行つて淨めてくる。

その流しのつひ向ふに一本の可成古い梅の木が植ゑられてあつて、今年で三度目の夏を迎へたのであるが、植ゑた翌年から感心によく花をつけては鈴なりの枝を茂らせ、毎年入梅となるをあひづに黄味を帶びてくるので、落しては漬けこんでゐるが今年などほんの少しと思つてゐたのに、それでも大きな笊に二杯もあつた。

「みんなこの木を大切にしませうね、そして時々水をかけてやるのよ」

と、大ていの日は二度や三度は洗面器一つぱいの水が、バシヤン、と打ちかけられるので、幹には



朝夕にみる（若山喜志子）

いつかしら青い苔が出來てゐる。

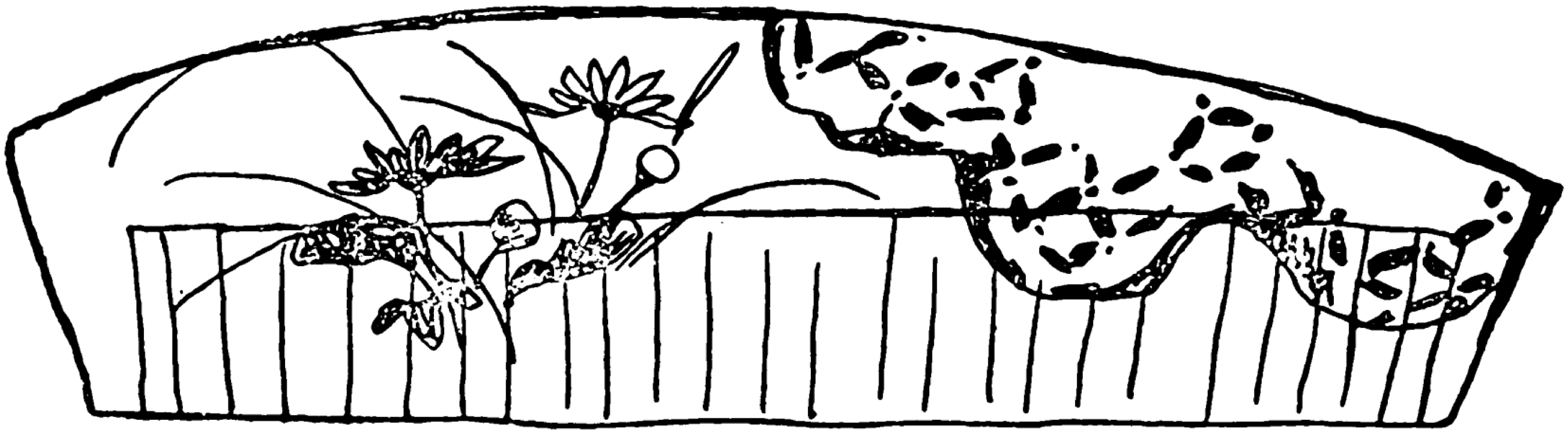
その梅の木の根元に、おなじ時に植ゑこんだ糸萩がある、やはり毎年よく茂つては花を咲かせる、しかし、昨年もまたそのまへの年も永く家をるすしたので、この花のほんとのさかりをまだ知らないでゐる。つひ昨日の朝であつた、私は起きぬけの細帶のまゝで庭におりた、それは、せつかく伸びた萩の穗先におびたゞしいあぶら蟲の群がりを感じたので、いまづ蠅取粉といふあのペカン／＼と音のする平たい罐をたづさへてゞあつた。露つぽいしだれ葉をよけて近づき、もう一度見てからとそつと手を觸れてみたらば、それはあぶら蟲ではなくて、思ひがけなくもやがて咲くであらうところの細かい細かい蕾の群がりであつたではないか。私は勢ひこんで來た手前、あつけにとられてぢつと立ちつくして眺めてゐた。

その日の午后である。

「母さん萩が咲きはじめたのね」

と、小さい女の子がいふ、どれと出て見たらば、ほんとに濃い紅に近い色の花びらが二つ三つ思ひもかけない葉がくれに咲きかけてゐるではないか、そこで私は、わざと大袈裟に驚ろいた表情をして發見者にまん足を與へ、しづかにも一度朝見たあぶら蟲の蕾を見たのであつたが、實におびたゞしい蕾の群がりではある。まだ梅雨も中ばといふ今日に咲き初めたのでは一體、萩といふものは秋のものかしら、夏のものかしら、或ひはもはや今が夏の季節の盛りであつて、七月と云へば秋ではあるまいか、と季節のあはたゞしさを感じてしみ／＼と淋しくなつた。

西瓜畑



朝夕にみる（若山喜志子）

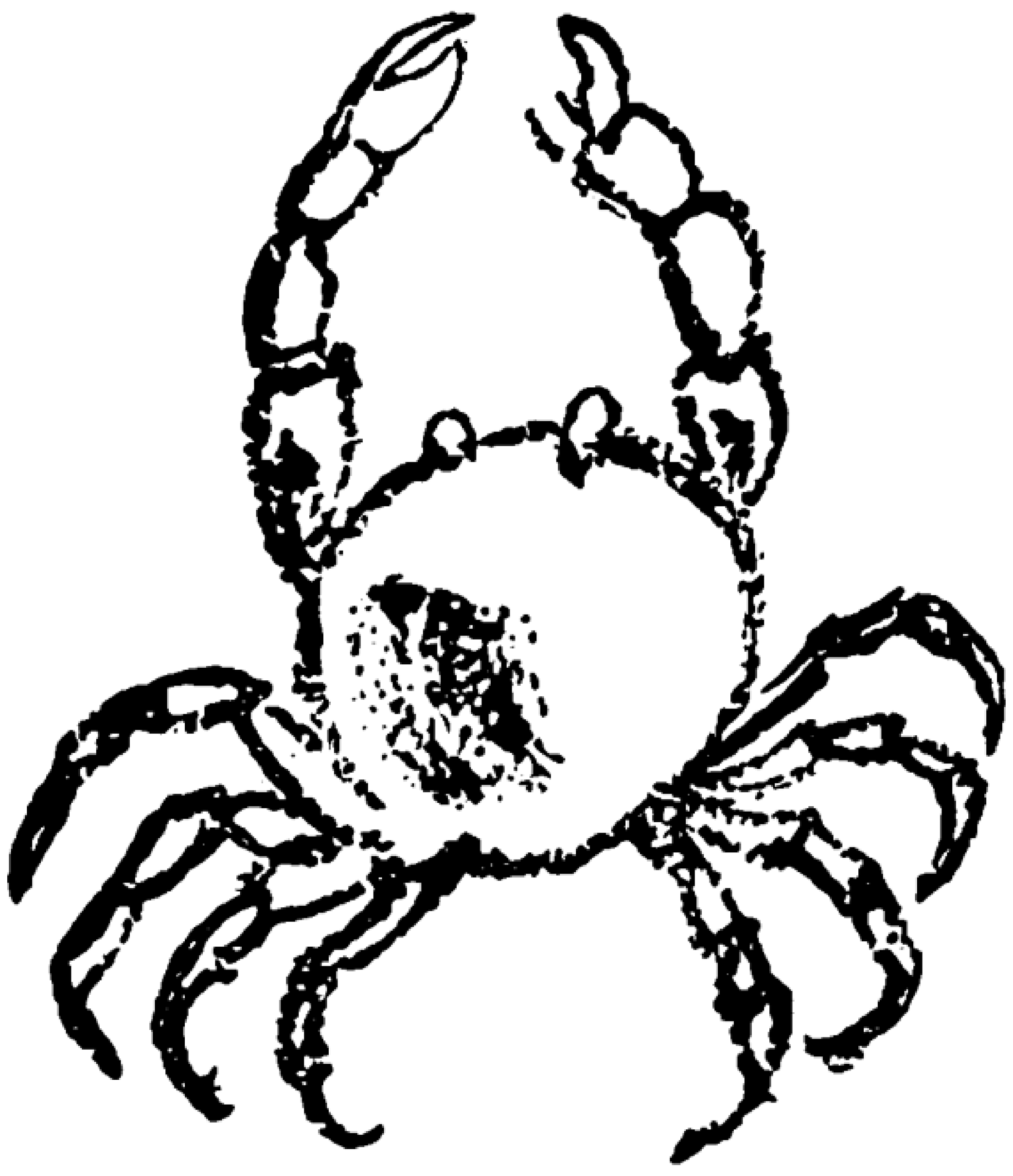
今年はひとつ西瓜を作つて見ませう。とTが春早くからの意氣ごみで耕作にとりかゝり種をおろしたのが、三月のすゑにはそろ〳〵芽を出しはじめ、追々と心葉が伸びてくるにつれて家内中の者の興味の的となつていつた。「西瓜をつくるもいゝが、瓜蠅のやつが心配だ」とTは口ぐせに云つてゐた瓜蠅。その瓜蠅が四月の中ばごろからぽつぽつ出はじめた。その防禦には古蚊帳をこはしてやる約束であつたが、いよ〳〵の時になつてそれは去年屑屋に拂つてあつたことを思ひだし、私は内心あはてゝ了つた。で仕方なしに子供の使つた枕蚊帳を一帳見つけ出して來て、兎に角くの申譯をし、あとは新聞紙でまにあはせる事にした。

五月となつて八十八夜を過ぎると陽氣も次第に順調に向ひ、それにつれて西瓜の伸びる勢ひと、瓜蠅の跋扈とが平行してさかんになつて行つた。

「せつかく伸びた大切の芽を、今朝はいくつか蕊なしにされてしまつた」と泣かんばかりにして訴へてくるTの顏はあはれであつた。私は初めのうちはそれほどとも思はなかつたが、「今いくつ殺してやつた」とか、「なかなかづるくて足音がするとすぐ逃げていきやがる」とかきくので、どんなものかと見に行つてみた。

みると成程、せつかくびようとする大切な心葉にいくつものキズが出來てそのために蔓の成長が止まつてゐる。そして薄い金茶色の小さい甲蟲が足音をきくと、パアーとまひ立つてつひ近くのもろこしの葉だのトマトの葉だのに逃げてゆく、全く憎らしい人を馬鹿にしたような蟲である、それを見てから私もTのなげきに深く同情し、ひまがあれば日にいく度でも出て行つて殺してやる氣になつた。

七十坪程ある私の大切な野菜畑の半分は西瓜のために横領されてゐるのだからTのやつきになるのも無理はない。七つほどの株からそれ〴〵に這ひひろごつてゐるやはらかな蔓のゆくゑは、やがてどんな結果になるものか、今の處一本の蔓に二つ三つづゝのなり花がついてほのかに黄ろく咲いてゐる。



獅子は抗しがたし（感想）

——三角關係の一端より——

生田花世

序

一人の女の闖入者があつて家庭の平和は失はれて了つた。家婦にとつてかういふ經驗は何と云つても苦い痛いものである。第三者がきけばたゞ一場の輕い話柄でしかないかもしれないことが渦中にあるものにとつてはあるひは生死の問題になり得る。ありふれてゐることでしかも古いことである、それだのにかゝる事件は永久に新しいといつてもいいのである。何といつても兩性問題のもつとも深刻なものはかういふ苦惱と解決の心理的道程であらうとおもふ。かゝる種類の苦惱記錄——それを藝術ならずといふか？藝術か、非藝術か、私はそれを知らぬ。たゞやみがたき心ありて、こゝに男女三角關係苦惱錄を作る。

——三月十八日午後一時十分——

私は今上野からエンタクでかへつて來た。激越になつてゐる私の心にとつて自動車の快速力は快いものだつた。春日町の坂を上る時などとても凄いほどいい氣持だつた。むかふからくる自動車にまつしぐらに打突かりあへばいいナと思つたりして……。粉碎と思つて……。

×

然しうちには觀音さまが私を待つてゐるのだからとかうお

もつて、自動車で私はかへつて來た。うちの觀音さま――それは女中のよしだ、親切なよし。

×

今日の上野の數時間はまことにこたへた。こんなに心にこたへたことは今までにないことだつた。獅子を見よう……どうしてそんなに思ふやうになつたのか分らないが、たゞに獅子が見たいので、エンタクをとばして、上野の廣小路で下りた私は左側の喫茶店でミルク苺と紅茶をのみ、莨を一本ほどすつてから、多くの人のぞろ〳〵と數かぎりなく歩く日ざしの少しポカポカする路上の埃、春の埃をすひながら公園の中に入つていつた。

×

精養軒の少し手前の茶店の赤毛布をかけた緣台が私の心をひいた。私は小憩して、蜜柑を三つたべ、又煙草を一本すつて、十五分位、不忍池を見てゐた。氣の重いといへばなかつたが……。

×

『伊藤仁太郎君當選祝賀會場』といふ札の出てゐる精養軒のまへをとほつて、ぞろぞろと歩く子供づれの夫婦やいろいろの人について東照宮の石燈籠の中をよぎり、石だゝみの參道に出た私。

ああ、東照宮。ここにまつられてゐる人はだれだ？ここにまつられてゐる人は德川家康。大苦惱の人だつた德川家康公、大苦惱に打克つたその人……。私はこの古い時代の大人物の大苦鬪といふこと、大困難とたたかつたといふことについて考へて見ずにはゐられなかつた。それでひきつけられるやうに參道をすすんで行つた。門のところの左右には上り龍の木彫がある。それに金網がかかつてゐる。私はそれを見たそして手を淸めて五六人の人々の中、拜殿の前に立つて拜をした。

×

この私の一世一代といふ氣のする苦惱の時にからうして詣でたといふしるしにと繪葉書を賣つてゐるのを買はうとして、拜殿左のところに行つて繪葉書を下さいと云つた。いくらですかとたづねると二十錢といふ。五十錢を出すとつりがないといふ。それで二組かつて十錢のつりをもらつた。

×

ふと見るとその繪葉書を賣る人の机の側、私の立つてゐる

眞正面に、參詣者に見せる目的でこちらにむけてゐる額がある。『東照公遺訓』といふのだ。

『人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし。いそぐべからず。不自由を常とおもへば不足なし。心に慾おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、いかりは敵とおもへ。勝つことばかり知つてまくることをしらざれば害共身にいたる。おのれを責めて、人をせむるな。及ばざるは過ぐるよりまされり』

×

ああ、これは何といふことだらう、この『東照公遺訓』を今日ここで私が見るといふことはと胸が一杯になつて私はイんだ。私の眼はそれらの文字にくひこんでいつた。『人をせむるな』といふ、この私のうらみの時に。『及ばざるは過ぎたるにしかず』といふ、この私の狂騒の時に。『いかりは敵とおもへ』といふ、この私の腹たゞしい時に。私はすつかりこたへてしまつた。

『人の一生は重荷を負て遠き道をゆくがごとし』といふ、私はすつかり心がしんと沁みて了つたのだつた。さうでないといへないから。『堪忍は無事長久の基』といふ。さうではないといへないから。

×

だが、感情はなかなか……とおもひつゝ東照宮を出て、櫻若葉の中の五重塔を左に廻つて動物園の前に出て行く。灰白色の高い塀、上に突出て見える熊のための檻一つ二つ三つ……。この塀の中に獅子がゐる。こんなにも見たい獅子がゐると私はおもつた。ところで、五圓札一枚しかない。小錢がないのに氣がついたので、櫻の木の間の茶店の縁台に腰をかけた。そしてお茶をもつて來させ、シキシマ三つ買つて、五圓札をくだき、何百人といふ人々、數台の自動車の群がつてゐる動物園の入口のきつぷ賣場の前に立つた。

×

ひどく多い入場者だ。やつとの事で中に入つた私は、他のいろいろのものに目もとめないで、獅子の檻のところへ、胸を彈力的にしながら近づいていつた。そして人垣をわけて近づいた。そしてとうとう見た。それを！

獅子はひろい檻の中にねそべつてゐた。巨大なその雄獅子は左の方の岩の上にねそべつて鐵條ごしの春の太陽を軀一杯にあびて、その腹部をユラユラと波立たせてゐた。ややもた

げてゐるその臀部……その尾……。

私の眼はそのねそべつてゐる雄獅子の姿態にパツと心のはぢけるやうな感じ……そして次には氣のとほくなるやうな異常なショックをうけた。これが獅子だ。これが猛獸の獅子だ。つかみかゝつて人でも馬でも食つてしまふ獅子だ。私は柵の外にゐる小さいかよわい小羊——何ともいへず立場の弱いことを痛感するとが出來た。抗しがたいもの、强いものをはつきりと心に感じたいためにやつて來た自分のおびき出されたやうな情感はかういふ風にして凄い滿足を充たしたのである。

×

右のはし、岩の下の少し陰の方に雌獅子はむかふむきに寢ころんでゐる。そしてその姿容の上には春のむすやうな光と檻の鐵條のかげとが雄獅子の頭上に臀部にさうであるやうにあざやかにおちて綺どつてゐた。ぢつと見てゐる私の心にはこの雌雄の猛獸はつい今しがた×××といふ風にさへ感じられた。そして疲れ切つて二頭ともこんな風にぐつたり寢そべつて喘いでゐる、歡樂のあとの荒い呼吸をしてゐる！　さうでないにしてもそれに近い感じが灼くやうに私に映る。ああ、獅子！　さかんなる二頭の獅子、タイラントなる雌雄の獅子！　となりの檻の中には三頭の子獅子がゐるのを私は見た。なやましい眼で。

×

水鳥の池、鳥の家のある低地を見下すところ、虎の檻の右の方のベンチに腰をかけて、私は見下しつゝ煙草をのんだ。いつか人からきいた寂しい境遇の女はよく莨をのむといふことを思ひ出しながら。

私はもう青葉の梅の樹を見た。のどかなながめ、小鳥の聲、鷺の白い姿はやさしい。ぢつと私は見てゐたが、やがてベンチをはなれて、まつすぐに門を出た。獅子の外に何にも見たいものはないのだつた。獅子を見た。とうとう獅子の雌雄を見た。現場ならずとも、現場に近いものを見た。タイラントなる彼と彼女とを雄獅子と雌獅子との上に見たのだつた。彼と彼女、まつたく彼と彼女とは獅子か豹か、いづれにしても猛獸のたぐゐではないだらうか……。人をふみにぢる……。

×

咽喉がかはいて、もう一度、茶店に立寄つて紅茶をのみ、公園正面の石段を人々の波とともに下りて、エンタクをよん

で私は云つた。『牛込の××町まで……』と。

一散に、氣持よく自動車の疾走、それは私に肉體的に氣に入つた。自動車の中で私はあすも又、獅子を見に來よう、彼と彼女とを見に來よう、本能そのものを見に來ようとおもつたのだつた。今日のところ、他に私の見たいものなんか何もない。活動もなまぬるい、芝居もなまぬるい、旅なんぞいや、たゞ獅子だ、たゞ彼と彼女とのエゴイズムの前に立たうと考へたのだつた。

×

かへつてくるとうちの女中、氣立のいいよし、女中とはいへ、今のたつた一人の私には世にもやさしい救ひの觀世音とおもはれてくるよしの出迎へをうけて、やうやう私は人心地がつき、おちつくことの出來ることを感じた。

『火を火鉢にもつとほしいわ』

『はい』

とよしはいふ。

『水がほしいわ』

『はい』とよしはいつてコツプに一杯もつて來てくれた。

軒には私の小鳥たち、セキセイインコ、十姉妹、文鳥、べにすゞめなどみないそいそと飛び、さへづつてゐる。

『今日はいい春日だから……』と私はおもはず呟いた。

×

『要するに獅子に抗しがたし』

×

――午後五時半――

岩田はや子さん來訪。

『をぢさんは？』

といつてたづねる。

『ええ、今……神戸の方へいつてゐますの』

から私はいつた。

『まあ……よく御旅行ね、いついらつしやいましたの』

『一昨日よ、何だか妙な旅行なんですよ』

と私は苦わらひ……。

もの書く人にありがちのタイラント、さういふことを思想的な方面の動亂にくつつけて私はアウトラインを話す。この若い女の人はSの遠縁の人なので……。

『まあ、ひどいのね、叔父さんは！わがまますぎるわ……こんなに家にいらつしやる人に心配させて行くなんて……今度

歸つてらしたら、私……云つてやるわ。あまりひどいわ』
『をばさんの顏、やせて小さくなつてるわ』
とも。

はや子さんの冴々した若さと少女らしい親切とは、めいりこんでゐる私の心を明るくしてくれた。つれ立つて外出もしたくなつて、紅茶をのみに△△△まで行く。

×

――午後七時半――

Sの手紙は來ぬ。しかしそれでよからう。いつかは來るであらう。手紙どころではないだらう。彼女との交渉に夢中になつてゐるはづだもの。

×

なるやうになるだらう。『時』が解決するだらう……。私は身體を大切にしよう。私一人のために生きよう。衰へたくない。しつかりしよう。自分一人の生存だ。そのことがよく分つて來た。

×

今夜の安眠をとおもふ。

×

獅子は抗しがたし （生田花世）

離婚、――この二字が頭に閃く。

×

獅子の雌雄をひるま見たことでよほど心が安らかになつた。人間ではない、彼も彼女も獅子だ、豹だ、否猛獸ではないといふか？私から考へれば立派に猛獸である。私が、人間、やさしい人間、夫婦道をしる人とおもつてゐた夫、そして私が面倒を見て來た彼女が猛獸に化けて了つた。それが戀か！何といふ悲喜劇！

×

――午後九時十五分――

苦しい、とても苦しい。ふとんの中でどちらにねがへりしても苦しいためいきが出る。こんな風に私を苦しめてもあの男女がたのしくもあり面白くもあるこの世の中、ああ、いやないやな世の中。しかし、私も生きるには？

（筆者の言葉――機會もあらば、この續稿をまた他日にとおもふ）



見るまゝに思ふまゝに

岡田八千代

生意氣な事を言ふやうだが、此頃舊劇の世話物を見て感じる事は、古い役者を除いた人達に其身體——と言ふか——役柄と言ふか、さういふものを包む或る一種の「衣」と言つたやうなものがないのに氣がつく。例へば源之助のやうな人が出ると、白がかなりあいまいでも其處に何となく舊劇としての衣がかゝつてゐるので、昔見た芝居らしい情調に引入れられる事が出來る。けれ共、若い人の世話物を見てゐると、新工夫もあり白もはつきりと確ではあるが、何なら何と言ふ役丈がきつかりとしてゐる丈で、夫を包む衣がないので、例へば、ゆすり場にしても、そのゆすりの理由や白丈がぎす〳〵と耳にぶつかる丈でそこに浮ぶ何の夢も無い。殊に、下廻りにおいて夫が強い。今度の（六月の）本郷座の遠山政談を見て居ても自身番の場の見物に出る仕出しなどは如何見ても田舎者としか見えぬのが多いのなど尤も氣分をこわしてゐる。昔は、助六などを演つて揚卷の道中を見ても、おいらんに傘をさしかけてゐるやうな男でも、何かしら、芝居といふ衣がかゝつてゐて見知らぬ世界へ誘はれてゆく處があつたが、今のはお白洲の役人などもだらけ切つてゐて、如何にもお役目だからといふ處しか見えない。そんなら、新物の時代の近いものが好いかと言ふと、以前には、新物をやつて好評だつた

荒次郎なども、近頃では、白のテンポがのろくて、詠歎的でまだろこしくて聞いてゐられない氣がする。金玉均の大詰などがさうだ。夫でも女形は割にさうした事が目立たないやうだ。これは、新派などが、現代物をやるのに到底實社界では見られぬやうな派手なものを着るのに對して、衣裳の好みが、やはり、昔を踏んで地味なものを着、第一に男の扮する女形といふ事が、現代ものに全然向かない爲めに舊式を離れない處が幸ひしてゐるのかも知れない。只、若い人がおいらんなどを演る時に、かけがさばけないの丈はどうにもならない。此間松竹座の「今年竹」を見た時に、菜波雪子の春代の褄のとり方は好かつた、流石に以前左り褄を取つてゐた丈の事はあると思つた、あんな事も一寸した事らしくはあるけれど、普通の女優さんではあれ丈に思ひ切つて褄が取れないやうだ。腰から下がしまらないのが多い。今度左團次が露西亞へ行く出し物に「鷺娘」「道成寺」などが出るやうだが、誰が踊るのか、大方松蔦でも出すのであらうが、何だか自分は誰か一人女優の美しくて踊れるのを連れて行つて慾しいやうな氣がする、今の三升夫人でも一行に加へて踊つて貰つたら好いやうな氣がしてならない、踊は確であるし、團十郎の息女として、名も通り易かろうし、女優としての踊りが見せ度い氣がする。此間歌舞伎座で、お子様方の芝居といふ名目で幹部俳優の令息達が童話劇や舞踊をやつたが、何故さういふものをさせるのなら、以前齋美藏がやつてゐた「小雀座」の繼續として演らせなかつたらうと思ふ。當時の齋美藏丈の努力を思ふと、あの「小雀座」を立ち消えにする事は惜しいと思ふ。今度又子供の芝居をやる場合には、何とかして「小雀座」といふ名目丈でも付けて貰ひ度い氣がする。——

見るまゝに思ふまゝに　（岡田八千代）

二階笑面

歌舞伎座で菊五郎が「幻椀久」を出すのに、地は淸元で一張一枚、舞臺と合せて三人ぎりだといふ。お父さんの延壽と六代目とでは、三味線の榮壽が疲るだらうに、或人考へて、思ひついた、よい事がある。いつそ三味線をぬいて、延壽の頭へ、ちよいとチョン髷を帖りつけて、舞臺松の木の下へ座らせて踊る椀久も氣狂ひ、唄ふおぢいさんも氣狂は？

×

左團次がいよ〳〵一族門弟を引連れてロシアへ行くといふに、ではいよ〳〵本物か？、一體どこの國で大統領にするんだ——この人、オガミウメユキ、イチムヲ、ハネザエモンと覺えこんでゐる。



野にゐる牝豚

リアム・オッフラハアティ作
松村みね子譯

キルミリツクの漁師のネデイといふ爺さんがある日キルムラアグで一匹の牝豚を買つた。

彼はその豚を袋に入れ驢馬の籃に投げ込んで家に持つて歸つた。生れてまだ六週間しか經たない小さな黑い豚で、胸がながく、大きな耳が目の上まで垂れ、小さい尻尾はちぢれてひとかたまりに卷いてゐた。

ネデイが豚を買つたことが近所に聞えると、近所の人たちは驚いた。ネデイはもう年寄で、二間の小屋にたつた一人で暮らしてゐて、持つてる地所といへば彼の小屋の入口の小さなあき地だけだつた。その地面に彼の一年間食ふだけの馬鈴薯が出來るのだつた。それに、酒が好きで、すこしでも金を持つてゐれば、それを使ひきるまでキルムラアグで飲んでゐた。だから近所の人たちはネデイがどういふ氣で豚を買つたのかと不思議がつた。たうとうマアチン・コンロオイがネデイの小屋に來て云ひ出した。

「あの豚ぢやお前はごまかされたんだ。もしお前が黑はぜの十ぴきもおまけにつければ、おれが一ポンド出して買つてやる」

ネデイはベルトをひき上げ、小さな灰色の眼でコンロオイを見て、さつさと歸つてくれと云つた。コンロオイの後から拳を

振つて彼は云つた。
「あの豚を持つてるあひだ、おれは金があるんだ。だからあの豚を買つたのよ。大きにお世話だ」
ネデイは仔豚のために台所の隅に藁の寢どこを拵へてやり、魚の鹽漬に使ふ桙の下の方を切りあけて槽のやうにしてやつた。暫くのあひだはこまごまと仔豚の世話をしてやり馬鈴薯や乾し魚をたくさん食はせ、酸くなつた牛乳も近所から貰つては飲ませた。豚はどんどん肥つて大きくなり六ケ月經つた時分にはもう賣つていいぐらゐになつた。
仲買が見に來てどのくらゐの値かと訊いた。ネデイは仲買を追ひ拂つた。
「この豚を持つてるあひだ、おれは金があるんだ、だから何時までも持つてるよ」
それは四月だつた、ネデイの馬鈴薯の蓄へもすつかり豚に食ひ盡くされ、乾し魚もあらかた馬鈴薯と一しよに食はれちまつた。そこでネデイは豚をそとに追ひ出して路ばたの草を食はせることにした。
「これから自分で食ふんだぞ、食へなきや、惡魔に食はれちまへ」
ネデイはさう云つて籃と釣り糸を持ち魚を捕りに出て行つた。
豚はひる前ぢゆう路を迷ひあるき、何でもかでもにほひを嗅いで見た、馬が通つたり牧牛をつれた百姓が通つたりするたびに激しく鼻を鳴らしてちよこちよこと駈け歩くので、肥つた胴の下の脚の關節がかたいビスケツトを割るやうな音をさせた。それから草の中を首で突つつき廻したので顏ぢゆうが目のまはりまで土だらけになつた。ひるの食ひものを貰ふ時間になるとよちよち小屋に歸つて行つたが戸は鎖してあつた。そこで豚はぶうぶう鳴いて戸口で待つてゐた。どんな音でも聞かうとして耳を立て、ぴくぴく動く毛だらけの鼻で空氣を嗅ぎ、困り切つたやうに時どき頭を振つてゐたが、誰も戸をあける者がないのでひもじさに鳴きはじめた。
豚はさうやつて鳴きながらネデイが日ぐれに戻つて來るまでそこに動かずに立つてゐた。ネデイは豚を家に入れてやつたが、夕食には魚のわたと馬鈴薯の皮だけしかやらなかつた。

「これから自分で食ふんだぞ、食へなきや、悪魔に食はれちまへ」さう云つた。

ネデイがさうやつて毎日魚とりに出て行つて二週間も經つうちに豚はだんだん痩せて、ひもじさのため野性になり、路の草を食つたり岩の上を迷ひ歩いて蕁麻を食つたり、何でも手あたり次第に食ふやうになつた。馬や牛が側を通つてももう今では鼻をならさなくなり、肌の毛は荒く剛くなり、耳は柔かな透明を失くし、目のまはりにこびりついた泥のため目のありかさへ分らないやうになつた。そして朝になると小屋を駈けだし日の暮までは決して歸つて來なかつた。

はじめはキルミリツクの村を歩きまはり、草や蕁麻を食ひ、土を堀りちらして根を探がし、塵塚の中に見つけるものを何でもしやぶつて見た。古い魚の骨や、ぼろ、長靴、馬鈴薯の皮と。

夏がさかりになるに連れ、暑さと日ながさは豚を誘つてもつと遠くの濱邊に下りさせたり、小路づたひにキヤルムラアグに出る道の方までも行かせた。時々は二日も三日も戻らないことがあつた。そのとき豚は磯にちかい砂山の中に夜をすごした。砂山の草は非常にうまく、それに、海草のなかには何時でも波のうち上げた小鮫や鯖のきれはしがあつた。いま皮膚の毛は濃くなり針みたいにこはくなつて、毛の下のくろい皮は日に照らされてひび割れ、犬に咬みつかれたり、子供たちに狹い路に追ひつめられて石をぶつけられたり波のうち上げた棒きれで打たれたりして、傷だらけになつてゐた。ありたけの肉がみんな筋のやうに硬くなり、體は犬みたいにほそつこく、背はうまれて一年經つた驢馬ぐらゐ高かつた。

夏のをはる頃また仲買がネデイのとこに來て豚を賣らないかと訊いた。仲買が云ふには

「もう今では値にもならないが、一ポンド出さう。もう少しおとなしくして子供を取らうかと思ふ」

するとネデイが云つた。

「歸つて貰はう、うるさい奴だ。あの豚を持つてるあひだ、おれは金があるんだ、あの豚は何時までも持つてる」

だがその年は不漁だつたので冬のあひだの粉を買ふためには驢馬まで賣ることになつた、しかし豚は賣らなかつた。

「銀行に金を入れとくのと同じだからな、豚はいつでも金になる。おれのおやぢが何時もさう云つた」

ネデイはそんなことを云つてゐた。
冬が來て大洋の風が烈しく岩々を吹き、海のしぶきが濱の小屋の上に雪のやうに降りかゝるころ、豚はもう外に出なくなつた。豚はネデイの臺所の藁の寢どこに自分の臀の上に坐つてひもじさに鼻を鳴らしたり鳴いたりしてゐた。
或る風のはげしい日ネデイは干鱈を賣りにキルムラアグに出かけた。彼は豚を家から追ひ出して戸を閉め、それから出て行つた。豚は寒さに震へ空腹に弱り、しばらく歩き廻つた。胃袋は背中にひつゝき伸びをしてゐる猫のやうな形だつた。村の何處にも食ふものは見つからないでまた小屋に歸つて來た。
豚は戸ぐちに膝をついて戸の下の方を嚙み始めた、そこに鼻のはいる孔が出來た。それから氣が狂つたやうに齒で戸を嚙みやぶり頭を打つけて番ひ目から戸を突き離した、で、その戸の下から中にとび込んだ。戸はたつた一つの蝶番でぶら下がり、戸ぶちに出てゐた一本の釘が豚の右の耳をまん中からひき裂いた。
豚は臺所のまん中に立ち、土に鼻をくつゝけ、鼻をならした。耳から血がしたゝりいつぽんの流れとなつて流れた。豚は首を振り上げネデイの寢部屋の戸に向つて突進し、戸べりに近いところに鼻をつき當てゝ押した、すると戸を結びつけた紐が切れ、豚は寢部屋にとび込んでしまつた。
部屋の向ふの隅に石でくるりと圍ひをしてネデイの馬鈴薯が置いてあつた。粉の袋は馬鈴薯のそばの壁に立てかけてあり、乾した黑はぜを紙きれに束ねつけたのが木の寢臺の下に入れてあつた。豚は食ひはじめた。鼻をならし首を振り、粉から馬鈴薯に、それから黑はぜにと飛び歩き、馬が沼の中から蹄をふみ出す時のやうな音をさせ嚙まずに大口に呑みこんだ、胃がふくれて體の兩わきに一つづゝの瘤を出した。
すると一つの大きな馬鈴薯が豚の喉につかへた。
ネデイが夕がた歸つて來て見ると、豚は横に寢て石のやうに死んでゐた。



アルルの女

ア・ドオデエ
八木さわ子譯

私の風車小屋から降りて村へ行くには、榎の木の植わつた大きな廢苑を前に、往來に沿うて立つてゐる農家の前を通る事になつてゐる。赤い瓦の屋根、不規則に窓があいてゐる茶色の廣い正面、屋根のてつぺんの風見、藁を引き上げるための滑車、家よりも高く積んである秣、何處から見てもプロヴァン人の農家の眞のタイプだ。どうして此の家が私の心を惹いたか？どうして此の閉ざゝれた門を見たゞけで胸が迫つたか？　誰に訊かれたところで返事は出來なかつたにちがひない。それでゐて兎に角此の家は私を總毛立たせたのだ。あたりがあんまり靜かすぎた……人が通つても犬は吠えず、七面鳥は聲を立てないで逃げた……家の中では人聲もしなかつた！　何の音も、それこそ騾の鈴の音さへも聞かれなかつた……窓には白いカーテンも無かつたし、屋根には煙も立たず、まるで人の棲まない家かと思はれるやうだつた。

時はちやうど十二時といふのに村から歸つて來た。そして陽をよけるために、榎のかげを家の壁に沿うて歩いてゐた…家の前の往來では下男達が默つて秣を荷車に積んでゐた。門があいてゐた。通りすがりにふと眼をやつた私は、馬鹿に短い上着にぼろ〳〵のヅボンをつけた髮の眞白な丈の高い老人が、苑の奥の大きな石のテーブルに肱をついて——頭を兩手でうづめて——ゐるのを見た……私は立ち留つた。と一人の男が小聲で自分に言つた。

『シッ！　あれが主人ですよ……息子さんの不幸があつてからといふものいつもあゝなのです。』

此の詩黑づくめの一人の女と小さな男の子とが金緣の大きな祈禱書を持つて自分等の傍を通り、農場の中に這入つて行つた。

『おかみさんと弟息子が御彌撒から歸つて來たのですよ。息子さんが死んでから一日もかかさないのです……あゝ旦那、ひどい力落しでさ……親爺さんは今でも死んだ息子の着物を着てゐて、何と言つても脫がないのです……ハイ！　ドウ！　畜生！』

荷車はゆるぎ出した。私は話の續きが聞きたかつたので、車力に賴んでわきに乘せてもらひ、車の上の枯草の中で此の悲しい話の一部始終を聞いたのであつた。

その息子はヂアンといふので、若い娘のやうにおとなしく、丈夫で活潑な二十一になる立派な百姓の若者だつた。大層美男子だつたので女達にもてたが、彼の頭にはもうちやんと定まる女――ビロードとレースづくめの、いつかリース・ダルルで行き逢つたかはいらしいアルルの女があつたのだ。家では最初此の關係を喜ばなかつた。娘はあだもので通つてゐたのだし、兩親は國者でなかつた。しかしヂアンは何物にも替へて迄も彼のアルル女を望んだ。

『若しも彼女を貰へない位なら俺は死ぬ。』かう言つてゐた。

たうとう承知をしなければならなかつた。それで收穫をすませてから婚禮をさせるにきまつたのだつた。

それで或る日曜日の夕方、農場の苑で家中がテーブルに着いた。それはまるで婚禮の御馳走のやうだつた。許嫁は席に居なかつたが皆して絕えず彼女のために盃を乾したのだ……と一人の男が門におとづれて、震へる聲で、主人のエステーヴに內々で話したい事があると申し入れた。エステーヴは席を立つて往來に出た。

男は言つた。

『親方、貴方が息子さんの嫁にしやうといふ女は二年越し私の情婦だつた奴です。確かな證據、かうした幾つもの手紙があるのです。彼女の親達も承知で約束をしたのですが、貴方の息子さんが通ひ出してからといふもの、親達も袖にしはじめたので

す……がそんなわけがあつて見れば、彼女はもう他の者のお嫁になぞなれないと、私はかう思ふのです。』

『よろしい、解つた！　まあ、這入つて一杯やつて行くがよい。』

手紙に眼を通した後でエステーヴ親方は言つた。

『ありがたう。ですが心配で、喉が乾くどころぢやないのですから！』

男はさう言つて歸つて行つた。

父親は眉も動かさないで席に戻り、食事は賑かに終つた……

その晩エステーヴ親方は息子を連れて野良へ行つた。二人は永い事外に居た。彼等が歸つて來た時、母親は寢ないで待つてゐた。

農夫は息子を彼女の方に押しやりながら言つた。

『接吻してやれ、不閔な奴だ！』

チアンはアルルの女の事をもはや口に出さなかつた。が彼はいつまでも彼女を思つてゐた。いや、彼女が他の男の腕の中に居るのを見せられてからといふもの、前にもまして思つてゐたのだ！　が彼は自尊心から只一度も言はなかつたのである。可哀さうに、そのために命を捨てる事になつたのだ！……時々彼は片隅にかくれたなり少しも動かないで幾日も幾日も過す事があつた。さもない日には野良に出て、それこそ日雇十人分の仕事を一人でやつてのけるほどすばらしい働きをした……夕方になるとアルルの道を執つて何處迄も、その町の細長い鐘樓が西の空に高く立つてゐるのが見えるところまで歩いて行く。そしては元の道に取つてかへす。そこから先には決して行く事がなかつた。

彼がそんなにもいつも悲しくひとりぼつちでゐるのを見て、農場の人達はもうどうしていゝか解らなかつた。不吉な事が起

りはしないかと恐れるのだつた……一度母親は食卓で涙のたまつた眼で彼を見ながら言つた。

『ねえ、お聽きよヂアン、お前どうしても彼女が望みなら、どうにでもして貰つて上げるから……』

父親は恥ぢて顏を赤くしながら頭を垂れた…………

ヂャンは頭を振つて、フイと出て行つた…………

此の日から彼はすつかり生き方を替へて、兩親を心配させないためにいつも快活をよそほひつゞけてゐた。踊にも、居酒屋にも、牛祭にも再び姿が見られた。フォンヴイエイユの祭では踊の音頭を執つた。

父親は言つた『彼は忘れてしまつた』が母親は相變らず恐れを抱いた儘で、以前にもまして氣を許さなかつた　ヂャンは弟と一緒に蠶室のすぐ傍に寢た。可哀さうな老婦人は、二人の室の近くに寢台を据えさせた……蠶が夜中に彼女の手を要するかもしれないといふのだ。

農家の守護のエロア聖人の祭日が來た。家中の喜びだ……シャツトオ、ヌフ（葡萄酒の名）の大盤振舞に加へて、葡萄酒もまるで雨のやうに注がれた。それに花火やら、麥打場には篝火もたかれるし、榎の木には色とり〳〵の提灯も懸けつらねられた。エロア聖人萬歳！　人々は死物狂ひに踊り拔いた。弟息子は新しいブルーズに燒けこがしを拵へた…ヂアン自身も滿足さうだつた。母親の手を執つて踊らせやうとし、可哀さうな女はそれを又嬉し泣きに喜んだ。

皆は十二時を聞いて寢についた。誰も眠る事を必要としたのだ……ヂアンは眠らなかつた。後になつて、弟息子の話によると、彼は夜通し泣いてゐたといふ……あゝ！　この弟がどれだけ氣を落した事か…………

翌日の夜明方、母親は誰かしらその室を驅け拔けて行く音を聞いた。彼女は蟲が知らせたのだ。

『ヂアンかい？』

アルルの女（八木さわ子）

ヂアンは返事をしなかつた。その時もう階段に居たのだ。母親は大急ぎで飛び起きた。

彼は穀部屋に昇つて行つた。彼女は後に續いた。

『伜や、後生だから！』

彼は戸をしめて閂をかつた。

『ヂアンや、ヂアンや、返事をしておくれ。何をおしなのだい？』

震へる老の手で探りながら彼女は懸金を捜した……窓があいて、人間の體が苑の敷石の上に落ちる音がした。とそれだけだつた………

可哀さうな若者は心の中でかう言つたのだ。

『俺は彼女を忘れられない……死んでしまはう……』

あゝ！　私達は何といふ弱い心だ！　が夫にしても輕侮の情より、愛を殺す事が出來ないとは……

其の朝村の人達はエステーヴの農場の方で聞えた叫び聲を、一體誰があんなにと言つていぶかしんだ……

夫こそ、廣苑の、夜露と血汐に濡れた石のテーブルの前で、息子の死骸を腕に抱いて泣き沈んだ母親の叫びだつたのだ。

之は私のリーヴル・ド・シヴェであるドオデエの『風車小屋の手紙』の一篇である。『風車小屋の手紙』は、熱烈な南國魂の所有者である此の作者のいみじき郷土愛の發露である。全篇之珠玉ならざるはない。わけても此の『アルルの女』は驚歎すべきビゼーの名作曲と相俟つて、不朽の傑作と稱せられる同名の戯曲の前身をなすものである。ドオデエの戯曲の最後の所産しかも最も光輝ある此の所産は後年實にこの一片のスケッチを潤色脚色したものである。

しかも私は不幸にして、其の全曲中にみち〳〵た芳醇極まりなき南國情緒が舞臺上にかもし出す息づまるやうなその感激を知らないからでもあらうが、只机上で讀む脚本にもまして、この片々たる物語に一層心を惹かれるのである。　後記

新舊俳優人氣番附

蒙御免

東方

張出横綱 市村羽左エ門

張出關脇 澤村宗十郎

横綱	尾上梅幸
大關	尾上菊五郎
關脇	守田勘彌
小結	市川松蔦
前頭	東京 中村福助
同	市川壽美藏
同	阪東三津五郎
同	伊井蓉峰
同	喜多村綠郎
同	片岡我童
前頭	阪東彦三郎
同	中村時藏
同	市川男女藏
同	汐見洋
同	澤村訥子
同	井上正夫
同	千田是也
同	東屋三郎
同	小堀誠
同	尾上伊三郎
前頭	鬼頭善一郎
同	尾上照藏
同	片岡千代之助
同	中村芝鶴
同	澤村高助
同	阪東しうか
同	河原崎長十郎
同	市川莚升
同	市村家橘
同	阪東竹三郎
前頭	市川團子
同	中村又五郎
同	藤間金太郎
同	中村米吉
同	阪東三吉
同	市川團右衛門
同	尾上新七
同	尾上しげる
同	阪東羽三郎
同	關三十郎
同	市川新之助

西方

張出大關 松本幸四郎

横綱	市川左團次
大關	中村吉右エ門
關脇	市川猿之助
小結	澤田正二郎
前頭	大阪 中村福助
同	中村魁車
同	大谷友右エ門
同	河合武雄
同	阪東秀調
同	市村龜藏
前頭	市川右團次
同	尾上多賀之丞
同	花柳章太郎
同	市川荒次郎
同	實川莚若
同	中井哲
同	畑中蓼坡
同	友田恭助
同	中村壽三郎
同	尾上鯉三郎
前頭	市川八百藏
同	中村吉之丞
同	澤村田之助
同	澤村訥升
同	市川小太夫
同	中村扇雀
同	市川九藏
同	市川三升
同	中村福之丞
同	阪東勝太郎
前頭	阪東蓑助
同	中村兒太郎
同	河合明石
同	松本純三
同	尾上菊太郎
同	阪東村右衛門
同	阪東羽太藏
同	尾上菊藏
同	尾上芙雀
同	中村七三郎
同	河原崎權十郎

行司

市川新十郎　尾上幸藏　尾上松助　市川莚女　市川左升

年寄

片岡仁左エ門　市川中車　中村歌右エ門　澤村源之助　中村雁次郎

勸進元

山本久三郎　大谷竹次郎　白井松二郎

呼出

尾上盤十郎　中村箱登羅　澤村源十郎

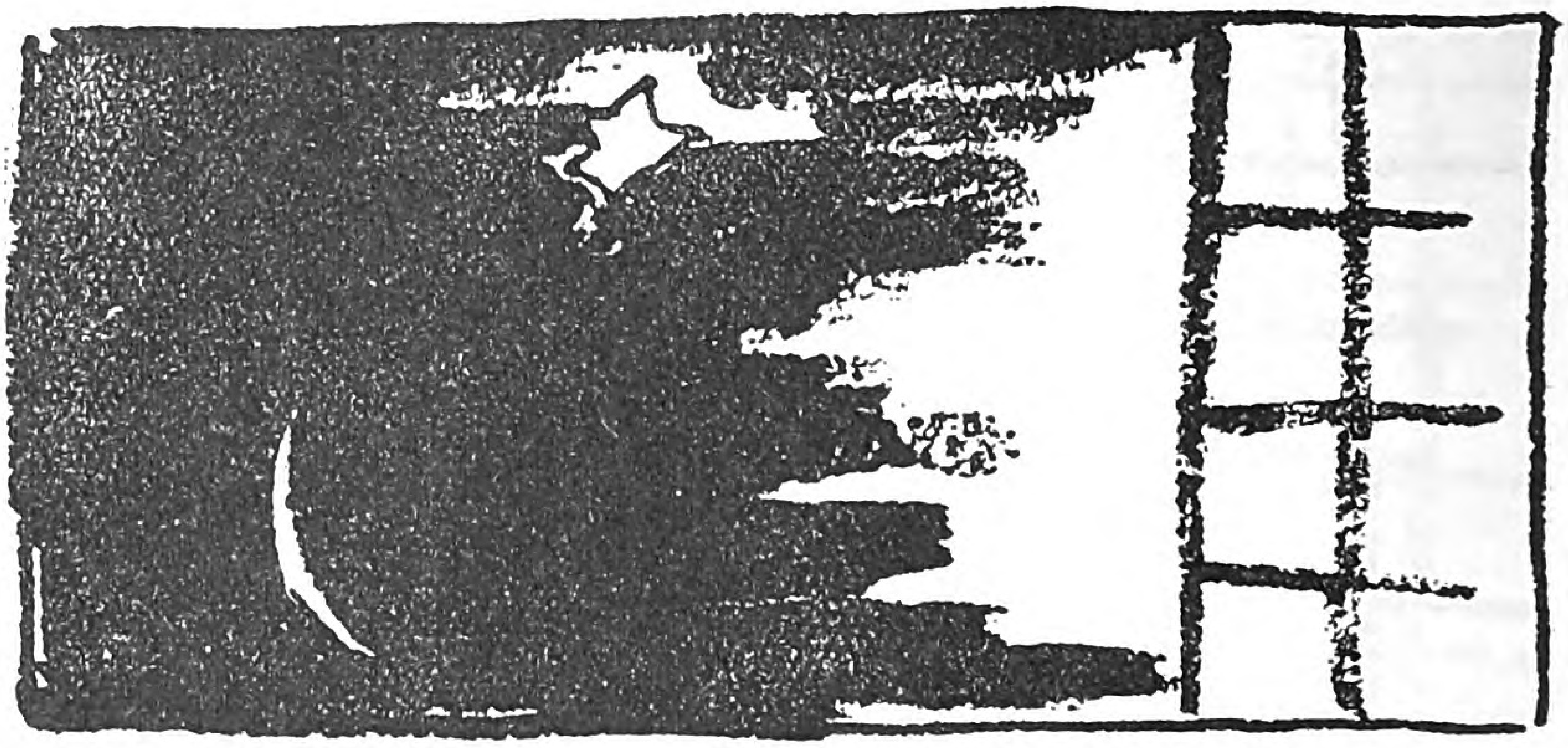


夏神樂

深尾須磨子

すは！止つた大毬。赤と黄のだんだらの、まん丸い夏の顏。

颯爽たるしら鳥の羽ばたきから、今眞靑な新世界が生れる。しら鳥が自慢の首のところを、氣にするのはこの頃のよく似合ふをばさん。



夏神樂（深尾須磨子）

机上の花は、百合に、狐の提燈に、飛燕草に、名の知れぬ赤いのに、それから夏蟲草、これは野方村の田鶴ちやんのお土産で、云はずと知れた裏の花畑のもの。枝にからんだ根なしかづらも、花の間に巣を張つた蟲とり蜘蛛も、花もろ共にめでてゐる。なほ、これも田鶴ちやんのお土産の、竹につきさした有平糖の黄紫紅白を、セエヴルの繪甕に投げ入れて、ぽんぽんだりあとはどうであろ。

ビイル箱の生れがはりが一等妙の、塗りつぶした色とりどりの木鉢、植ゑるのは杉か、かなめもちか、その他ありふれた木に限ります。

露ながら葉ながらの心にくさ！友よ。丹誠の

夏神樂（深尾須磨子）

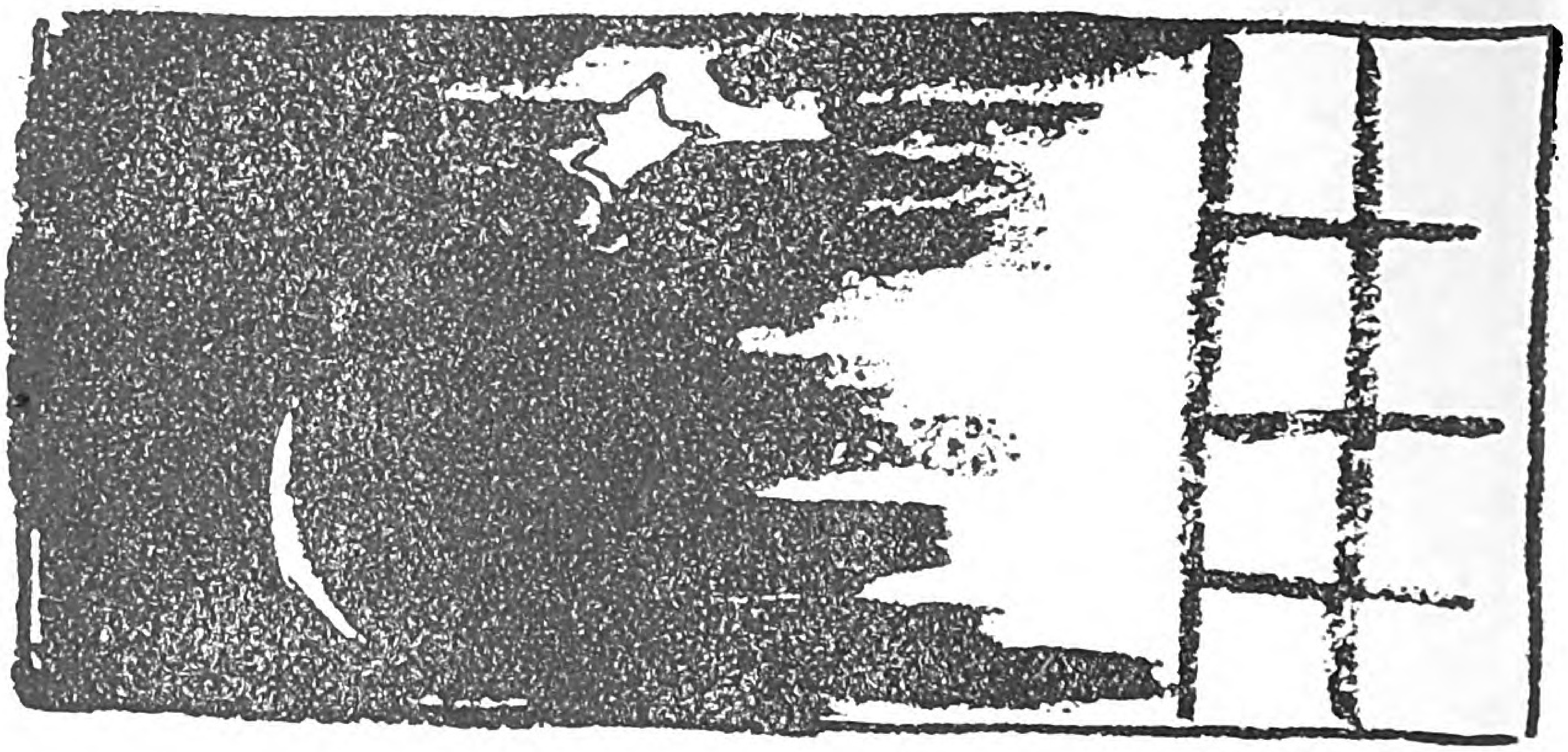


草苺をめでようよ。夕べを開く小窓から、空が水色の贈り物を屆けて、今をあまやかす小らんぷの灯のうるみやう！友よ、奏でるには早いか竪琴の、身にしむほどの「落葉の曲」

青桐が地にひろげるありがたいかげで、ほつとする屑屋のをぢさんに、お疲れでせうと尾を振つて、小犬は頭を撫でられる。風がもて來る折からの日本語は「豆腐い……笹の雪、絹ごし……豆腐い……」

「薔薇の花にとまつても、蟲は蟲こがね蟲」わたしの目をおかし涙に溺れさせて、日盛りの薔薇を殿堂に、蟲らはおふけなくも神神を眞似る。羽づくらふ。詩を案じる。

夏神樂（深尾須磨子）



笛吹けば、むせぶは銀河、韻を打つは梟（ふくろふ）、ジャズの一節を奏でるは五位鷺、

山が眞白に百合を著て、瀨に初鮎がをどるとや、晝ほととぎす名のるとや、まだ鶯の老いぬとや、河鹿の歌のおかしとや、居待の月のよろしとや。――山の便りに――

薔薇など焚かう。去年（こぞ）のつばめの來るあした！

父病む

中田信子

草苺

粗い土の刺戟がいためないやうに、
いちごの根元にたつぷりと、
洗盤の水をわけてやりながら、
庭のかたちを整へたばかりの、
狹い狹い家の廻りを見まはす。

このいちごは去年の今頃はもう、
厚い野氣の多い葉のかげに、
本生りの大きいのや、若い小さいのや、
ありだけの色素をもみ出して、
水々しく鮮にうれてゐた。

いまは區劃られた地面、高い塀、
午前の光が僅かしか屆かない庭に、
さびしいいちごよ、白ぼけてゐる實よ。
私の瞳はちら〳〵する。
たつたひとつ朝露をそめてゐるいちごがほしいのに。

「父さん、初生りよ。」



父病む（中田信子）



老いて病むといへば
こんな言葉もうれしからう、
「これで壽命が伸びるぞ！」
力のこもつた父の聲を早くきゝたい。

雛

花をつけてゐない虞美人草、
貌もなくなつた朝顔の苗、
どんなに庭を荒されても、
おまへだち放し飼の鷄よ、
私は今日は氣色を變へまいと思ふ。

たつて行けば、
しばしねむりにやすらかな父に、
あのふと〲しい叫びや、
荒々しい羽音を、
どうしても聽かせなければなるまい。

いまや薔薇、萩の、
軟い小さい葉も、





父病む（中田信子）

むしりとられてゐるけれど、
私はたゞぢつとおまへだちが
静かに遊んでゐてくれるならよいと思ふ。

夕

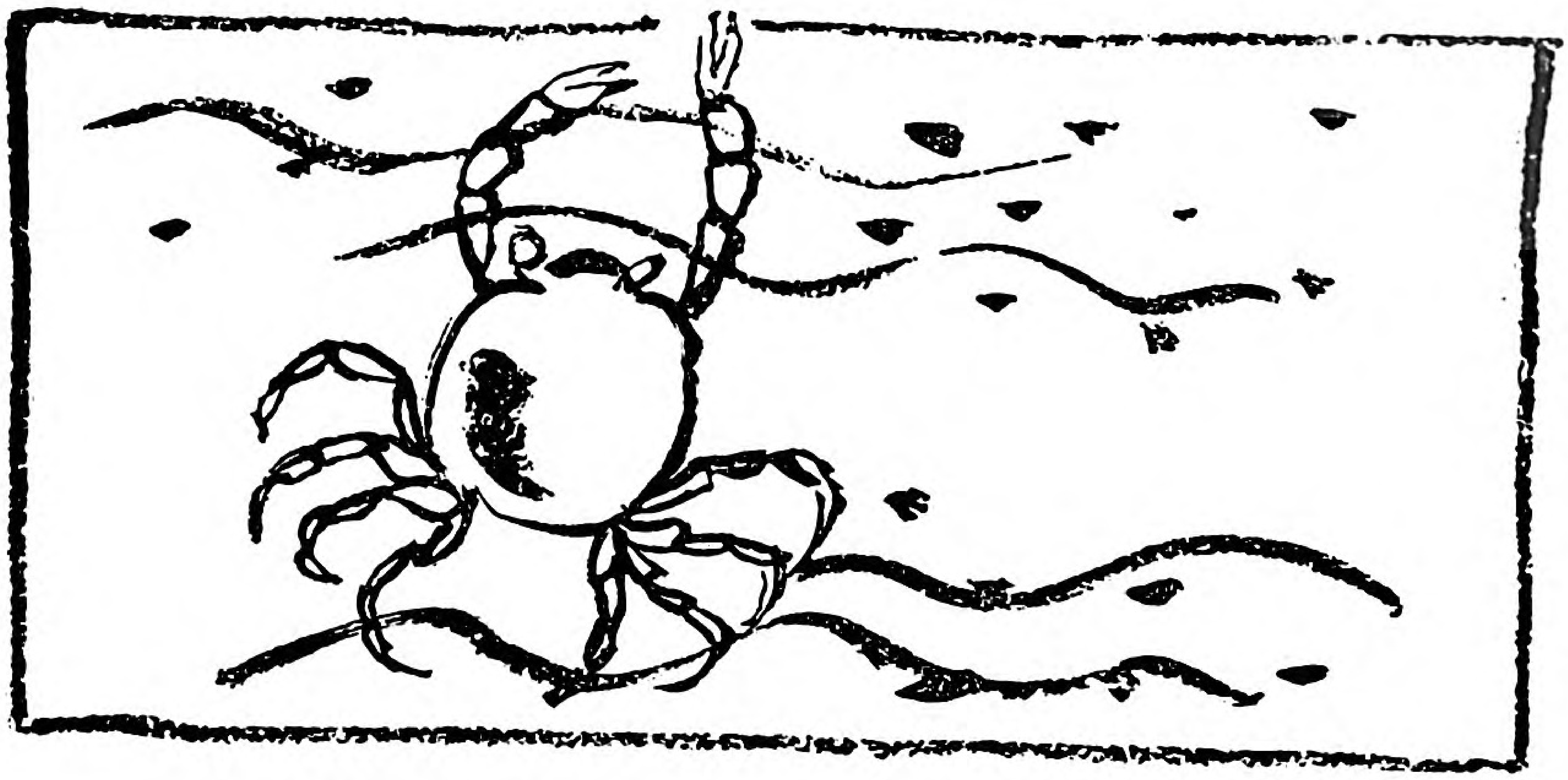
——池田林儀先生より病める父のためわざ〳〵
東京よりよきくすりをつかはさる。——

空いつぱい燦爛と崩れる夕陽を、
久しぶりでしみ〴〵と仰ぎながら、
輝きのなみだながしつゝ、
米を磨ぐ、米を磨ぐ。

かの醫師の車は、
いまごろ停車場近く來るだらうか。
人の子としてのこの上なき喜びを、
われにたまひし師よ。

感激の涙ながしつゝ、
しみ〴〵と土をふみて、
また、米のとぎしるを、
小さき植木の根元にそゝぐ。





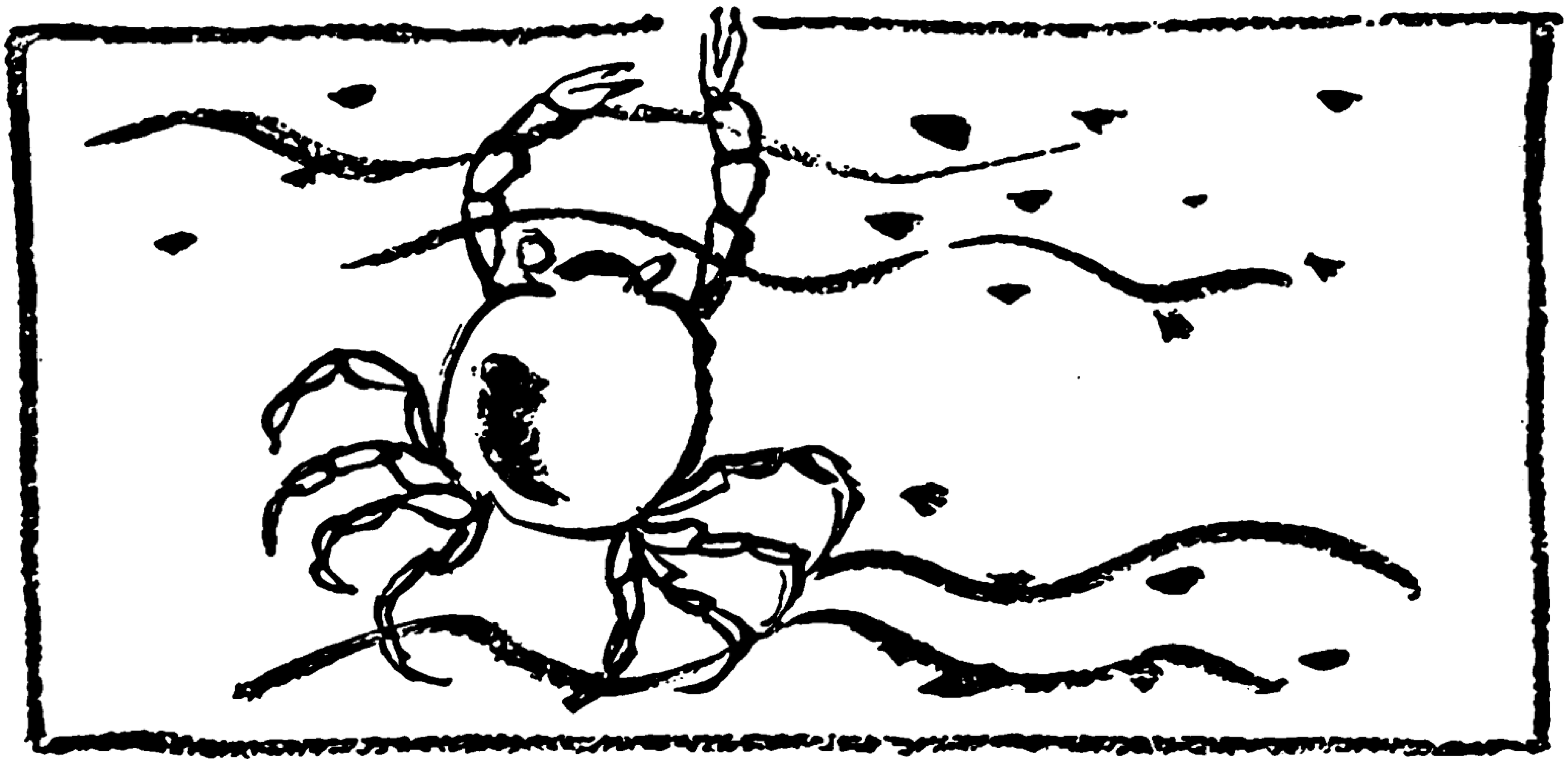
初夏三篇

米澤順子

ある日

ヒマラヤ杉の若葉が
重々しく垂れたあたりから
噛みしめた
胡瓜のほろ苦さから
初夏が
さかんに匂つて來る

私は
子供達と一緒に
上靴(スリッパー)のまゝ芝生へ馳け降りて
噴水の栓(ねぢ)を開(あ)けた



初夏三篇（米澤順子）

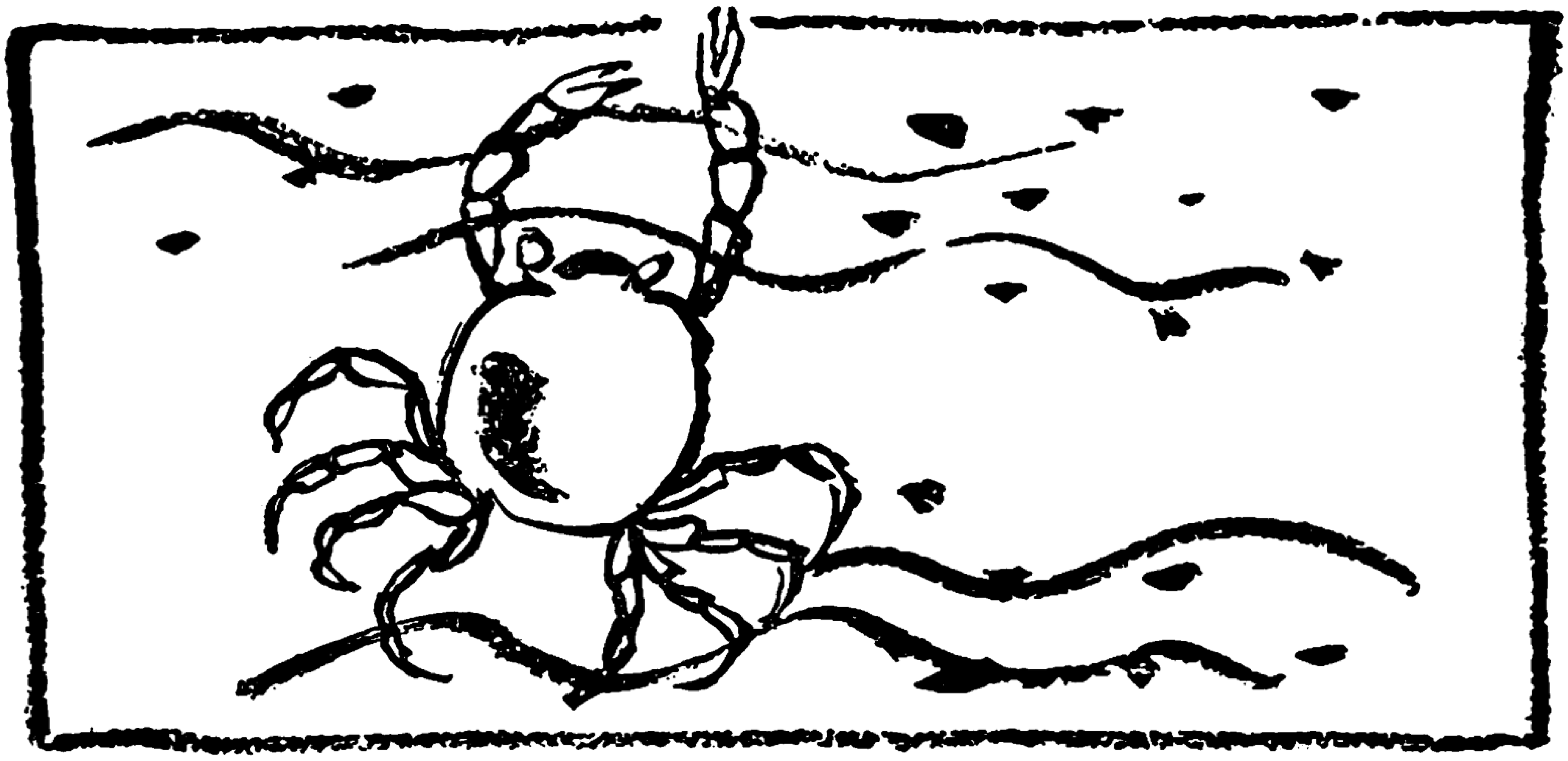
ある宵

宵の芝生を一とあるき
草履も足袋も
おびたゞしく露にぬれる

伸びひろがつたばかりの
芭蕉の葉が
おほらかに風に揺れ
月が
水のやうな空に
浮んでゐる

初夏の月は常色（つねいろ）
そして
ねむたいやうに
どんよりとしてゐる
若人達が
悩ましい若さを感ずる宵だ

初夏三篇（米澤順子）



雀

熱い日には
雀らも
犬のやうに嘴をあけて
喘いで居る

芝生の蟲を
たんねんに啄んでは
柿の葉かげへ
憩みにゆく雀ら

そして
その合間合間には
噴水盤へ
ひしめきながら
水浴みにゆく雀ら

文藝筐籃（一）

生田花世

題して『文藝筐籃』といふ。文藝作品、新刊書評、紹介、雜誌讀後感、訪れてくるがまゝに入れて盛るかごといふ意味也。『筐籃』は狂亂にまがふ。よむ人、その亂雜におどろきたまふ事とおもふ。しかし、事情やむを得ぬこと也。狂亂、時に眞をうがつ事もあるであらう。眞をうがつことといとも少き『文藝筐籃』なることをわらひ給ふこともあるであらう。恥も損德も考へず、あへてこの稿をつゞけてゆくところに狂亂の狂亂たるシカクは十分あらうかとおもふ。

『いろいろ世の中を考へて見るとかたづかぬ事だらけだとおもふ。白にもなりきれない赤にもなりきれない。出ることも出來ぬが出たいともおもふ。愛したいのに愛し切れぬ。十分生きたいのに、生きされぬ。純粋な心はオール・オア・ナッシングと考へる。しかしこの人生では、ごくわづかなチャンスでしかそのオール・オア・ナッシングは與へられないのだ。何故？　ああそれは何故か？　こゝに私の讀後感をかかうとする小寺菊子氏の新著『情熱の春』の中の『憂鬱の春』といふ小說をよんで、そこでも私は夫婦關係でのさういふものを見た。濃い情熱にもゆる妻は、二年にもわたらうとする夫の外遊といふ事情になやむ。作者は、心の寂寥をも問題にし、性的生活の苦惱をも問題にしてゐる。そんなところが私たち家婦の心にふれてくる。ピンとは來ないが、しみじみと來る。夫は外にいくらでも自分を生かす。社會生活が彼にはひろいから。しかし妻は、女は、所詮忍從の外はない。この女主人公には、藝術があつて、いくらか耐へる上に力づけられるものがある。然し普通の女性はさういふものさへないのである。この『憂鬱の春』がバックにさういふ女性を點出したら作品としてはもつとよかつたのに。』

『さういふ風に自由に行かぬ、――放心的な人なれば出來よう。しかしこの女流作家は、身邊小說家傾向の畑に育つた人だから、その註文はむりでせう』

『無理とはおもふけれど、……作品の飛躍的情調、作家の心的燃燒を考へると惜しい氣がするのよ。あまりに不自由さうで……』

『たゝき上げて來た人の悲しみでせう』

『長所と一緒に短所もたゝき上げたのだから……しかしこの人こそ、もつとハメをはづしてヒヤクしなければならないものを

『しかし、この人らしいヒヤク、……それは

若い女流作家の流行に就くことではない、どこまでも地味に、いはゞ腹藝といふ風のヒヤクですね。それを期待する方がよいやうな氣がする。』

『昨日私は、能を見ました、生れてはじめて（山姥）を見たのです。シンと心に來たものがありました。靜‥‥ごくわづかに動‥‥。その動の効果。いふにいへず心にこたへました』以上私の自問自答。

（情熱の春）定價三圓二十錢――教文社

『人間は、（男女とも）非常に心がかなしみ、いたみきづついてゐる時には人の中へ、人の中へと出てゆきたくなる。さういふ時を私は知つてゐる。又人のゐないところ、人のゐないところへと出てゆきたくなる。さういふ時を私は知つてゐる。この二とほりの心のうごきは悲しみの量によつてのこと、苦しみの形、寂しさの樣子によつてのことなのだらう』

『自然は、おそろしい、ホントに悲しい時には、海も死をもちかけ、山も死をもちかけてくる。』

『江口章子氏の『女人山居』――この著者は、實に羨やましい。どうしてからもおそれげもなく一人山中で、女一人で、くらせたか！それは强さからか、弱さからか、武者小路先生はその序でいはれてゐる。（女の裸の捨味の靑柿を握りしめて同感のよろこびを味はふ心持がこの本に一貫してゐる味ではないかと思ふ）と。』

『江口さんはうらやましい、その自ら知らざるニヒリズム！プツリと切つて次へ次へと移つて行ける夢の夢‥‥。しかしこの現實で移らず動かず、ぢつとすくむ、そのくるしさはどれだけか‥‥。かたづかない心で生きるなやみをなやむ時、自然は人間の眼にあまりにも遠いのです』

『人里とほい山里で、蛇を愛で、たいまつをたのしみ、秋霧しづむ沼のほとりを白鷺のやうに仄かにさすらふてゆく、浮世を夢、無常の古典的な情調、丁度仕へをやめた官女のありのすさび、丁度にしき繪の感じです。』

（女人山居）定價一圓四十錢　交蘭社

『女性の生活をその愛慾によつて感じ考へ、生きてゆく對男性への一面、女性の生活をその母性愛によつて感じ考へ、生きてゆく對子孫への一面、いづれも苦勞‥‥』

『窓』といふ小さい十七ペエジの女流文藝雜誌が私の机の上にあります。その窓にうつる四五の女の影、その窓からの話聲、子供のことを話す話、母親のことを話す話、隨分シンミに話してゐる。なるほどとおもふ。（或る母の記錄より）――伊福部敬子氏（母のこと）――竹中幾代氏‥‥その二人の聲を私はきく。』

『母といふ名も、妻といふ名も私にはゾツとするやうなものを味はせてくれる。十中八九不幸だから。つひには悲劇となりやすい。母は、子にそむかれ、妻は夫にそむかれる。建設の喜びは妻、母の永きよろこびであるものを。しかも崩壞させてゆくものがもしあつたら、母は泣き、妻は苦しむであらう』

『たのしみを結果におかず、ベストをつくすそのベストをつくすといふ心持が、伊福部氏の感想によく現れてゐる。さういふ第一義的な生活、私もそれに同感します。』

『竹中幾代氏のものは私を考へこました。妻妾同居――男性の多妻の本能――さういふ暗いものを考へたから。考へてゆけば、きりはない、かういふ惱みは‥‥。だが考へさせら

れる。女といふ女は考へこむだらう、つらいことなのだから……。名ばかりの妻は、何で生きる、兒のために生きる。兒のないものはどうして生きる、そこに『一人生きる』といふ決心がくる……。つよくやつて來る……。

(窓)——定價十二錢、市外野方町新井三一三「窓」發行所

「……願はぬを、願はぬを、求むる思ひよ、滑かなる肉に巣喰ひて、克ちがたきこのちからさびしき愛慾——「明暮に祈るはひとつ、いとはしの生命を永久に、生かしめむ、淨めむ高めむ、不滅の愛にと「ああ、されど、夢のしづくの、美しくむせぶしゝむら、鈴かにこゝろはうたれて……」

寂しい心の持主、鈍いまるいひゞきを出す人、色でいへば茶色、きものでいへば袷、柄でいへば小紋……かういふと何のことか分らないだらう。しかし私はこの比喩の中にこの人の長所も弱點もよく紹介が出來てるとおもふのだけれど。

詩集『明眸』の著者館美保子氏について川路せい子夫人のやさしい跋文はいふ。『館さんも又十年の詩作生活を經て來ながら、杳として知られない存在である。(略)然し、この詩集を繙いてこの人をにくむ人も無いだらう。笑ふ人もないだらう。靜かに心が涙する日に開くべき詩集である』と。まことに悲しい人は、あまりに心の鋭い友人にはたへがたい。あまりに尖つた藝術品にはしばらく遠慮したい。といふ風な落想がふと私の心に浮んだ。この詩集をすつかり讀んでから。溫籍低調、こむづかしさがない詩風だ。

(明眸——定價二圓　島田書店)

浮世畫展覽會評

—報知新聞主催—

長谷川春子

此の展觀と、今春やはり此所であつた大原孫三郎氏のコレクションの展觀とは、公けのものでは今年中の眼福であらうとおもふ、必ず。どうぞ讀者よ、あの盛んなる繁昌振り、三越に比敵し、どの室も草履の音と埃で滿々たる中を、美術なぞ生れ變つても解りさうにもない俗惡な風貌の見物人に八〇パーセント位占められて、ロクに觀ることも出來ぬ、もつとも其の方も中々それに釣合ふ傑作が多いあの官設展覽會なぞのかはりに、かういふ種類の展覽會を見て頂きたいものです。如何に我等の先祖が、あのセマイ自由のない德川時代に生れて、お影で小さな花しか咲かせ得なかつたけれども、なんと結構藝術の質においては、人間中で、選まれた人種のうちに數へ

られるかを見て下さい。

あの材料上に澤山の不便を持つ小さな版畫の方法で、幾人かの巨匠達は如何に清新に自由にその身邊から美しいものを取り出して、幾人に喜びをわかつてくれることよ。

さて版畫の方は第一回陳列であつたゆゑにひと通り揃へて見られたかはり、春信、清長歌麿、寫樂の巨匠達は次回以後特にその人々の丈を陳べる爲めに、我等耳目に親しき傑作がなくて物足りない、殊に我が詩人春信はさうであつた。

第一室で清信（鳥居）の萩野伊三郎の姿畫の去年あたり刷つたかとおもふ程の鮮かな美しさ（手彩色であらうか）黒の小袖と前髪立の顏を中心に、變化の多い形態と美しき色彩とがうまく成巧して居る。この作者の肉筆も出てゐるがそれもこの人だけは中々いゝ。他の人々は實に不思議なことに版畫ではあれ程の名手たちなのに、肉筆では必ずすつかり美しさ幻妙さを忘却してしまふのであるけれども。（懷月堂一派丈はどちらかといふと私は肉筆の方を好むけれども。）

清滿（鳥居）の細縮の平凡な畫ではあるけれども、優しい愛らしい丁度加賀染のやうな調子の者もある、清重では「宗十郎の隱れ簑笠物持てる男」がいゝ。

奥村利信、西村重信も中々好きだ、利信の「團扇賣、」此の構圖が描けた時には畫家は「無論同巧異曲のものは澤山あらうけれども）一寸機嫌がよかつたに相違ない。「郞一の谷夢中の敦盛」の倒れて居る遊女はどうやらエロティクな。

そこで石川豐信の「佐野川市松」、あの紅い衣裳で傘さし掛けられた色若衆、嘗て復製で見た時から心に留まつて居たのだが、たとへば春雨の煙る牡丹の花、――春信とはもはや生來薄すぎる氣品に富む濃艶な香氣を此の作者は持つ。わが六代目菊五郎が嘗つてもすこし若かつた時に折々發したあの香りを。

潮龍齋といふ人は中々いゝ感情を持ち折々よき構圖を作る人であるけれども、いつも畫風や枝巧に人の影響が現れすぎる。特異な感情を持ち乍ら、それを充分に出すべき畫風を創り出し得なかつた、そして時々ひどく拙い畫をかく。

大劇作者京傳（北尾政演）は畫かきとしても此の清長風な「當世美人色競べ」なぞ中々一流作家だ。

大家勝川春章はどうも巧いけれども、芝居畫はお芝居をやりすぎてゐる、其點寫樂は一見グロテスクに見えるけれども、その役者畫を通じて如何に正直な、いゝ藝術家であるかといふ事をおもふ。その作者の心境といふ點でかの、彼等と同じ程度同種のタンペラマンを持ち乍らどことなくいやしい一筆齋文調がおとしめられるのではないか。

勝川春英―天凛の才のないといふことは、仕様のないもので、出陳された諸作など構圖色彩中々面白く惡くいふべき何物もなくて、中々いゝ譯なのだが何か生きて居ぬ。ペルソネルなやうで、ペルソネルでない。この作者程度の人々は總べてさうだ。人を長く留めしめない。

それ故に清長の前へ來ると前に云つたやうに傑作は見當らなくとも、生きて働きかけて來る。小僧を連れた美人たちの（女風俗ます鏡）―見て居るうちに――朗らかないゝ聲を立てゝ笑ふ聲さへ頭に浮ぶ。讀者よ。清長こそ本當の江戸人の精華です。あれこそほんとうの江戸の人です。多くの人の概念にあるやうな江戸子といふ粗笨な豐國國貞式以下はあれは末期の下品なものなのです。――が、

でも、如何に巨匠でも感じなかつた、よく知らない物は矢つぱりおかしい、この田舍女のや、官女のは。

歌麿はひとつ、未だ恐らく極く初期であらう（多分さう思ふが専門研究家でないから或は極く晩年頭がボケタ時代のか）彼の特色の少しも未だ出てゐない、まだ何事か彼自身がはつきり解らなかつたらう時代の「仁和賀の藝者」のアクドイ好みのない色調の一枚が眼をひいた。

こゝに最後に榮之の扇屋瀧川のすらりと立つた立姿、その下部丈すこしおちついた黄地にした紫帶びた墨の地に、白つぽい打掛け、うすい肉色のかの子——思ひ違ひでなくば——の衣裳の色と赤にもいみじきデリカな線とが溶けあつて出來たあの調子、美しい靈的なちよつと幽靈的な、ローランサンと心の故郷は、あまり隔てぬ近所に違ひはない。

廣重は有名なものはあつたが、いゝものはない。我が面白き氣性の、キュリオジテの强い、エクゾテイズムのとぼけた北齋老人の「牛ケ淵」を、多分ヴエ、ベールのコレクシヨンにあつたであらうこの途上風景を、アンリ・ルツソオは見たかしら。何といつたかしら。

さて肉筆の方であるが、どうも此の立派なくすんで古びた金屛風や絹地の極彩色は、風俗上の興味こそ中々持つけれども、純粋の樂しみを私は版畫の方により多く持つ。又兵衛が如何に有名であらうとも、——又兵衛の畫は官學くさくて、線がキライだ——國寶があらうとも、立派な大作があらうとも、美術研究家なら其の一枚にも澤山の考察をするであらう大作でも、たゞ四條河原の有樣や、遊山や異人や、湯女や、風俗人事を見てゐるのは面白いといふ丈のことである。だから本山氏のあの拙い畫でも高尾や薄雲を寫したのだとおもへばそれから彼女等の好みなぞを考へて見ておもしろい。

段々年々持ち上げられて、肉筆浮世繪の本尊のやうになつてしまつたあの「彦根屛風」も、——たつた一日出陳させるといふ事だが、見なくて幸ひだと思ふ位で、どうも成程肉筆浮世畫の横綱に推すべきものには違ひないけれども、白狀すると好きではない。が、こゝに只ひとつ、其等の中で、浮世畫と限らず私の大好きな畫の一つである畫がある。あの原六郎氏の長信の屛風である。今度も左半双丈であるが、あの畫を私は眺めて厭きない。八角堂の椽上に佇んで櫻の幹越に見えるいゝ顏をしたあの女達と春の——畫面がクスンだのでさうではないのだがさう思はれる——夕暮の沈んだ空氣の裡に共に踊りを眺めてゐる氣持になる。あの畫中の人々の落付いて、美はしく高い調子よ、此れを描いた作者とは近附きになりたい。この畫は私の一生のよき友達の一人らしい、時々逢ひたくなる。

それからも一つ、大澤久三氏の「男女群舞圖」曾つて寫眞で見た時から興味を引いて居たが思つたより尙ほいゝ。自由に踊り狂うて人物は躍動して居ながら氣品をおとさない。殊に右手の踊る女の一人なぞ、あの儘たつた一人おいてもスバラシイ傑作だとおもふ。

關氏の「遊女」はエロテイクで、グロテスクで岸田劉生氏が買ひさうな畫、物好みの表裝が美しく眼を引く。梅原龍三郎先生のは此れより、赤い衣の舞妓の方が私は好きだ。

南蠻屛風の中では狩野內膳の忠實な描寫も面白いが私は山村耕花氏のを面白く見た、——傑れたと云ふ譯ではない——ただ、文明人の中では一番貧弱な肢體を持つ我等の先祖が大きく鼻高き人種の印象を正直な驚異の眼で天狗のやうに描寫してゐるのが大變おかしか

つた。ビックリした畫家、感情まで畫面にただよふ。

只一人の婦人作家稲垣氏つる女のおとなしい婦人畫像が今度は出なかつたやうである。

それから陳べかたと云ふものも中々考へなくてはならぬことだ。去年の朝日の傑作展の時あれ程、たつた一つ出したが爲め光つた是眞の「茨木」も同種の大分下つた物を考へなく幾つか並べた爲めに平凡な繪馬額になり下つてしまつた。

この頃の生活

太田菊子

長谷川時雨様

あなたから、御創刊の『女人藝術』へ何か書かないかと、お勧めを受けたのは、あなたが支那にいらつしやる前でした。そしてお歸りになつてからも、幾度かお目にかゝる毎に、

「あれをね……」

と、仰しやられながら、お約束を果さずに過してゐました。忘れてゐるのでもなく、もとより忙し振つてゐたのでもありませんが、その日〳〵の仕事に追はれて、今日になつてしまひました。

土曜日（九日）の朝、素川絹子さんが、わざわざ原稿を取りにいらして下すつた時、私は全く、どきつと致しました。

「こんなにお手數をかけて……」

と、心から恐縮いたしました。

「月曜の朝、必ずお届け致しますと、長谷川様に仰しやつて下さい」

「屹度でせうね、これまでいつも、手嚴しく原稿の催促を受けてゐるのですから、今日は思ひ切つて催促して來て下さいと、長谷川様にいはれましたの……」

「本當に申譯ございません。――ですが、今夜は、一寸お客様を歌舞伎へ御案内することになつてゐますので、歸りが遲いんですよ、それに明日は日曜ですけれど、それも社の用で郊外へ一軒訪問するので、夕方遲く歸ると思ひますの、それからの時間で書くのですから、月曜の朝と申しましたのは、大勉強なんです。何卒あしからず……」

素川さんは「では屹度」と何度も念を押してお歸りでした。

×

豫定通りに參りましたら、私は月曜の朝、お宅へ原稿を屹度お届けしたに違ひありません。處が昨日の日曜は、仕事の大番狂はせが起りました。といつて、日曜だといふので、怠けてしまつたのではありません。寢坊の私

が、平生の通りに、朝の九時過ぎに家を出かけねばならなかつたのです。

　それは十日から、私の社の事業部の催しである「婦女界好み別染きぬ麻上布」の陳列會が、上野と銀座の松坂屋で催されることになつてゐましたので、その光景を一寸見ておいて、他へ行こうと思つたからでした。

　一時間餘りで兩方の店を見て、十一時過ぎには、世田ヶ谷へ、某氏をお訪ねする約束になつてゐましたのに、その陳列會に關して、突發的の用事が起り、あちらこちらへ奔走してゐる中に、三時過ぎてしまひました。四時過ぎになつて、やつと某氏を訪問したものですから、歸宅したのは、九時半過ぎてゐました。

×

　先月の卅一日から北海道へ修學旅行に行つてゐた長男（中學の四年）が、九日の夜歸宅したのですが、私がお芝居から歸つた時には、待ちあぐんで寢てしまつて居りました。それが朝出かける時には、十日間の强行軍での疲れのために、何も知らずに寢込んでゐるので、言葉一つ交さず、家を出てしまつたのです。眼を覺した時、私がもう出かけてゐないのを知つたら、隨分つまらないだらうと思ひながら……私のような忙しい仕事を持つ者の子供は、可なり可哀想だと考へながら、朝家を出たのでした。

　長男が家に歸つて、丸一晝夜の後に、初めて私達母子は、言葉を交へるような譯でしたそんなことで、十日間の旅行中のことを話したりしてゐる中に、お約束を忘れたのではありませんでしたが、つひ書けなくなつてしまひました。――子供との話――といふよりは今朝から晩までの中に、書くにも書けない程色々複雜な問題の幾つかに、私はぶつかつてゐたのです。そのために全然書く氣持になり得なかつたのです。毎日〳〵起きるから、眠むるまで、私は時計と追ひかけつこのみをしてゐるのです。私が時間から解放される時は殆どない位です。私は眠りながらも腕時計を氣にしてゐるのです。お風呂に入る時以外、私の腕から時計は離れないのです。

×

　雜誌の編輯者として、約束通りに原稿を手にする喜び、毎月〳〵違約されて苦しむ氣持それを十分知り拔いてゐる私が、月曜の朝お屆けしますといひ切つておいて、お約束を破ぶるなんて、本當にお恥かしいと思ひました。何故昨晩書かなかつたかしらと、朝になつてどんなにか、後悔致しましたでせう。

　早速お詫びの手紙と考へて社に參りますと又次から次と色々の用事に追はれて、午後になつてしまひました。七月號の原稿料を送ることなどをしてゐる中に、私はあなたとのお約束を、全くの一時的に忘れかけてゐました。すると受附の處で、あなたが社の佐久間氏と話してゐられるお聲が、はつと胸を打ちました。出てお詫しようかと思つてゐると、佐久間氏が、

「長谷川樣が一寸お目にかゝりたいつて……」とのこと。

「相すみません」と申上るより外はありませんでした。

「いつもあなたに、三上の原稿で、謝まらされてばかりゐる私が、今日はあなたに謝つて頂いて嬉しいこと！」

と、あなたは仰しやいましたのね。

　私は釘づけにされるような感じが致しました。

×

　あなたとお別れした私は、あれから、直ぐ

明治座へ行きました。忙中閑あり――芝居を見る暇はあるぢやありませんか――と仰しやるでせうね。併しこれは後でお分りでせうがまんざらの遊びではないのです。終りの勢獅子まで見たので、歸つたのは十一時でした。

　それから例によつて、お風呂に入つてゐる中に、十一時半になりました。

　併し明晩も、やはり遲くなるのです。もう廿日頃までの豫定がきまつてゐるので、こんなことをいつて、今夜を過してはならないのです。私が私用の原稿を遲らせたことによつて、三上氏の原稿を頂く日が、若し一日でも遲れては大變です！私は何でも今夜書こうと決心しました。

「今夜は少し起きて書きますから、みんな先へ寢て頂戴……」

「ママさん、何を書くの、もう十二時ぢやないの、明日の晩にしては……」

と、長男が床の中から、忠告してゐます。

「お母様！　早くおやすみにならないといやよ……」

　と、長女も半ば眠りながら、寢るように誘つてゐました。

×

私は、「編輯者の惱み」を書きませうつて申し上げました。それが、こんなものになりました。脫線でせうか？處がこれが編輯者の惱みなのです。

　何故つて？　私が編輯者でなかつたら、今夜原稿を書き得なかつたと思ひます。

　あなたは、私の立場をよく知つてゐて下さるから、私の原稿の遲くれたのを口實に、三上氏の原稿の遲れる時の引き合ひにはなさいますまいが、私としてはこんなことで、一日でも御迷惑をかけておくと、今度お宅へ伺つて、強い催促が出來なくなりますもの！。こんな原稿と、三上氏の創作とを比べては失禮ですけれど……「あなただつてこの間、あんなにお延ばしになりましたのね」と、あなたに仰しやられるのが恐いのです。

　私は、あと二三日すれば、また、あなたの所へ、三上氏の『淀君』を催促に伺はなければならないのですからね……

×

「一ヶ月に一册の雜誌でも、そんなに忙しいものでせうか」

　と、時には人からいはれます。全然素人の方がそうお考へになるのは無理もありませんが、此處數年來、私は、一日だつて、本當にのんびりした氣持になつたことがありませんお芝居を見てゐても、食事をしながらも、お風呂に入りながらも、仕事のことで頭は一杯です。

　今の私は、雨傘を持つてゐないのに、雨が降つて來て、歸りには困る……といふような心配はしないでも濟みます。又あの着物の裾が破れた、今夜あの裾直しをしなければ……といふような心配もなくなりました。

　子供達も、大きくなつて、それ／″＼今は眞面目に勉強してくれますし、女中も安心の出來る人達が、ゐついてゐますので、家庭内の小さい心遣ひは全然ありません。ですから他から見たら、氣樂な家庭の女主人で、小言をいふ人もゐないのですから、可なり惠まれてゐるそうです。

　處が職業婦人としての私は、餘りにも惠まれたがために、その職責を果さんがために、惱み苦しんでゐるのです。勿論現在の私の惱み、それは向上の惱みです。苦しいとは思つても、この惱みから脫れたいとは思へないのです。永久にこの向上の惱みと鬪ひ續けたい

と希つてゐるのです。

×

この頃、婦人雜誌改善運動を企てゝゐる方々があります。私達はこんなにも、婦人雜誌の熱心な研究者の現はれたのを、心から嬉しく思ひます。唯本當に婦人雜誌を讀まずにゐて、婦人雜誌抗撃をしたり、中央公論や、改造を讀むことによつて、高級だと考へてゐる人達を、笑止に思ふのです。

或る會合の席上で、或る婦人が、

「私達の仲間の人、五百人に就て、どの婦人雜誌を用意しませうかと尋ねますと、一人として婦人雜誌を欲しいといふ者がないのに驚きました。――でもあなた方は、婦人雜誌を讀んでゐるぢやありませんかと、重ねて申しましたが、みんな『中央公論』や『改造』を讀みたがつてゐる者のみでした……』

といつてゐられました。

『中央公論』も『改造』も讀みこなせる婦人の多くなるのを望みます。併し婦人雜誌とこれ等のものとは、全然行き方が違ふのです。この見分けのつかない女性が殖して行くのが本當だつたら、それは一寸婦人のために悲しく思ひます。併し私達は、そういふ婦人方に讀んで頂けなくても、それ程恐いとは思ひません。婦人雜誌の眞價を信じてゐますから。

これからの婦人雜誌が何う救はれるか、どうなつて行くか、面白いことだと思ひます。私達は益々忙しくなるばかりです。

×

長谷川時雨樣

こんなことを書いてゐる中に、とうとうお隣りの鷄が鳴き出しました。今丁度三時ですこれから床に入つて眠くなるまで讀書です。朝は七時半から八時に起きて、九時には丸ビルの事務所へ出勤します。こんなに夜更しても、明日は元氣で働ける私の健康を喜んで下さい。日曜に世田ヶ谷で貰つて來た、スヰートピーが、机の隅に美しく咲いてゐます。

――（三、六、十二）――

「戀愛の道」各人各語側聞記

——朝日新聞社紙型室にて——

無名指子

勞農ロシアの思想、生活、戀愛を取りあつかつたコロンタイ女史の『戀愛の道』についての知名婦人合評會が、月曜會の招待狀で六月十八日、その階上紙型室で開催された。集つた各女性は、左傾、中庸、旣成作家、新進作家、詩人、歌人、評論家、婦人運動の人々かなり多數。おもなる人をあげると神近市子氏、平林たい子氏、深尾須磨子氏、新妻伊都子氏、林芙美子氏、金子しげり氏、市川房枝氏、山田わか子氏、野上彌生子氏、今井邦子氏、吉屋信子氏、生田花世氏、城山登美子氏、原田琴子氏、竹中繁子氏其他ほとんど各方面の人が集つたといつてもよからう。

この「戀愛の道」の一「三代の戀」といふのは、時代（ロシア）を背景にしての、婦人三樣の戀愛生活なのであつて、いはゞ古い戀、中古の戀、新しい戀とでもいふべきか。

古い戀は、舊時代の自由主義者たる祖母の戀愛冒險、中古は、共產黨の立役者たる母の戀愛受難、もつとも新しいのは、母の夫とも關係する娘の多角戀愛である。そしてその娘が母の夫と關係したことについてのその考へ方、肯定的な考へ方について、コロンタイ女史の暗示しようとしたものを批評考索して見ようとの月曜會の企ては、けだし時機を得たといふべきであらうとおもつた。

いろ〳〵の人の發言のまへに山田わか女史が、コロンタイ女史の序をよんだ。次に、コロンタイ女史のこの『三代の戀』に對する駁文とも見たるべき意見としての高群逸枝女史の今日の會によせた文章をよんだ。それは熱意のこもつたものであつたが、獨斷的なところ、概念的なところのあるものとして、神近氏あたりから何か出るとおもつてゐると平林たい子氏が、發言した。つゞいて、神近市子氏が明朗な聲で、說明し批評した。吉屋信子氏が機智的に答へ、又、質問した。今井邦子氏が語り、生田花世氏が語つた。金子しげり氏と新妻伊都子氏とがこんぐらかつてゐることをほどいては、問題の道を進行させた。（以下記者の心おぼえ、責任記者にあり）

『母の夫を奪ふことは平氣なのに、一體まあこの娘は、母のために泣いたりして……そんなところバカに親孝行ねえ』（吉屋氏）

『これは、今のロシアの過渡的の動き方であつて、コロンタイ女史のいはうとしたことは、どんなことが起つてもビツクリするなといふことと女性をしつかりさせようといふことの警告なのだとおもひますね。』（神近氏）

『こんな娘が出るといふことは、たしかに退步ですね』（山田わか氏）

『私はこの三代の戀についてはほんとに考へさせられました。そしてこんなに皆さんの御意見が伺へてうれしうございます』（今井氏）

『戀愛は私事として考へこまない、重大な問題にしない。とにかく、男も女も活動して有能者となる、そして有能者であるといふ意味において、私事なる戀愛は小さくみなすといふのがその『三代の戀』の娘の考へですこれは主義者として自然さうなりやすいことですから』（平林氏）

『フランスなどでは、男一人に女七人といふ風になつてゐます。何しろ、女ばかり多いので、結婚は實に女にとつてむづかしいのです。男は實に引つぱり凧です。五十歳位の女が二十一歳位の男と結婚して、私の子供といつてパンなども柔かいところをやり、赤ちやんをはぐくむやうにして大切にしてゐます……さういふ例をかなり多く見て來ました、悲劇があるべきでせう』（深尾氏）

女が結婚しがたい、家庭を得がたい、そのための爭奪、そのためのいろ／＼の戀の形、結婚のめづらしい形、そんなことが、深尾氏のもたらした見聞談ではつきりする。ロシアフランス、ドイツ、其他の國々の惱める女の心は、やがて、日本に於ても同様の惱める女の心ともなるであらう。女が子供があるから大丈夫とか、家があるから大丈夫とかといつて安心されもしないし、夫を大切にしてるからといつても安心されもしないし、どんな事でも起るから、しつかりして、ビツクリしないやうに考へ、生きねばならぬといふこと、神近氏の結論的にいつたことに結局『三代の戀』各人各語評はおちつく。

そのあとで子供と、母、ダタイのこと、市川房枝女史の海外への旅についての後援講演會のことなどをはかつて散會。

近頃めづらしい眞劍な會だつた。

現ロシア最左派たる娘の多角戀愛『こんな風に罪惡觀念がなくつて、明るくのび／＼とこんな風に出來るのなら、ねえ、一寸……ロシアへ行つてくらしたい氣がするぢやないこと……』

と吉屋氏がヘウキンにいつたつけが、しかし山田わか子氏は、『退歩です』ときつぱりいはれるのだ。平林氏、神近氏は『大事の前には小事とすべきでせう』といふ意見と私のきいたのはききちがひではないとおもふ。つまり、そんなには重く見ない、それはやむを得ず、時代に生きる人間のさうある姿なのだ。でも、社會が整頓して來たら、そこから新しいものが芽を吹くのでせうといふ風に、ロシアの男女生活を想望させた。

『コロンタイ女史、その人がいろ／＼の戀愛を經て來てゐる婦人です』

と神近さんはいはれた。會の氣分が中分なくシンケンだつたので、皆滿足だつた。

『あちらでは、戀も、子供のことも、母のこともくらべものにならぬほど、日本とはちがふのですから……』

といはれた深尾氏の言葉は何としても味ひ深いものなのだとおもつた。時代、國情に從つて古きは新しくなり、新しきは古きに還る。しかしその古さは決して前の古さではない。だから退歩とも進歩ともいへないものだ。要するに、人間は力づよく生きるのがよいといふことになるのだ。そんな風な氣分によつてこの會は人々の心に印象づけられたとおもふ。

× × × × × ×

社會時評

大木耳子

一、夕刊のプロフヒール

支那の動亂に關する各新聞紙の寫眞は、皆それ〴〵の意味で私共の注意を引かないものはないが、特に五月の十六日から十七日にかけて一二の新聞に現はれた支那の女學生達の街頭演說の光景は、私共の注意を引いた。

彼女達が說いてゐるのは、新聞紙がいふやうに排日の宣傳であるのか、又は革命の理論であるのか私には分らない。が、巷に立つ彼女達がいかに若く眞劍であるか、そして聞く民衆が（中には子供さへ交つてゐるのであるが）何と熱心に彼女達を支持してゐるか、それだけは感じられるやうな氣がする。

私は、今支那に現はれかけてゐる排日の氣勢について、果して彼我何れの側にその責任があるか、こゝでは考へては見ないことにする。たゞこんなに排日宣傳の盛んなところに兆して見ると、日支間の關係の上には私共が喜ばない多くの暗影があるといふ噂は事實であつて、私共は今更に時の政府によつて言明されるところを民衆が徒らに盲信することの危險に怖毛を立つるばかりである。そして支那の青年男女を驅つてこんなに勞せしむることについて、私共は今更らに自分達の側に何等かの責任がないかを顧みさせられるのである。

國家が多事であるのは、全國民の災ひである。けれど中でも最も重く勞苦を負ふ者は青年男女であることはいふ迄もない。實際に、最近二三年の支那の青年男女の活動は目覺ましいものであつた。最近親しく支那に遊んだ人で、その光景に眼を見張つて歸らない者は恐らくはなかつた。

最近のアメリカネーション誌で、どこかのプロフェサアが、その事に言及してゐたのを讀んだことがあつた。このプロフェサアは、アメリカが道徳的に精神的に墮落することから救はれなくてはならないなら、今日の支那の青年男女はアメリカ人にとつて模範とすべき一つの精神を表示してゐると云つて、自國人に一つの警告を與へてゐたのであつた。

『支那の若い學生達は、新しい支那の土臺を置かうとして同時に新しい支那の歴史を造へやうとして、非常な高價を支拂つてゐる。實際に過去三年の間にその生命を投げ與へた支那の若い男女の數は、少くも數百に及んでゐる。

かう、その稿を始めたエレミヤ風のこの教授は、更に筆を進めて最近軍閥の手で北京で死刑に行はれた北京大學の高といふ教育部長の死について詳細に報道した。この新進の教育學者が、いかに勞苦して教育制度を確立しようとしたか、彼がいかに愛すべき熱情家であつたか、しかも何等の適確な證據もなくて曖昧な嫌疑の爲めに捕へられ、軍時監獄に三ケ月監禁された上で市内をいかに引廻され死刑に處せられたかといふこの記事は、私共にさながら中世紀の一個の殉難史をひもどく感じをさせた。

『これら死刑に行はれる支那の青年は、いふ迄もなく大抵は支那に於ける最も愛すべき人々で、彼等が死ぬのは彼等が理想を有しそれを實現しようとする勇氣を有してゐるからである。』

支那の婦人達は、印度、土耳古の婦人達と共に最も長く古い傳統と力強い桎梏につながれて來た人々であつた。その彼女達が、今日は世界の婦人の最前衛にゐるやうに感じるのは、私の錯覺であらうか。

いつか、私共も彼女達を道徳的に――特に勇氣と同胞への愛に於いて――見習ふ必要に遭遇することであらう。

二、『女性』の廢刊

プラトン社の『女性』が、遂に廢刊になつた『女性』は、日本の婦人雜誌としては珍らしく氣持のいゝ雜誌であつた。清楚な感じの一種獨特の山名氏の挿畫と、いかにもインテレクチュアルな、新しい日本の婦人の伴侶をもつて任じてゐる編輯振りとは、一寸他の雜誌で眞似の出來ないものがあつた。いかにも文學好きなブルジョワの若き人々でも喜ばれさうなハイカラさを持つてゐたのに、七年の日子と巨萬の資銀

を費して逐々營い繁昌の月を樂しむことが出來なかつたといふのは、他の凡百のくだらない婦人雜誌が隆々たる繁昌を樂しんでゐるのに引較べて、いさゝか淋しい氣持がしないでもない。しかし、かうした當然ある時期には歡迎されさうな雜誌が顧みられず、低級卑近な反動的な婦人雜誌と社會主義的傾向の雜誌とが並んで喜ばれるといふところにも、日本の資本主義が一種變態的な發達を遂げて來てそれ自身の爲めに定められた過程に急激に進みつゝある證左があるのだと思ふ。

が、『女性』それ自身についても、婦人雜誌中であれほど特色があり且つ高級な雜誌をもつて任じてゐたのであつたから、せめて雜誌としてどの程度かの確立された指導理論を持つてゐたなら、七年といふ長い日時の間には一度位何とか花を咲かせる時機に出逢つたのではないか、と思はれないこともない。

ジャーナリズムの世界では、指導理論を持つことを大變に忌諱する傾向がある。それは萬人の新聞なり雜誌なりであらうとする刊行物を、社會の一部の人々のみを喜ばせる結果に陷ることを極端に嫌ふ營業政策上からの主張であつて、これらの人々は公けの刊行物は無主義無主張でなくてはならないと主張するのである。しかしこの考へ方は一理あるやうでなてその實は必ずしもこれらの人々が豫期する通りではないやうである。

無論、政治上とか宗教上の主張を露骨に紙上で行ふとか對立する黨派の一つを支持するとかいふことは、資本主義ジャーナリズムの世界では極力避けなくてはならないことであらう。しかし全體としての傾向を統一し、進歩的な線上を行くか退嬰的な立場に止るかは、編輯者の頭で豫じめ決定されてなければならないことゝ思ふ。造られた新聞なり雜誌なりを手にすると、案外編輯者の意圖は讀者の頭に反映するものである。編輯者の頭が動搖し、日々起つて來る社會的現象に對して理解を欠き、昨日主張したことを今日は打消し、今日語るところと明日のそれとは矛盾すると云つた種類のことを見出すことは、主義の相違とか主張の違ひとかいふことを別にして、余り氣持の好いものではない。さうした日和見主義の態度といふものは、立場の相違を別にして案外讀者を反撥せしめるものである。讀者の側からいふと好意を持てないのである。

これは、私が『女性』を日和見主義だつたと非難してゐる

のでは決してない『女性』の場合は前にも云つたやうに、特色が『ハイカラである』とか『文學的である』とかいふ點に限られて、日本の婦人自身の地位に余りに無關心であつた點で物足りなかつたといふのである。實際にこゝ四五年の間に日本の婦人は驚くべき飛躍をしたのであるから、せめては婦人參政權位を目標としてその運動を凡ゆる意味で支持助長する態度を取つたら、雜誌も活氣を呈するし、進取的な婦人達の支持をうけてどの程度かの地盤を獲得することに成功したのではあるまいか。

三、井上氏一派の挑戰

汎太平洋婦人會議の代表者の選定に、横車を押さうとしたといふので、井上秀子女史が方々で大分非難の的になつてゐる。

私など、汎太平洋會議などは、もと〱さうしたブルジョア婦人を對手の半ば社交的な會合で、何等一般國民の福利に關係はないと考へてゐるので、代表者の選定が問題とされてゐるとなつても何等の興味も起さなかつたが、市川房枝さんが『讀賣』で發表された談話で、それにも一派の人々の策動があつたといふことが明らかにされると、若い進歩的な婦人達が彼女達によつて挑戰されてゐることを感じて、井上氏の一派と稱せられる人々に對して新たな反感を感ずる のである。

結局は、市川房枝氏と全國小學校女教員會選出の二人とが、この井上氏の專斷に反抗して無理に割込んで出席するといふことになつたらしいが、これは井上氏一派に對する戰術としては拙かつたと思ふ。どうせ太平洋會議などが、國家と國家との間の重大な問題に容喙することが出來ないことは極つてゐるし、又それは各國の國内法にも何等の重大な影響を與へ得ないことはいふ迄もない。だから戰術としては、策動した連中をその儘無事に一團として出席させて置いて、その一團を全體として排斥した方がよくはなかつたかと思ふ。

つまり井上氏の選定によつて太平洋會議に出席した人が、決して日本の婦人界を代表してゐるものではないといふことを、文書でなり決議案の形でなり表明する方が、一派の人々にとつてはその反響は大きくはなかつたかと思ふ。

會議の主催者側でも、決して數人の知名婦人が相手ではないのだから、日本の多數の婦人が代表として認定しないと云

へば困るであらうし、出席した方の側でも資格を疑はれゝば出席しても面白くないに相違ない。

それにしても井上女史が、僅かの感情によつて左右されたといふことは眞實なのであらうか。それは直ちには信じがたいのであるが、しかし今回のことによつて氏はその反動的の立場を、私共の前に最もよく證明されたのだと思ふ。

今後は、日本の若い婦人は氏と氏の氣息がかゝる一派に對しては、白眼をもつて警戒し、その言動の一つ〳〵を成心をもつて眺めることになるであらう。

何れにしても今回の代表者の選定は、ブルジョア婦人と進歩的な智識婦人との間の分界が明らかでなかつた日本の婦人界に、新しい分野を明らかにした點と、智識階級に屬する若い進歩的な婦人が、從來は無批評に眺めて來たこれらブルジョア反動婦人の盲動に、可なりに激しい反感と批判とを表明した點で、時代の動きをハツキリと見せた興味ある出來事であつた。

小サロン

ある怪談會の席上、幽靈話いまや闌、美女の亡靈が袂をあげて、後向きにはひつてくるといふところで、大きにゾツとさせる瞬間、その道の大通泉鏡花先生、微醺の眼鏡をギラリと据えて「チヨ、チヨツと、お話の中ですが、夜這ひといふやつは後向きではひるものださうです、女は帶をしいて、男は六尺でね。」同席の里見弴氏すかさず「常習犯でらつしやるから」

×

直木三十五さん近々ゴシツプおでん開店のよし、めでたし、但し味噌でんなりと。

×

このごろピグミーのおもちやが流行する。らいてふ氏の客間にもあつたが、生田春月氏の書齋には種々なのが集められてある。書齋の主人つれ〴〵にはピグミーを踊らせて樂しむ。ある日訪客ふと覗くと、緣側にとても大きなピグミーが立つてゐる。オヤと叫ぶとふりかへつた笑ひ顏は、豈はからんや主人春月氏であつた。けだし貞淑なる花世夫人の幾夜か考案の末になるものにて、この詩人の憂欝を癒さんために、赤き帽子、赤き服をつくりあげたのである。それを着して踊る春月氏、まさに傑作なるかな。この後春月氏の詩風とみに明るさを加へるであらうと岡焼きの雀どもの喧ましいことよ。

新興文壇番附

眞平御免

東方	
横綱	前田河廣一郎
大關	宮嶋資夫
關脇	里村欣三
小結	葉山嘉樹
前頭	江口渙
同	村山知義
同	岩藤雪夫
同	内藤辰雄
同	犬田卯
同	久板榮二郎
前頭	飯田豐二
同	高橋新吉
同	山田清三郎
同	大木雄三
同	佐々木俊郎
同	倉田潮
同	橋本英吉
同	本庄陸夫
同	入交總一郎
前頭	越中谷利一
同	大月隆杖
同	赤木茂
同	古賀不美男
同	大河原浩
同	佐々木弘之
同	酒井八州男
同	橋爪健
同	鈴木彦次郎
同	片岡鐵兵

張出關脇　北村小松

目下休業中　中西伊之助　新井紀一

西方	
横綱	藤森成吉
大關	黒嶋傳治
關脇	金子洋文
小結	今野賢三
前頭	江馬修
同	小堀甚二
同	鶴田知也
同	岡下一郎
同	小島昂
同	鹿地亘
前頭	和田傳
同	井東憲
同	中野正人
同	諏訪三郎
同	山川亮
同	山内謙吉
同	立野信之
同	西澤隆二
同	辻本浩太郎
前頭	光成信男
同	島影盟
同	畑山茂
同	金熈明
同	星川周太郎
同	相本清二
同	奥村仁
同	森本巖夫
同	石濱金作
同	今東光

張出大關　林房雄

目下休業中　藤井眞澄　吉田金重　坪田譲治

行司
青野季吉　村松正俊　平林初之輔　新居格
中野重治　藏原惟人　田口憲一　本莊可宗

年寄
長谷川如是閑　秋田雨雀　中村吉藏　宮地嘉六　小川未明

勸進元
千葉龜雄　平凡社

呼出
伊藤忞

文壇人氣番附

眞平蒙御免

東方

- 横綱 菊地寛
- 大關 三上於菟吉
- 關脇 久米正雄
- 小結 廣津和郎
- 前頭 葛西善藏
- 同 久保田萬太郎
- 同 佐々木茂索
- 同 長田幹彦
- 同 加能作次郎

- 前頭 細田民樹
- 同 大佛次郎
- 同 小酒井不木
- 同 甲賀三郎
- 頭 尾崎士郎
- 同 横光利一
- 同 小島政二郎
- 同 池谷信三郎
- 同 犬養健

- 前頭 吉川英治
- 同 國枝史郎
- 同 細田源吉
- 同 豐島與志雄
- 同 安成二郎
- 前 加藤一夫
- 同 菅忠雄
- 貧乏神 直木三十五

- 前頭 十一谷義三郎
- 同 鈴木彦次郎
- 同 稻垣足穗
- 同 山崎賦
- 同 楢崎勤
- 同 横溝正史
- 同 村松梢風
- 同 木村幹

- 張出大關 佐藤春夫
- 張出横綱 武者小路實篤
- 張出小結 山本有三

行司

小山内薫　志賀直哉　中村武羅夫　正宗白鳥　近松秋江

年寄

田山花袋　徳田秋聲　島崎藤村　泉鏡花

勸進元

永井荷風　谷崎潤一郎

呼出

木蘇穀　藤森淳三

西方

- 大關 里見弴
- 關脇 吉田絃二郎
- 小結 宇野浩二
- 前頭 室生犀星
- 同 眞山青果
- 同 吉井勇
- 同 加藤武雄
- 同 佐藤紅綠
- 同 谷崎精二

- 前頭 岡田三郎
- 同 江戸川亂歩
- 同 林不忘
- 同 戸川貞雄
- 同 中川與一
- 同 川端康成
- 同 近藤經一
- 同 佐々木味津三

- 前頭 土師清二
- 同 下村悦夫
- 同 田中純
- 同 相馬泰三
- 同 藤澤清造
- 同 南部修太郎
- 同 沖野岩三郎
- 同 瀧井孝作

- 前頭 淺原六朗
- 同 酒井眞人
- 同 川崎長太郎
- 同 高田義一郎
- 同 佐々木千之
- 同 本田美禪
- 同 行友李風
- 同 渡邊均

- 張出大關 中里介山
- 張出小結 白井喬二



遠近

ささきふさ

やつと一座から抜け出して舗道に出ると、内部(なか)の眩しさとはうらはらに、夜店ももう拂はれたあとの何處か薄汚い銀座だつた。錦子は早められるだけの早さで車道の際を歩いて行つたが、不二屋の前あたりでふと氣付いて腕時計を覗くと、終列車までにはもう三分しかなかつた。三分あれば驅足で新橋まで行き着けないこともなささうな氣はしたが、切符を買はなければならないし、――さう思つてゐるところへ小綺麗な圓タクが通りかかつたので、錦子は素早くそれに乘り移つた。

少し呼吸をはずませながら階段を登つて行くと、上りきらぬうちに

「やあ。」

「やあ。」

「やあ、――」

欄干の上で知つた顔がいたづらさうに笑つてゐた。

「二人？」

「ええ。」

「二人は怪しからんですな。」

「その御機嫌の方がよつぽど怪しからんですね。」

「我我？　我我は邦樂座の歸りにコクテールをひつかけてきただけですもの、清淨潔白、——」

そこへ機關車がはひつてきたので、錦子は男達の間に挾まれながら乘車した。二人づつ向き合つて坐る椅子の車室だつた。錦子は偶然筒井さんと向きあひになつた。筒井さんは恰幅のいい、いつも元氣な中年の眼科醫で、湘南から東京の治療所へ毎日汽車で通つてゐるのだつた。他の連中は背中合せの席でまだ酒の上の冗談口をききあつてゐたが、一人と一人とで筒井さんに向き合ふと、錦子はさつきの續きの輕い口もきけなかつた。

「奥樣は此頃如何？」

「ええ、相變らずでね、——」

筒井さんも忽に眞顏になつて彼女の相手を始めた。

「やはりお休みになれませんの？」

「やたらに眠劑をのんでゐるやうですよ。此間なんてよつぽどのんでゐたとみえて、銀座の眞中で急にふうつと、——どうも。」

「ヴエロナールなんて、お教へしなければよかつたのね。」

「いや。先生此頃——尻尾を摑まれてゐるのでね。」

「まさか！」

「それなんですよ、原因は。」

「だつて、あんな可愛いお子さんもおありになるのに、――」
「それが She is woman なのでね。もう She is man であつてもいい筈なんですが。」
「でも、――信じられませんわ。」
「尾行までつけられてるんですよ。此頃はもう手も足も出なくなつちまつたので、仕方ないから、小原君なんかと活動を見てコクテールでもやるのがせいぜい、――可哀想なものです。」
「さう、さうなの。私は又、摑まれてゐると仰しやつたから、奥さんの方で筒井さんに尻尾を、――そんな筈はないと思つたのですよ。」
「いや、そんなこたありません。」
筒井さんは旦那様らしいやさしさで夫人を庇つた。
「御免なさいね。汽車がごうごういふものだから、」
「いや。しかし錦子さんがそんな場合に打當つたら、――そんなことはないだらうけれど、若し善男さんに女でも出來たのが判つたら、どうなさいますかね。」
「それこそ、興味をもつちまふでせう。それに男の人は外に何かあると、自家に歸つた時の氣持が明るくなるのぢやありませんか？うちの善男みたいにしよつちゆう苦蟲をつぶしたやうな顏をしてゐられると、ちつとは外で遊んででもくれたらと、――」
「さういふ風に見てもらへると、助かるんだがな。私のやうな商賣をしてゐると自然いろいろな女に打當ることになりますからね。中にはなかなか物の解つた、――」
「お安くありませんのね。」
「いや。一度お嫁に行つた人とか、若い未亡人とか、女とは思へないほどさつぱりと、――はいさやうならで別れるやうなのが、此節はなかなかあるのですよ。どんな男だつて私の位置に置かれたら、――」

「羨ましがられるでせう？」
「ところがとかく不良扱ひでさ。」
「口だけの不良扱ひでせう。内心羨ましくてたまらないからよけい、――」
「そこもあるでせうね。だからうちの者だつてそこを少しは理解してくれてもいゝだらうと思ふのですが、やつぱりうちの者の身になつてみると、――」
「でもそのくらゐ奥様に想はれてらつしやるのだから、お幸せね。」
「いやどうも。しかしあなただつて善男さんに何もないからさういつて居られるのかも知れませんよ。いざ何か、――」
「大きに何かやつてゐるのかも知れませんよ。」
錦子はそして筒井さんの笑聲に笑聲を合せた。彼も善男に何かやれ得るとは思つてゐないらしかつた。が錦子はひそかに夫に何か起つた場合を考へないわけにはいかなかつた。はいさやうならですむやうな場合が起つたとしたら、彼女は何の關心もなく見過すことが出來さうだつた。若し又彼女に代るべきものが善男に出來たとしたら、その場合は彼女の方ではいさやうならと別れて行くまでだつた。彼女はおそらくいづれの場合にも嫉妬は感じないだらう。たとひ嫉妬したとしても、そんなことで手や足の出なくなる善男でもないだらう。――――彼女はそこで初めて、不良扱ひにされてゐる筒井さんの方が善男よりは遙かに善人であるらしいのに氣付いた。

玄關で飛びつく犬にビスケットを與へながら內部を窺ふと、善男はまだ歸つてゐないらしかつた。
「何誰もおみえにならなかつて？」
「はい何誰も。」といつてから女中は、

遠　　近　（ささきふさ）

「あさうさう、平和タクシの折坂さんがまゐりまして、今度新しい車が來たから是非乘つて下さるやうにつて。」
「さう。來たの？　來たら乘つてくれとは私達にもよくいつてたけど。」
「さつきおもてゞ旦那樣にお目にかゝつたので、よつぽど申し上げようかと思つたのださうでございましたが、お作れがおありだつたからやめてこちらへ上つたのだと申して居りました。」
「いつ頃お出ましになつて？」
「三時頃。御飯までには歸ると仰しやつてでしたが、――」
「毎度のことぢやないの。」
錦子は女中と心おきなく笑つた。
善男は錦子が湯あみをすませたところへ歸つてきた。急いで寢衣のまゝ玄關へ飛び出すと、
「お客樣だよ。」
氣を付けろといふ風に善男はいつた。彼女は周章て着がへをするべく退却した。着がへをすませて茶の間に戻ると、善男は親友の宮口さんともう將棋をさしてゐた。
錦子は茶を入れながら獨言のやうにいつた。
「お作れつて、宮口さんだつたのね。」
「お作れ？」
「さつき二人で停車場の前を歩いてらしつたでせう。そこをお見かけしたけど、――」
「誰がさ。」
「折坂さん、平和タクシの。――お作れがあつたから、――」
「僕は善男君となんか歩きやしませんでしたよ。」

宮口さんはとぼけていつた。何をいふ時にも、眞實をいつてゐるのか、冗談をいつてゐるのか判らない宮口さんだつた。
「ぢや、あの綺麗なのとでも歩いてゐたのでせうよ。」
錦子も宮口さんの調子を受けて、とぼけたやうに笑つた。
彼等は風呂に入ることも忘れて、戸の隙間に白じらと朝の覗くまで、俗まず將棋をさしてゐた。數盤負け續けた宮口さんは、
「あほらしいや。」と棋子をさめ始めた。
「どうして今夜はさう手答へがないのかね。」
「御婦人の前だと、莫迦に強くなるんだからな。」
「御婦人にもよりけりでせう。私なんか宮口さんが勝てばいゝ勝てばいゝと加勢してゐるつもりなのよ。」
「どうだか、――」
「ぢや、私は向ふへ行つてるからもう一盤、負かしてやつて下さいな。」
「負けてやらうか。」
「寢かしてもらはう。」
宮口さんは疲れたのか、妙に不機嫌だつた。
「お風呂は如何？少しさめたかも知れませんけど。」
「せつかくですが、やめときませう。」
宮口さんはいやに又丁寧だつた。
「俺もやめて寢ようかな。」
「なら、寢衣を取つてこなくちや。」

遠　近（ささきふさ）

錦子が風呂場の方に立ちかけると、善男はふと思ひかへしたやうに、

「やつぱりはひつて寢ようかな。」

といつた。それから宮口さんを顧みて、

「君も一緒にはひりたまへよ。」と强ひた。

二人の男はそこでシャツ一枚になつて風呂場の方へ出て行つた。錦子はすぐ脱ぎ棄てた客の衣類を片付けた。序でに皺くちやになつた善男の不斷着も疊んでおかうと思つた。が疊みかけたところへ不意に善男が、タオルを腰に捲きつけながら戻つてきた。

「何かないの？」

「うん、いや。」

彼はきよとんと、愚に近い目でひとわたり其處等を見廻すと、直ぐ又踵をめぐらして風呂場の方へ引返して行つた。

疊みかけた着物の袖口から手巾を拔き出す時、錦子は突然或異臭に打たれた。手巾はいささか强張つたまま揉みくちやになつてゐた。のみならずたつぷりと吸ひこんだ血のあとを其處此處に赤黑く滲ませてゐた。

錦子に先づぴんときたのは不潔の感じだつた。次いできた感じも「不潔」だつた。が彼女は不潔だと感じたその手巾に自分の顏を押しあてるやうにして、何度も何度も不潔な異臭を一心にかいだ。火箸でつまんで厠へ棄てようかとも思つたが、何か手文庫の底にしまつておくべき寶のやうに思はれた。錦子の胸には不思議に何の感情も湧いてこなかつた。動いてゐるのは、まるで數學の問題でも解く時のやうな澄みきつた理智ばかりだつた。

お伴れ、宮口氏でない伴侶、お綺麗な伴侶。――彼女にはてんで心當りといふものがなかつた。それだけ想像も自由なわけ

だつた。何處かの夫人？　玄人？　おそらくは又處女？——錦子は早急にそれをきはめたい氣がした。尾行を頼んだ筒井夫人もこんな氣持からではなかつたのかなと彼女は初めて氣の付いた氣がした。だが尾行をつけるなどは彼女にはめんどくさかつた。めんどくさいよりは、それによつて彼女自身の矜持の傷つけられるやうなのが厭だつた。若し何處かに悲劇が醸されてゐるのだとすると？——だがよし醸されてゐるにしても、それは善男の、或ひは彼と誰かとの醸し出した悲劇で、彼女は何のかかはりもない筈だつた。善男が打ちあけぬ限りは彼女は知らん顏をしてゐていい筈だつた。若し又彼女の何らかの欠陥が、その悲劇を醸させた間接の原因になつてゐたのだとすると、——が彼女は省みて何の落度も感じることが出來なかつた。落度がないとすれば、悲劇の間接の原因が彼女の欠陥にあつたとしたところで、其處までの責任を負ふいはれは彼女にはないやうな氣がした。それに欠陥のあるのは、人間である以上、お互ひさまだつた。だから彼女はやはり善男の方から何とかいひ出すまでは、默つて知らん顏をしてゐるよりほかなかつた。

　錦子は或微笑を感じながら安らかに眠り、こだはりのない顏で朝の食卓に向つた。一つの秘密を握つてゐることは、何か相手を見下し得るやうで、愉快だつた。のみならず、ともすると倦怠に捕はれがちな彼女にとつては、頭腦が敏活に働いてゐることだけでも、かなりな救ひといつてよかつた。

「腹ごなしに一盤。」

「復讐をするかね。」

　善男は錦子が珈琲を淹れてゐる間に、朗らかに笑ひながら棋子を並べ始めた。目を局面にとめたまま彼が一口黑い珈琲をすすりかけた時だつた。ぽたぽたと不意にセルの膝の上に黑い血がしたたり落ちた。

「おや！」と彼は周章て袂へ手を入れた。錦子は急いで新しい手巾を彼の方へやりながら、「また！」ではなかつたのかなとふと思つた。鼻血の量はわりに少かつた。善男は鼻の穴に脱脂綿をつめると、直ぐ又將棋の續きをさし始めた。

「君、あまりのぼせないがいいせ。」と宮口さんは善男の一心さを嗤つた。

「此機に乘じて昨夜の復讐をする氣か。」と善男も笑つた。
「ところがそんなんぢや、勝つたつて負かした氣にはなれないからな。」
「さうなるとなほ負けられないぞ。」
善男は案外明快に先の先を讀んでさしてゐるらしかつた。
錦子は勝敗をよそに、善男が「昨日も鼻血が出たのだよ」といひ出すのを待つてゐた。が彼は忘れたのか、そのことは遂にいひ出さなかつた。彼女はいささか物足りない氣持で其處らを片付けると、血のついた二ツの手巾を持つてそつと厠へ隱れた。彼女はそこで犯罪のあとをさぐる探偵犬のやうに、二つの手巾を代るがはる鼻先に當ててみた。匂ひには何處か違ひがあるやうだつた。が違ひは昨日と今日との差にもある筈だつた。そこまで嗅ぎ分けられないのが彼女にはひどくもどかしかつた。
宮口さんが歸つたあとで錦子はよほど、昨日も鼻血が出たのでせうと、夫にさぐりを入れてみようかと思つた。が昨日のが鼻血でなかつた場合には、ひつこみがつかなくなると思ふと、迂濶にはそんなこともいひ出せなかつた。
「どつちだつていい。いや、何もなかつたことにしておかう。」
が、どの目で見ても夫は昨日よりは遙かに愛すべき男になつたやうな氣がした。錦子は此頃になく生きがひのあるやうな氣持になつたのも事實だつた。
「が若し昨夜汽車の中で筒井さんの話を聞かなかつたとしたら？」と彼女はふと考へた。さうしたら彼女も一度は筒井夫人と同じ過程をとつたかも知れなかつた。錦子が此出來事に對して明るい態度をとり得たのは、或ひは潛在的にその轍を踏むまいといふ氣持が働いてゐたからかも知れなかつた。とすると、――彼女は心の中で筒井氏に謝し、同時に又筒井夫人に謝した。
だが又若し筒井さんの話を聞かなかつたとしたら、やはり鼻血にすぎなかつたかも知れない手巾の汚點から、こんないろいろの推量などはしないでもすんだのかも知れなかつた。ただその空想によつて、ちよつとの間でも倦怠から救はれたことを思ふと、錦子はやはり筒井さんに對して或謝意なきを得なかつた。



或る妻

眞杉靜枝

一

午后、河原の妻は、唇を蒼くして不二子の家へ來た。今日外科病院から退院する子供の好ちやんと、その下の赤兒を子守の背に負はせて、人力車一台に荷物を積み、退院の歸途不二子の家へ寄つたわけだつた。

『河原は、迎へにも來て呉れませんの。』妻は疊に膝を折るなり訴へた。

今日退院する事は、よく河原に知らせてあるのに、河原は、店の會計から二三日前に入院料の支拂ひにあてるべき金を受取つたまゝ行衞不明だと云ふのだ。

不二子の夫の爲めには親友で、不二子にとつては、迷惑以上仇のやうな惡友の河原であるが、その妻と不二子は、姉妹のやうにしてゐた。

入院料は、兎もかく後程屆けますと云つて、出て來たと云ふので、不二子は直ぐ勤め先きの夫へ電話をかけ、病院へ金を屆

けてもらふ事にした。併し、河原が自家の鍵を持つてゐるので、皆は不二子の家で河原の歸るのを待たねばならなかつた。

三週間程の病院生活で、大柄な肉付きの厚かつた河原の妻も、頰が骨張つて、腕なぞ、白く透き通つたやうである。胸一ぱいの怒りで、唇をかすかに痙攣させ、泪も出ぬやうである妻の横で、不二子はそれを宥める氣にはなれなかつた。多分、河原が此處へ歸つて來たところで、此の妻は蛇のやうに、怒りや、嫉妬でのたうちながらも、口へそれを爆發させる人ではないのだ。いつも、さう云ふ無氣味な忍從を、みせられてゐる不二子は、むしろ妻の心を猛獸にする程焚きつけたかつた。時には、虎のやうに怒りを發散して欲しいと思ふのだつた。

庭に、夕立のあとのやうな打水が出來て、台所に、夕食の用意なぞとゝのつたが、河原はまだ顏をみせなかつた。座敷の隅に、頭痛がすると云つて横になつてゐる妻は、時々思ひ出したやうに、忍び泣いてゐた。

そのわきで、繃帶した右手を使はぬやうに、折紙細工を遊んでゐる好ちやんは、何か一心に獨言を喋つてゐた。好ちやんを悦ばせるサンドイツチを取りに、不二子が台所へ立つた時である。その窓から、玄關の八ツ手の前をのツそり入つて來る河原の、ゆかたがけの姿をみかけた。不二子は、いそいで座敷へ引きかへさうとした。妻に代つて河原をなぢる氣だつた。すると、河原が座敷のしきゐを跨いだかと思ふ時、中から妻の逆上した金切聲が起つた。不二子は、思はず廊下に立ち止つた。

『――子供が退院するのも、嬉しくはないのですか。子供は死んだ方がよかつたのですか――。』上ずつた泪聲だつた。

『何にツ』と、云ふなり、河原は中へ躍り込んだ、と思ふと、異樣な音と、妻の悲鳴が次いで起つた。不二子は無中で飛び込み、河原の巨きいからだに武者振りついた。河原の振りまわす鐵拳が、妻の頰を碎いたかと思つた。河原の片足にしがみついた妻の、眞蒼な顏は、河原の腕に髮毛をとつて握られ、疊へ引きずゑられた。

『何をする――ツ。』不二子は叫びながら、河原の耳のあたりを、千切れる程引搔いた。その時、河原は足をあげて、妻の胸のあたりを暴力で蹴りあげた。妻は同時に低い流れ出るやうな叫りをあげ、疊へ身をもみながら突伏した。

『あツ、胸を蹴つた。胸を蹴つた。』不二子は飛びかゝつて引き起さうとしたが、妻は手で胸をおさへ、苦しさうに疊に肩をす

りあてゝ身悶えた。
『醫者、早く醫者――。』不二子は叫んだ。緣側に立つてゐた子守娘は、ものも云はずに駈け出した。
狼狽へた手で、不二子は妻の脊をなでたりその帶をときかけてみたりした。喰ひしばつた顎から髮毛のまつはつた首筋へかけて、みるみる汗が浮き出た。が直ぐ、その苦しみは鎭まりかけたやうである。
此の時迄、仁王立ちに突立つたまゝでゐた河原は、どつかりと足座をかき煙草盆を引きよせて火をつけた。やがて疊に身をうづくめた妻は、聲をおさへるやうに泣き初めた。
『御自分の方が惡いと思ふと、かう云ふ亂暴をせねばならないのね。』不二子は、亢つて慄へる聲で云ひながら、河原を見すゑたが急に泪があふれおちた。鼻のとがつた河原の赫らがほは、不二子に向ひからかふやうに笑つてゐた。
『えらく怒るんですね。俺が自分の女房を打つたからつて。――何と云つても女は弱いものですよ。打擲られゝば仕舞ひぢや無いか――。』と云つて、腹からゆすり出るやうに笑つた。
妻は泣き聲をやめ、靜かに身を起さうとしてゐた。
『好子、お父さんにおいでー』。河原は事も無げに、緣側に向ひ、手を差伸べた。
『好ちやん、行つちや、いけませんよッ。』
不二子は、思はず顰のやうに叫んだ。
『ハッハ……。』河原は豪傑笑ひをした。
外から、息を切つてかけ込んで來た子守娘は、醫者が今留守だと告げた。眞赤にしたその頬の後で、赤兒の紀代ちやんが力みかへつて泣いてゐた。
『紀代ちやんお乳がほしいのね、吃度――。』不二子は赤兒を脊から取つたが、赤兒は尙ほ手足を海老のやうに前へ伸ばし、畳に額を押しあてゝゐる母親へ行かうとした。母親は身を起して亂れた髮毛を掻きあげつゝ、赤兒をやうやく膝にとつて、胸を

ひろげた。汗にぬれた母の胸に、赤兒は鼻を鳴らしながら、手のひら程の顏を押しつけた。

やがて、河原の妻は身仕舞ひをして、赤兒を子守に負はせ、好ちやんに帽子をきせて、元氣なく家へ歸つた。左の胸を幾分縮めるやうにして、手で其處を抱へるやうな姿勢で、好ちやんの手を引きながら夕闇の中を歩いて行つた。河原は、例のやうに、不二子の家でおそく迄、不二子の夫を相手にビールを飲んだ。醉つて氣焔をあげる河原は、勇將のやうである。仕事にかけても、河原は猛虎のやうな男だつた。

二

その夜の夜更けに、表門の戸を叩いて、河原の妻が叫ぶ聲に、不二子は床を跳ね起きた。頭から血をあびて、門へ倒れ込む妻の姿が、瞬間不二子の頭を通つた。身内があやしく引きしまつて、奥齒を噛みしめながら、不二子は門のかんぬきをはづした。と、そこに河原の妻は蹲つてゐた。

『どうなすつて？。』妻のひざに、西瓜の小さいのが一つのつてゐた。

『あんまり胸が痛むので、醫者をおこしてみてもらいましたの。熱があるとみえて、西瓜がたべたくて、いまそこで買つて來ました。』

で、二人は不二子の夫の目を醒まさぬ爲め、足を爪立てゝ勝手口から茶の間へ入つて話す事にした。

妻は、胸を一寸ひろげてみせ、醫者で膏藥と濕布をしてもらつたと云ひ、肋膜はこんな事で起る事もあると醫者が云つたと云ふのだつた。涙のまだ干かぬ顏を、灯にそむけ、何となくうなだれてゐる妻の前へ、不二子は身輕に、庖丁や俎なぞを運び出して、西瓜を俎にのせた。赤い綿のやうな切れが、二人の口の中で甘く溶けた。

『私ね、考へると、河原とは今別れて仕舞ふ方が本當だと思ひますの』。妻はしんみりと云ひ出した。かうしてゐては子供は益益殖へるし、河原のやうな人を父にして生れた子供は、どうせ將來立派な敎育をしてもらへさうにない。河原は父としての愛

や責任なぞ、感じない男と云ふ事が、もうよく〳〵判つたやうな氣がするから、今のうちなら、二人位の子供は、自分の女手で必ず育てゝ行く決心をしたと云ふのだつた。さしあたり神戸の姉を賴りにするつもりにしてゐた。

神戸で小料理店を開いてゐるその姉は、以前河原の友達だつた惡い男に瞞され、酷い苦勞をした人だが、今獨身で元氣に働らく一方になつてゐる人だと、よく前から不二子はきいてゐた。そこへ行けば、樂に子供も育てられるし、自分の働らく仕事位待ち受けてゐると云ふのだつた。

『その方がよさそうですね』。不二子はさう贊成した。女は擲られゝば仕舞ひかどうかを河原に見せてやる丈けでも氣持よかつた。花柳界で、大事扱ひされる河原の家に、いまだに子供の赤い蒲團もない。好ちやんや紀代ちやんの、割にしなびた發育不良の顏に對してゞも、母としての自覺や決心が夙についていゝ筈だと不二子は思つてゐた。第一、河原が妻の嫉妬を頭から認めないから、此の妻の生活は、まるで蛇を喰ふ牛のやうだつた。みぢめに扱はれつゝ默つてのろ〳〵と引きずられてゐながら、その實腹の中がまるで蛇なのだ。――

今夜初めて、不二子は此の人から二十四と云ふ若さをみ出した。肌の美しい顏立ちの惡くない橫顏をしみ〴〵眺め、此の人から河原の妻と云ふ暴壓をのけたら、どれ丈け晴れ〳〵した女盛りが蘇るであらうと思へた。

二人は二時過ぎまで、ひそ〳〵と話した。『四年間、酷いうちへ奉公でもしたと諦めますわ。』妻は、愚痴や泪を出して了ふと幾分晴れ〳〵と云つた。

『私があした子供を連れて家を出たつて、河原はどうせ三四日は知らないでせうよ、』と云つて妻は吐息をした。

明日の朝にはどうせ河原は出かけて仕舞ひ、四五日は家を開ける故、明日中に手まはりの荷物をまとめ、晩頃の汽車に乘る事にすると云ひのこして、妻は又足音を忍びながら歸つて行つた。

不二子は、目の前で病人が一人全快したやうな氣持で床へ入つた。

翌日、不二子は約束通り荷物をまとめる手傳ひに、河原のうちへ出かけた。

河原は矢張り留守で、妻は長火鉢の横に長くなつて、赤兒をねせつけてゐた。

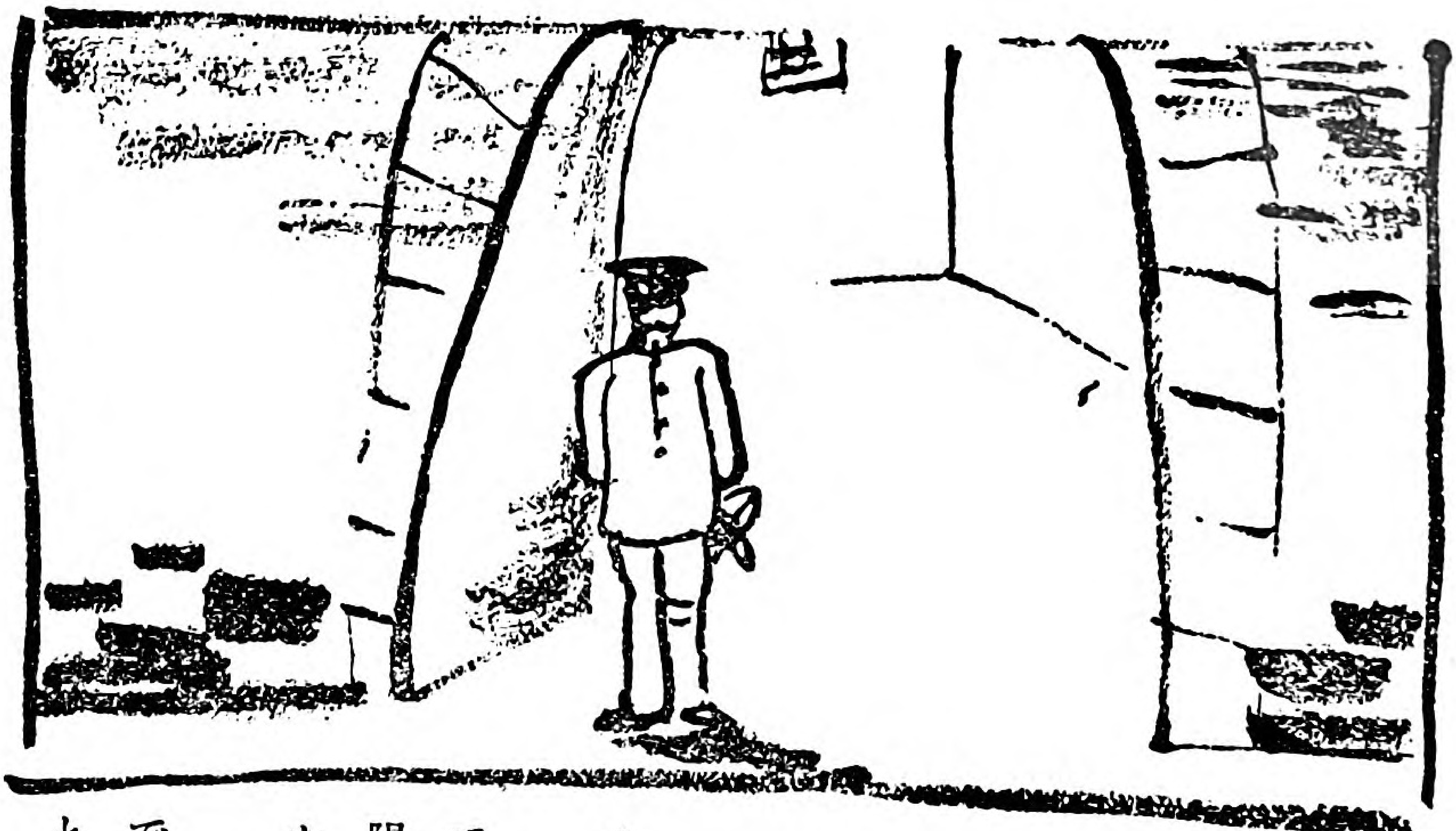
けれど、へんに無愛想で、少時そこに座つてゐる間に、不二子は自分の考へて來た用事を、心から取り捨てねばならなかつた。

裏切られたやうな泪の湧いて來る氣持で、不二子は妻が何か云ひ出すのを待つた。やがて胸をかき合せて起きあがつた妻は、不二子に怒つてゞもゐるやうに默つて茶を注ぎ初めた。

『いゝのよ、お構ひなく、直ぐ歸りますから。』不二子は禮儀的に云つた。すると妻は、

『さうですか。』と云つて茶入れをおいて仕舞つた。不二子は顔を叩かれたやうに赤くなつて座を立つた。

河原に何かまだ見出す所でもあつたのか知ら？と、歸り途で不二子は考へたが、なぜと云ふ事なく、さうして又落着かうとしてゐる、河原の妻が、憐れに思へてならなかつた。



生活

平林たい子

窓から見下すと黄色なつや〲しい竹にまぢつて、青い膚の今年の竹があつた。梢の方では、うるさい髮の様に、細い葉がしげつてゐた。

朝日は東側の牛乳屋の垣の方から、斜にさし込んで來た。陽が高くなるにつれて、地面に描くすく〲した細長い竹のかげが、葉の間をとほして來る。小さい陽の斑點に變つて行つた。濃い日をうけながら、少しの風にも竹林は奥深く揺れた。地面に落ちてゐる陽の斑點もしめつた土の上を動いた。

夫は、留置場から未決監へ移されると接見禁止になつた。そして私は、印刷所であんな大きなストライキを勃發させた不逞職工の妻であることが不都合であるといふので、中央電話局を馘られてしまつた。

それでも會へるかと思つて、私は市電の終點にあるこの借二階から、電話局へ通勤してゐた時の電車の回數券の殘り少いのを二枚づつ使つて市ケ谷へ往復した。樹木と高塀の多い靜な市ケ谷の裏通りを、私は帯を低くしめて白い浴衣で歩いて行つた。

どこかゝら、强い椎の花の香が風に送られて來ることもあつた。

「今頃椎の花が咲いてゐる筈はないんだが！」

私は流行おくれの、水汲柄杓の様に長い洋傘の柄を握つてあたりを見廻すのであつた。私は、水を吞みたい强い衝動に驅られてゐた。せめて水を吞む代りに、高い梢に、白くたわ〳〵と咲いてゐる花を見たいと思ひ、あたりの塀の上を見廻した。しかし、どちらを向いても濃い新綠ばかりであつた。私は白い浴衣で坂を昇つて行つた。

市ケ谷刑務所は高い赤煉瓦の塀でぐる〳〵かこはれてあつた。赤い煉瓦の肩に午前の陽がさし、塀の裾のところに、石にひしがれたたんぽゝが咲いてゐた。歪んだ小さい花ながら金色にパツとひらいてゐるのがあでやかであつた。

私は咽喉の汗を拭きながら埃によごれた塀を見上げた。この中に夫がゐる。そして親しかつた數人の印刷工がゐる。そして無數の働きざかりの男がゐる。女もゐるであらう、おゝその人達はどれだけ自由に憧れてゐることであらうか！中ではかんかんと鐘がなつてゐた。

私は馬糞の埃を浴びたたんぽゝの花をつまみあげた。どうせ會へまいと思ふと冷笑が流れ出して來た。私はしほれたたんぽゝの花と洋傘の長い柄を持つて、門番の看守に挨拶して入つて行つた。が、三時間あまりも待つたあげく、今度は、半永久的に接見禁止である旨を言渡されて出て來た。

丁寧に頭を下げて戻り口の門をあけて貰つた。暗くどや〳〵した面會人待合所から背中について來た蠅は肩のまはりで翅を鳴らした。看守の肩から下つたピストルの箱は尻のあたりでガチヤ〳〵言つた。門を出て、私は柄の長い傘をパツとひらいた。これで仕事探しだ。監獄の中と外とで、人間の自由に幾許の相違があるものか――さう思ふと、監獄に入つてゐる夫に對する諦めはついたが、自分がみぢめになつて來た。編笠で顏をかくし紺の獄衣を着た男達が塀の外の土を掘りかへしてゐた。

サーベルを下げてピストルを肩にかけた看守が少しはなれて手を腰に結んでゐた。手の甲に青い筋が浮き出してゐた。監獄の門を出て來た女をじろ〳〵と見た。一人の囚人が顔をあげた。暗い笠の下から、深く窪んだ目が私の頰あたりに吸ひいて來た。すぐに看守が氣がついた。

「よそ見しちやいかん!」

私は傘をその男達の方へ向けて歩いて行つた。とまた、紺の獄衣に編笠の一群が鐵管を地面に埋めてゐた。二人の看守が塀の日かげの太い鐵管に腰をおろして何か話して笑つてゐた。

「今逃亡すれば逃亡できさうな氣がするが……」

そんな事を思ひながら私は少しはなれた所の、土を盛つてある上をのぼつて行つた。編笠の下で びつしより汗になつてゐるのが見えた。

電車まで來ると、私は、また咽喉がかわいてゐるのを思出した。

窓の下の竹籔からは、腹に白い縞のある大きい蚊が出て來た。私は蚊帳を持たなかつた。一把五錢で買つて來た蚊とり線香を一本づゝたいて夫の手垢のついた本をよんだ。

階下は小さい名刺印刷所だつた。鐵の機械が動く音をきゝながら宵からねて本をよんだ。

夫が自分の手に戻つて來るのはいつの事かわからないが、その時まで 自分に託された仕事は、何よりも、私が勉強して、夫の志をついで大衆の中へ入つて行くことだと思つた。それには何よりも、仕事をもとめて、何處かの職場へ入り込むことだ。私は、うすい咳をしながら、胸の上に厚い本をのせて讀んだ。

咳をする度に咽喉から血が出て來さうな氣がするので　柔い紙で押へては、コンコンコンと咳き込んだ。一本の線香では蚊は疊の上へは落ちなかつた。うすい翅を鳴らしてとんで來ては私の顏のまわりをうかゞつた。たゝき落して見ると、腹に白い縞がある。咳はつゞけざまに、咽喉を操つて出て來る。本は、ところ〴〵難解だつた。一頁よむのに三十分もかゝつた。

翌朝目をさますと、雨が降つてゐた。竹簸の黄色な竹の屑をぬらして雨がさん〳〵降つてゐた。疲れた體で起上つた。寢卷はしめり、背中には鹽氣の多い汗がぬる〳〵してゐる。足の甲をポリ〳〵搔くと赤くなつて來た。蚊の刺したあとがある。糊が落ちて來た浴衣を引掛けて、小さい鏡の足をひろげ、背中をうつして帶をしめた。靑のメリンスは大分色がさめて來た。

暫く鏡の中に自分の顏を見た。私は不幸の女だが幸にどこまでも、突き進んで行く勇氣だけを持合はせて來た。

齒のへつた足駄で傘をひろげ、履歷書はふろ敷に包んだ。終點の附近で、巴燒を賣つてゐる老婆の屋台を探した。やはり夫と一緒に監獄へ入つた印刷工の母親だ。何か、やさしい言葉をかけやうと思つて材木や空俵の積んである空地を見廻したが、こぼれた石炭の上を、じめ〴〵雨がふつてゐるばかりだ。

小川町でのりかへて神田橋へ行つた。

職業紹介所の入口に立つと、ぼわりと男の汗の香が顏にさわつた。雨降りのうす暗がりに、求職者が、ぬれた長靴や足駄の足を前へ投げ出してぎつしり腰かけてゐる。腰掛がなくつて立つてゐる者もたくさんある。私は暫く立つてゐたが、目の前の席があいた。その席に掛けてゐた、袴を履いた靑年は、一段高い所でこちらへ向いて掛けてゐる役人の前で、

「今時そんなお誂へ向きの仕事があるもんかね君！」と一喝された。

一體、どんな職業を要求してゐたのであらうか。役人はいつまでも白くふやけた唇で冷笑してゐた。靑年は頻りに汗をふいた。そして袴の腰板の下つたのをなほしながら表へ出て行つた。私はその空いた席に腰かけた。

「次は五十番！」

と役人は高く叫んだ。と印半天の男が、向ふの方でおういと太い聲で答へて、人を分けてのそ〳〵やつて來た。

「市役所が志望で日給二圓以上を望むんだつて…ハッハッハッハ、日給二圓ならこちらが傭つて貰ひたい位さ」

「へ、、、さやうで」

男はおどけた言葉で言つて半天の裾をまくつて引退つて來た。私は、その役人の、自分が資本家の片割れでゝもあるかの樣な調子がぐつと癪にさわつた。

私は氣がついて受付に自分の番號札を貰ひに行つた。札がなくつては、一日待つたつて、私の番號がまわつてくる筈がない。木片にまづい數字をかいた番號札は手垢で黑くなり、角が摺れて圓くなつてゐた。濕氣で、ベト〳〵してゐた。

用紙を一枚貰つて書込んだ。

「志望」といふ所に「會社の電話交換手」と書き「要求賃銀」の所では少し考へて、二十五圓以上とかいた。「以前就職してゐた所」といふ所には、新聞で見た事のある株式店の名前をかいた。が「保證人」といふ箇所へ行つて一寸困つた。札を差出さうとすると、一段高い所で

「婦人部はそちらですよ〳〵。」

と大きい聲でどなつた。頭をあげて見ると、髯の濃い詰襟の役人が面倒くさゝうに節の高い指で暗い向ふを指してゐた。役人たちも皆、うすい脂の浮いた疲れた顏をしてゐた。白いカラーのあごにさわる所には黑い汚れが見えてゐた。ネクタイが曲つてゐるまゝで字を書いてゐる男もあつた。

夜店物らしい、紐の樣に伸びた細い黑編みのネタイをブラ下げてゐる男もあつた。職を求める者も紹介の役人も、その身分は竹紙一枚程のへだたりにしかすぎないと思へた。皆生活のためにわや〳〵動いてゐる！

「やつ、こいつはたまらねえ」

「チエッ」

暗い向ふ側に立つてゐた男たちが一人づゝ立上つた。

「何だい！」

と髯の濃い役人が上から毛だらけの顔を差出した。私も背伸びをして、前に立つてゐる詰襟の男の肩の上からのぞいた。

バラツタ作りの土台の下を、外から雨水がどん〳〵流れ込んで來るのだ。雨水は、表の廣場から濁つて、求職者の足の下の方へどん〳〵流れ込んで來た。

外ではさん〳〵雨がふつてゐた。

私は間代を斷りに階下へ降りて行つた。

女給上りの女房は白い足を投げ出して團扇を使つてゐた。

名刺を印刷する鐵の機械は、隣の仕事場で小やみなくバタン〳〵と動いた。

「すみませんが、月の半まで待つて下さいませんか……」

「半つていふと……何かあてがあるんですかね」

女は團扇で鼻の上の蠅をたゝいた。團扇の風がこちらへ來た。爪の桃色の、眞白な足が私の方へ向けて投げ出してあつた。足の裏の土踏まずには、うすい皮膚をとほして、あかい血色が見えた。

隣の仕事場では、女房の夫が、シヤツを油だらけにして機械をバタン〳〵と動かしてゐる。私は、男に飼はれてゐる女の優越的な態度には、もう腹も立てまいと思つた。こんな事は世の中に無數にあることだ、と頭の中で自分に言ひきかした。

「あら、ずい分いい柄ね」

私は、女の厚い膝のあたりに目を落して言つた。女の浴衣には、幟の様に派手な手綱の模様がついてゐた。ふくれた乳の下

を、博多の半巾帯できゆつと括つてゐた。

表を郵便配達が通つて行つた。口の少い亭主がだまつて私の膝の傍から疊に厚い手紙を投げてよこした。封を切らうとすると、咳が出て來た。コホンコホンと輕く咳いてふところの紙をさがした。横へ向いて紙で口を押へコホンコホンとやると、暖いものが咽喉から飛び出して來た。顔色が變つて來たのを押へながら二階に昇つて行つた。手紙をふところに入れて、階段を昇りながら紙を檢べて見た。鮮な赤い血が紙ににぢんでゐる。自分の血を見ると、わけのわからない殺氣を感じた。

私は尋常六年を卒業してから五年間丸の内の高いビルディングの上で電話交換手をやつた。電池の香と埃の中で、胸にかけたエボナイト製の電話機を相手にぶつ〳〵話しをすることを、背をかゞめて五年間もやつて來たのだ。私の肺は、その間にだん〳〵蝕んで行つた。

夫の友人からの手紙だつた。やはり收監されてゐる老人の文選工の妻が、娘を神樂坂のある置き屋に養女にやらうとしてゐるらしいといふ事が書いてあつた。それは私には初耳だつた。たとへこの事件が長びくにしても、外にも道があらうに、娘を藝者に賣るとは、どうしたことだらうと思つた。その妻は、前身が料理屋の仲居で、あゝいふ社會に對しては、割合に何とも思つてはゐないが、それは無理がないにしても、あまり情ないことだと思つた。

私は手紙を投出して、黄色な疊の上に轉つてゐた。夫は今頃何をしてゐるであらうか。

靜もつた竹林の中からひた〳〵と暗くなつて來た。私はうと〳〵してゐた。

翌日になつても、履歴書を持つて行つた有樂町の銀行からは返事が來なかつた。私は思ひついて、いつもの浴衣に着替へ、長い柄の洋傘をさして、二年近くも行かなかつた叔母の家へ出かけた。出來ることなら娘を賣らうとしてゐる夫の友人の妻のために、少しの金を引摺り出したいと思つた。

電車へのつて、ふところから回数券を出して見ると、行きだけで切符が終つてゐる。ミシンの入つてゐるところから切りとつて、表紙を走つてゐる電車の窓から投げた。飯田橋で乘りかへた。

叔母は、長い間人の妾をやつてゐたが、手切金で下宿屋をやつてゐる。

そんな事にはとつくの昔に超越してゐる筈の自分が、電車を降りると見すぼらしい白い浴衣の肩のまわりを見廻した。洋傘の柄は、柄杓のやうに長い。

きれいに掃除したこまかい格子戸をするするあけた。

叔母は、帳場の青い疊の上に横になつて揚子を使つてゐた。

「おや、お前さんかい」

私はすばしこく見がまへて挨拶した。

「お前さん、石橋つていふのは、たしかお前さんの旦那さんの苗字ぢやなかつたかね」

「さうよ」

「ぢやあ、あの、こないだ悪いことをして新聞に出てゐたのはお前さんの旦那さんだらう」

「……」

「どうもさうぢやないかと思つたよ。印刷工だし、年格好といひ……」

よく字のよめない叔母が新聞をよみ、そして偶然に勞働爭議の記事などよんだのは全く私の不運であつた。私は、氷を食べていゝ加減に挨拶をし、外へ出た。

電車道を、車を片よせて、奥蓙を背にのせた馬力がとほつた。どちらへ行かうか、と私は傘の柄を握つて考へてゐた。毛の生へ際から頬の方へ一筋汗が流れ落ちて來た。私は頭がくらくらして來た。一體、自分はどうしたらいゝのだらうか。

兎に角電車へ乘つた。乘つてから、運轉台を覗くと新宿行だつた。

「新宿」、と私はあてもなく切符を買つた。電車は暑い日中を、止つたり走つたりして行つた。乘客はあまい睡に襲はれてゐた。私は硝子に額をあてゝぢつと外を見てゐた。

「ちよつと止めて下さい」

大木戸を發車した時、私はよろけながら運轉手に言つた。運轉手は帽子をとつて汗を拭きながら、指のさきで私の差出す切符をつまみとつた。

私は、白い浴衣で電車を降りて行つた。

「婦人に限り貸金」

帯を低くしめた私は、暫く立止つてその看板をたしかめる様に仰いだ。そして、そこの交番のある横町を入つて行つた。土で塗り固めた土藏が目についた。唇の様に厚い扉が、風を吸ふ様に二階の窓にあいてゐた。私は爪先を揃へて立止り、やがて、質屋の様な格好ののれんをくゞつた。

「いらつしやいまし」

光つた着物を着た男が、なめる様に私の瓜先から髮の毛まで見上げ見下した。私は、歯のはぜ反つた朴歯の下駄をはき、柄の長い時代おくれの洋傘を持つて立つてゐた。

「あのお金を借りたいんですか……」

私は、自分の息の臭いのに氣がつきながら、男の着物のあたりにねばつた唾を飛ばして言つた。

「お金?」

と男は言つて薄い光の目で暫く私の顏を見た。

「お住居はどちらです」

「府下××町五百三十二番地池田方です」

「池田さんと仰有るのは?」
「私の室の貸主です」
「ではあなたはお一人で室をかりてゐるんですか」
「いゝえ」と言つた私は赤くなつた。
「男の方と御一緒でせう」
「えゝ」まづいな、と思つたが、つくり事がにはかに口から出て來なかつた。
「それぢやお貸し出來ませんね」
男は、さくろの様に口をあけて笑つた。男の髪につけてゐる油がにほつて來た。
「旦那さんのあるお方は、旦那さんが、俺はそんな金をかりた覺はない、つていへばもうこちらの損になつちまふんですからお貸ししないことにしてゐるんですが、ね」
「でも……」私はくさい息を吐いた。「それは確實に私からお返し出來るんですが……」
「しかし、法律上女の人には貸借の責任がないんですから」
私は洋傘の柄を握つてのれんを出て來た。強い陽が背中にあたつて來た。
交番では、白い服をきた巡査が線路に向つて腕を組んでゐた。私は不意に立止つた。
「まあ、私は何て馬鹿だらう」
私は、長い柄の傘の中で笑つた。
「こんな金をこそ、あの強慾な印刷所長に要求すべきだつたのに」
私は、自分の哄笑が白い花の様に美しい様な氣がした。私は、兎に角、印刷所の近所に小さい家を借りて住んでゐる仲間の人達にそのことをすゝめやうと思つて、小石川の方へ行く電車にのつた。



甘美媛（時雨）

甘美媛の前に

古へ戰ひの地に、しかも外國に、どうして婦女が立交つてゐたかといふ事を明らかにするために「任那」に日本府のあつたことを特に記しておきます。

「任那」といふ國の名は、我垂仁天皇が授けられた國名で、加羅六國の聯合であり、日本の保護をうけて日本府がおかれ、日本から派出した官人が住んでゐました。

「任那」の位置は、新羅、百濟の兩國にはさまれ、後方に高句麗を控へてゐました。そのいづれの國も日本と交渉はあり、調賦をよこしたり止めたり、表裏恒なき國でした。この脚本にあらはれた戰ひは、高句麗が南下する勢猛に、新羅と同盟して、百濟を侵略し、任那を襲ひ、日本府を陥れ、官家を破つたので、その間罪軍の將士が屯してゐたのです。

我欽明天皇御宇二十三年（西暦五百六十二年）佛教がはいつて來て間もない頃のことです。

甘美媛

——又は、業火の洗禮——

五幕九場

時雨

倭の副將河邊の瓊缶（ニエ）
瓊缶の妻　甘美媛（ウマシヒメ）
調の吉士　伊企儺（イキナ）
伊企儺の妻　大葉子
伊企儺の子　舅子（オチ）
國造りの手彥
歸化人　登弭（トニ）
登弭の妻
隣人　久禮（クレ）
新羅の將
兩軍の士卒
大臣の妹姬
瓊缶の從者、妹姬の從者、翁、嫗、里人、童たち。

第一場

任那のある村、日本へ歸化した登弭の舊宅。途に面した窓は閉さずにある。隣家の主人久禮、門口から登弭の家の暗い窓に聲をかけてゐる。

秋七月、月皎々たる夜半。

久禮　倭（やまと）の大將軍は紀の男麻呂宿禰（きのをまろすくね）様といふ方ぢや、副將は河邊（かはべ）の瓊缶（にへ）といふ若いお人だ。吉士の伊企儺（きしのいきな）といふ勇者もゐるさうだ。此方（こなた）の家の登弭（トニ）どのも、たしかに見かけたといふが、まだ顏を見せには來ないか？

登弭妻　（窓の中から）家もわたしも捨て、日本國民（にほんこくみん）になつた夫（ひと）だから、加羅（から）へ來たからと、訪ねても來ますまい。

久禮　いや、さうは言はせぬ。口と心は別々だ。今夜は來るか、明日は歸るかと待つてをるのだ。それでなくて、なんで窓も閉めずに、夜つぴて表を覗いてゐる。

妻　月がよいからさ。

久禮　嘘をつけ。汝（なまへ）にそんな風流心はない。こら、知らぬと思ふのか！　燈火（あかり）をつけないのは、窓から見てゐることを、わしに見つけられないためだらう。

妻　月がいいから燈火は消しておいたのですよ、むだだからね。

久禮　よく聞いておけ！　食（たべ）ものの世話から何から何まで、女ひとりでも不自由な目を見ずにきたのを忘るなよ。親切なわしのいふとを聞かないのもいい、だが男を引入れたりすると許さぬぞ。登弭（トニ）だらうと誰だらうとわしの目からは密夫（みつぷ）だ。

妻　煩さい人ではないか、もし良人があたしを忘れないで歸つて來てくれたら、借りた食料は倍にしてかへしてやるから文句はあるまい。なにもお前に、密夫よばはりをされる覺えはない。

久禮　さうか、それで濟むと思ふなら濟ませて見るがいい。大きな口をきいたあとで泣面かくなよ。俺も惚れた一念だ、一生でも食ふものは貢いでやるが、だが其代りに、一生此門から見張つてゐて、すき自由はさせないぞ。

妻　あたしが早く死ぬか、お前の家が早く腐るかだ。

久禮　おゝ！　俺の家は腐つてゐる。もう倒れかけてゐる。だが、そんな心配はやめてくれ、腐つて倒れてしまつてもおれは此門で張番をする。

妻　もしあたしが、日本へ行つてしまつたらどうする。

久禮　その時の返禮は嚴いから覺へてゐろ！　なんだ怖しい？　へ、怖しいといふことを知つておけよ。なあに、おとなしくしてさへゐれば優しすぎる俺だ。何處にひと、他人の女房を、ただで食はせてゐるものがあるものか。（窓の下で窺ふ）――諦めて寢にいつたな。癪にさはる窓だ、誰にでも覗けるやうに出來てゐる。閉めておいてやれ。

外から戸を閉めて歩き廻る。

久禮　ばかに好い月だな、皓々としてゐるといふのかな。どうもこんな晩は顏がよく見えていけない。しかし、見張りをするのも長い事ではあるまい。こんなふうに、寒さがくるまでつゞけるのでは堪らないが――なにしろ新羅の勢ひはたいしたものだし、破竹の勢ひの高句麗が後に控へてゐるのだからな、倭の軍人もくそもあるものか。登彌もそのうちには首になるか、日本へ逃げて歸るかだらう。――誰か來たぞ。足音はしないが、たしかに近くに人影がさしたが――なんだ、自分の影か？　あんまり月がよすぎるから、遠くからでも俺がかうブラ〳〵してゐるのが見えるだらう。さうすると拙いな、家へはひつてゐるとしようか。耳を濟ましてゐれば分る筈だからな。

呟きながら門内にはひる。

登弭の妻が窓から顏を出して空を見上げる。
百濟の軍隊へと使ひを急ぐ、倭軍の密使登弭、角まで來て舊宅の方へ心をひかれ躊躇する。
登弭の妻ふと見て目をとめる。狼狽て行過ぎやうとする登弭を、轉け出てきて飛びつき引もどしてくる。

登弭　（顏を反け）人違ひだ。

妻　止してください。その聲を忘れてゐると思ふのですか？顏を見ないからつて、自分の夫はわかります。暗ければ自分の家の窓にゐる女房でも、あなたには分らないですか。知つてゐて——知つてゐて逃げるのですか？

登弭　そんな事はない。俺だつて氣にかかればこそ足を止めたのだ。

妻　そらごらんなさい。もうそれで、あなたが誰だかといふことは白状なすつた。

登弭　あ！　しまつた。

妻　なにがしまつたです。あたしはもうずつと遠方（むかふ）の方から貴夫（あなた）の來るのを知つてゐましたよ。忘れていいものですか、燈火がないからつて分らないやうなあたしぢやありません。貴夫といふ人でなしを思ひ詰めて、律氣に暮してゐた妻です。幽（かすか）な身動（みじろ）ぎだつて、忘れてよいものですか。

登弭　分つた、分つた、本當のことを言へば、俺がためらつたのは、お前がもう獨身（ひとりみ）ではないだらうといふことを怖れたのだよ。どんなに聲をかけたかつたらう、大切な、一刻の猶豫もできない使ひにたちながら、お前の家の門が通りきれなかつたのでも知れてゐるだらう。

妻　いゝえ、それは嘘です。あたしが貴夫の歸りを待ちきれなくなつて、くだらない男の妻になつてゐたら安心だつたのでせう。あたしはつまらない。あたしはつまらない。そんな情なし男を待ちくらして、狐の出さうな家にたつた一人で住んで、泣きくらしてゐた。隣家の馬鹿爺に恥をかかされながら、乞食のように食ものを恵んでもらつて生きながらへてゐた。誰のためだ、それもこれもみんなお前の爲だのに——

登弭　おゝ、お前！

妻　厭なら厭でよござんす、はつきりと言ひ聞かせて下さい。貴夫はあたしをなんといつて欺したか覺えてますか！

登弭　欺したのではない、決して欺しはしない。

妻　いゝえ、貴夫はかう言ひました。こんなみじめな生活にはあきた。俺は働らいてお前をもつと幸福にしてやりたい。そのためだから少時の間辛捧して暇をおくれ。屹度俺は立身（りつしん）して歸つてくる。立派な日本人（やまとびと）になつてお前を迎へにくる。彼方の人は親切だから決して悪くはしやしない、安心して待つててくれろと……

登弭　その通りだ。今もさうならうとして駈け廻つてゐるのだ。だが、何處へいつても人間は中々思ふやうにはならないのだよ。俺は一日だつて殘しておいたお前のことを案じない日はなかつた。だから生命がけの仕事もするのだ。すこしでも早く立身して、お互ひに切ない、待ち焦れた日をむかへようとあくせくしてゐるのだ。お前を忘れたのでも、厭つてゐるのでもない。それどころか俺はお前をかうして抱へたら、腕の筋が萎（なへ）てしまつて、意氣地なく疲勞が出てきた。もう一足だつて歩きたくなんぞはありやしない。――お前が進めてくれるまでもなく泊りたいよ。けれど、今晩に限つた、しかも一分もあらそふ火急の使ひなのだ。誰にも知らさずに果さなければならない役目なのだ。……まあお前、氣を落附けて聞入れておくれ。この役目をすましてしまひさへすれば、俺たちが望んでゐる樂な日が二人の上にくるのだよ。日の本の大將軍はおつしやつたよ、お前たち二人の幸福も含まれてゐるのだぞと――

妻　わかりました。わかつたには分つたが、あたしはお前の足の早いことをよく知つてゐます。大將軍さまがお考への時刻よりずつと早くお前は行きつく人です。久しぶりであつた妻のところに、一時や半時居たからつて、使ひの時間に狂ひはない筈です。

登弭　それはお前のいふ通りだが、この使ばかりは、早ければ早いほどいいのだ。歸つてさへくれば何時までも――それこそ今度は死ぬまで一緒に居られるのだから――やつておくれ、後生だ、この通りたのむ、おがむ。

妻　その口には乘りませんよ。今度こそ去つしてまつたら最後、死ぬまで逢へやしないでしよう。あたしが泣死んだつて歸つてなんぞ來やしないにきまつてる。

登弭　そんなことはない、お前が疑ふのも尤だけれど――全く今迄重々俺がわるかつた。それを思はないぢやないが、便をするには、あんまり、悲慘な自分だつたのだよ。恥しくつて言つてよこされなかつたのだ。今度こそどんな約束をしてもいい。

妻　よござんす、あたしにかまはず早くいらつしやい。

登弭　すぐ引返して明日は此前を通るよ。おそくも明後日は迎へに來られる。――お！お前どうしようといふのだ。

妻　一緒に行くのです。

登弭　ば、ばかな事を言ふな。此使ひは、女房なんぞ連れてゆけるそんな悠長な事柄ではないのだ。かうやつてゐるうちも計畫がくるひはしないかと、氣にかゝつてならないほどの重大事なのだ。

妻　そんな事をあたしが知るものですか！あたしが附いて行くか、貴夫が烏渡でも家へはひつてくれるかです。どつちも出來ないのなら、貴夫はあたしを捨るのにきまつてゐる。

登弭　離してくれ。（途方にくれて）仕方がない、では這入るよ。ほんの少時だよ、全く困るのだから、ほんの少時だよ。でないと、俺の首がなくなるのだから、いいか！

妻　知つてゐます、分つてますよ。

登弭　――ああ、俺はとんだことをしてしまつた。なんだか胸騷ぎがしてしようがない。間違ひにならなければいいが……

妻　思ひきりのわるい何をグズグズ言つてるのです。家の入口をもう忘れてしまつたのですか！

戸の内に這入る。すぐに窓を妻が閉る。燭光が洩れてくる。

久禮門からそつと出てくる。窓の下にゆき窺ふ。四邊を見廻して、登弭の妻が登弭の肩から外した弓箭と懷を探した時落して

いつた印書を拾ふ。盗み讀んで驚喜する。
登弭の妻忍んで出て失つた品を探しに出てくる。

久禮　お前さんこの夜深(よぶか)になにをしてゐなさる。

妻　（ハッと）お前こそ、何で他人(ひと)の家の軒下に居なさる。

禮　言つてある筈ぢやがな、汝の見張りをすると。——燈火がついてゐるの。

妻　よけいな世話だ。

禮　よい返事をせぬと、泣きを見るぞ。

妻　汚らはしい、寄りくさるな。

久禮　氣が强くなつたなあ、どうしてだ。

妻　どうでもよい、お前の世話にはならない。

久禮　食料を二倍にしてかへすか？（舌打ちをして笑ふ）

妻　（立竦む）

久　考へどころだぞ、將夫を追出してしまひな。

妻　何をする、いやな！

久禮　擲つたな、あとで後悔するな。

登弭　（窓を開けて）あつたか？　たしかに持つてゐたのだ。——そこにゐるのは誰だ。

久禮　やあ、これは珍らしい、登弭さんお歸りだつたか。

登弭　（苦りきつて）やあ、あなた久禮(くれ)さんでしたか、呟く。

久禮　長いお留守でしたね、なにをお失しなすつた？

登弭　（あわてて）いや、約らないものです。

久禮　細君へのお土産かね、惜しいことをしましたね。

登弭　（不機嫌に）あなたはまた、なんでお起きになつたのです、曉にはまだ間があるでしよう。

久禮　左様、だがもうやがて明けそめるでしよう。あたしが目が覺めたのは、なんとなく門口が騒々しくつて、出て見ると珍しいことにお宅の窓から燈火が洩れてゐる。そのうちにな、なにか細君が探しものに出ておいでてね。

登弭　（ヂリ〳〵して）擲られたとか……

久禮　ああ、あれか、あははは、なあにドシンとやられたといふことさ、當られたと言ふのですよ、御夫婦にさ。ではお休みなさい。――細君、せい〳〵仲のよいところをお見せ。（門を締めかける）

登弭　ああ、ちよつと、久禮さん。

妻　久禮さん、良人が呼んでゐますよ。

久禮　わかつてる、聽えてゐますよ。なにも良人がとおことはりには及ばない。何の用ですい？

發弭　待つてて下さい、今其處へ行きます。（出て來る）拾つたでしよう、出して下さい。弓箭です、いやそれよりも書附だけでも出してください。

畔久禮　（白々しく）知りませんね、それこそ寢耳に水だ。弓箭ですとい？書狀ですと？　一體それはどんな書狀なのですね、宛名は――差出人は誰です。

登弭　――

久禮　（ジロジロ見る）妙なものをお持ちだね、まるで軍人のやうだ。

登弭　（不快げにその流し目を避けて）誓湯をしても、屹度知らぬとお言ひなさるか？

久禮　誓湯で虛か實かためさうとお言ひなのか、それほど重大い落しものなら、宜しい、して見せませう。

登弭　（妻に）俺の體を拭いてくれるといつた湯があるね。（久禮に）丁度いゝ、あの釜が沸いてゐる。

連立つてゆく。久禮すぐに捲りあげた眞赤な手を拭きながら來る。

久禮　どうです。（得意に）久禮は正直者だ、この通り神も御照覽だ。

妻　（急に思ひついたふりに）ばからしい、こんな事をしてゐる暇で、貴夫は飛んでいつたらいゝ。書狀の紛失つたことを早く知らせた方がいいでせう。

登弭　さうだ、それがせめての御奉公だ。（そのまま飛んで行く）

久禮　なあんだ、ひとに熱いめをさせて、挨拶もなく飛んでいつてしまつた。

妻　（久禮のせせら笑ふのを凝と見てゐて）ねえ、久禮さん。

久禮　なんです。

妻　本當にお拾ひなさらない？

久禮　知らないなあ。

妻　ねえ。

久禮　なんだね。

妻　先刻のこと怒つてる？

久禮　いゝや。

妻　宿夫を引き入れたと思つて？

久禮　――ああ、そろ〳〵夜が明けさうだ。もう月もはひつてしまう。――なんだつけねえ、さう〳〵そんなことを昨夜は言つたつけね。

妻　いまでは？

久禮　わたしも今朝は急いで行かなければならない用事があつたのだつけ、昨夜話さなかつたつけかね。

妻　ねえ！

久禮　まあ〳〵！　とかくおいしいものは、取つておいた方がいゝよ。わたしにいゝ話なら、歸つてくるまでとつておいてくれ。

妻　拾ひものをかへしてくれたら、あたしは恩に着ますよ。

久禮　恩に着てもらひたいが、あいにくなんにも拾はなかつた。俺は運が惡いなあ。——しかしまあ急いで行きませう。運は何處に落ちてゐるか知れないからな。はは、なんだか今から耳が痒いよ。あはは、あはは。

第二場

倭軍の副將の野營地。
勝戰に深入りして、危く生還した軍人たち。
落日の光、漸く薄れゆく空。

卒　（昂奮して）こんなばか〴〵しい事はありません。私共は、何事も上官の御命令次第ですが、今日のやりそくなひは忍耐出來ません。

士官　だまれ、分つてる。

卒　お分りでせうけれど、あたくし達だつて日本男子です。腹の蟲がおさまりません。

甘美媛（時雨）

士官　だまつて働けばいいのだ。

卒　それは働き甲斐さへあればいくらでも働きます。私たちは 唆しかければ彈丸（たま）のように飛んでゆく人間です。ですが——

士官　もう止せ、謹まないと、理屈は正しくつてもその儘にはおけなくなるのだ。今に誰が軍を代表して、大將軍の方へ報告するだらうから、まあ默つておれ。

卒　だまります、だまります。さういふ譯なら默りますが、けつたいくそが惡くつてなりません。

士官　それはお互ひだ。

卒　貴官もさうお思ひになりますか？

士官　なる。

卒　そんならようございます。

士官　親睦しよう。（卒の手を握る）

卒　有難うございます。加羅まで來て、同胞喧嘩はしたくありませんが……

士官　もう言ふなよ。あんまり慷慨悲憤すると、可愛い奴でも斬らなければならぬからな。堪へてくれよ、軍律は重いからな。

士官二　だが、全く辱をかいたものだ。副將はまだ若いからな。

士、三　敵をコナゴナにしてやつたからいいが、これで敗軍なら生きておめ／＼歸られない。

士、一　（卒に）泣くな、泣く奴があるか。

卒　は、貴官だつて涙が出てゐます。

士、四　（來かかる）ええ、止めるな、あの位に言つてやつてもいいのだ。元來、あんな物知らずで、人の將たることが恥か

しくはないのか。

士、五　まあ許してやれ。さうはいふが、人間誰しも、しまつたと思つた時は、もうやりたくなつて居る事があるものだ。副將は若いから功を急ぎすぎたのだ。勝に乘つて、ちよつと判斷をあやまつたのだ。

士、四　ばかを言へ。敵が白旗を掲げると同時に、紀の大將軍は軍を引上げられたではないか。軍令は達してゐる筈だ。降伏したものを攻めるといふ方があるか。それさへあるにだ、なんといふばからしさだ、なんの爲に我軍でも白旗を振りたてたのだ。

士、二　もつと戰はうといふ合圖だとでも思つたのだらう。

士、三　まづさうとより他は思へないな。一人殘らず死ぬまで爭はうといふのかとでも考へたのだらう。

士、二　それこそ愚考だ

士、四　お前がた笑つてゐられるのか！　事實はさうなつた譯ではないか、我々が死力を盡したからこそ敵は潰滅したが、さうでなかつたら、どうなつてゐる。

士、一　あの時は口惜かつたぞ。敵の奴め素早い頭で、敵ながらあつぱれだつた、かう言つて叫んだぞ、「倭軍が降伏したぞ、許すな」とよ。

士、三　そして敵の白旗はおろしてしまつて、此方の白旗だけが、いつまでも揉まれてゐたのだから、知らないものはさうかと思つたのだらう。

士、四　俺はなんの騷ぎかと、副將の幕下を見るとあの醜體だ。おらあ、おらあ、鼻から血を吹いたかと思つたぞ。

士、五　全くお前は暴れたなあ。

士、四　誰があの白旗を毟りとつたか、第一の殊勳者だ。

士、一　（卒を指さす）この男だ。

士、二　（卒を他の士官たちと共にとり巻く）お前か？

士、三　貴さまか！

士、五　君だつたのか。

士、四　（いきなり跪づいて卒の足を抱く）忝けない。國家の恩人だ。

卒　（泣く）あたくしは、あの白旗を腹に卷いて、死なうと思ひましたのです。血で――血で、染めてやらうと思ひました。血は、旭日の色ですから……

士、四　聞いたか、みんな！

士、達　――

士、四　みんな跪づけ！　この男こそ正しい日本の國民だ。われ〳〵の軍を守る神が、彼の頭に宿つておられるのだ。――立て！　敬禮しろ。（卒に）いや、そんなに羞明なくつていい。おそらく、紀の男麻呂將軍でも敬意を表されるだらう。なあみんな、勝軍であつて、敵は降伏したのに軍を進め、大切な兵の命を多く無益に失はせた、副將河邊の瓊缶は、此男にあはせる顏があるか。あると思ふか、なからう！ないだらう。俺もさう思ふ。兎に角、俺は俺の上官を告發することになるが、逐一報告してくる。（憤然と去る）

士、一　（卒の肩を叩く）な、お前は默つてゐなければいけない。さあ、あつちへいつて休め。

卒敬禮して去る。士官たちもくつろぐ。

士、五　不思議なのは、どうして百濟の兵が間にあはなかつたのかな。

士、三　紀將軍の戰略では、百濟の軍隊が後方から押寄せるわけだつたが。

士、二　歸化人の登弭が密使に立つたとかきいたが――

士、一　しかし、援軍は來ないでも、あれだけやつたのだからいい。

士、五　いやさうでない、百濟軍が來れば、新羅の奴ら、全滅させてくれられたのだ。

士、二　だが今から來たのでは、折角來ても戰ひが濟んでしまつたあとでは力が拔けるだらう。——お前がた、何を話てゐるのだ。

下士一　今日の戰ひで、醜かつたのは白旗事件ですが、敵の逆襲をうけて、逃出した奴が我軍の前衞にゐるのです。

士、二　それは誰だ。

下　士　國造りの手彥です。彼奴は逃るところを追ひかけられました。みつともないことに、逃て逃てにげ通したのです。最初勝軍のうちは進んだのでせうが、苦戰になつた時の醜體といつたら。

士、三　それからどうした。

下　士　あれは駿馬に乘つてゐましたから、城の溝を躍り越して、危く助かりました。

下、二　溝を躍りこした時に、敵の熊手に引きかけられたのですが、首も拔けずに附いてゐます。ノメ〳〵歸陣して、只今副將の御機嫌を伺つてゐます。

士、二　なるほどこれは好い取組だ。お互に命があぶなかつたと言ひあつてゐるだらう。

聲を揃へて笑ふ。卒たち、食事、飲料、灯など運んでくる。

士、二　勞れたな。

士、一　甚く勞れた。

士、五　新羅が降伏したときに休戰ておけば、こんなことはなかつたのだ。

士、三　全く一時は苦戰した。

士、五　紀將軍の手は流石引上げも鮮明だし、警戒も嚴しくしてゐるさうだ。此方はあぶないぞ、こんな晩に夜襲をかけられたらそれつきりだ。

士、一　氣を附けろ！　調の吉士の見廻りだ。

伊企儺來る。

伊企儺　今誰か本營へいつたさうだな。
士、一　はい、我々の仲間が一人行きました。
伊企儺　さうか、それはよかつた。わしが行かなければならないのだが、どうも留守に出來ない。今晩は氣をつけなければならぬぞ、あんまり酒を飲んではわるい。
士、三　しかし、非常に勞れてゐます。
伊企儺　たゞさへ勞れてゐるから眠り易い。その上酒を飲んだら、すぐには立てない。
士、三　夜襲がありませうか？
伊企儺　ないとはいへまい。
士、三　でも、諜間の敵は、もう散々の筈です。
伊企儺　諜間の敵ばかりが對手の全部ではない、登弭の歸らないのが怪しい。
士、一　登弭は裏切るでせうか？
伊企儺　あの男は決して、そんなものではない、彼は信じていゝ。だが、途中でどんなことがあつたか、それは分らない。
士、二　ですが、この儘で今夜眠らなかつたら明日は猶勞れます。それこそものゝ役に立ちません。
伊企儺　眠つて悪いとはいはない。充分休養は必要だ、酒だけ節しろといふのだ。どうも酒は油斷させるからな。
士、三　では、ほんのぽつちりにしておきます。
伊企儺　相替らずお前は好きだな。
士、二　吉士もお好きですのに、よく忍耐がお出來になりましたな。どうも酒をやる奴の方が勇氣があるやうです。尤もこれ

は我田引水ですが。

士、五　それはさうだよ、吉士の今日の働きときては抜軍だ。

伊企儺　さう言つてくれるな、今日の戰ひには、此手の者はどんなに働いてもつぐのへない恥辱を殘してゐる。（沈痛に）日本軍全體の名折れだ。この恥辱を雪ぐのは一死あるのみだ。どうか各自に國の名を守つてくれ。

士、五　吉士のお言葉を待ちません、我々の覺悟は定まつてをります。

士、一　わたくしたちが雪がなければならない責任です。

伊企儺　（重く）どうかその心懸けで居てもらひたい。（去る）

士、二　あの人があんなに悄れてゐるのは珍らしい。

士、一　吉士は高風の士だ。

士、五　あの人と一緒にする討死なら仕甲斐がある。

士、二　あの人こそ我々の將だ。

士、三　さあ兎も角すこし休まう。なにしても英氣を養つておかなければいけない。

士、五　（燭を消す）さあみんな眠れ！　早い奴等だな、もう寢ちまつたのか。その勢で戰ひにも突貫せい。

第　三　場

前場の篝火は燃てゐる。
馬の嘶きや、他の天幕から慷慨悲憤の吟詠など傳はつてくる。
副將瓊缶の幕張りの室明るくなる。瓊缶夜の具に寄かゝり酒に醉つてゐる。傍に甘美媛は物思ひに沈んでゐる。國造の手彥

甘　美　媛　（時雨）

は、士官達の室を窺つてゐる。

手彦　やつと寢ついた。騷々しい奴等だ。（座にかへる）どうもあたくしは逃げついでに、筑紫までかへつた方がよささうだ。よつぽど人氣がわるい。

瓊缶　うつちやつておけ、余がよければそれで好いのだ、氣兼をするな。

手彦　だが、あの連中は氣が荒い。戰の血祭りだなどと言ひだすと、叩き殺されかねない。

瓊缶　おれは副將軍だ。おれの命令は、貴樣の命を保護する。

手彦　御愛顧は忝けなうございますが、どうも今日のあの白旗一件から、閣下の御命令も怪しくなりました。あたくしが逃出すやうなヘマをやりましたのも、あの事件があつたからで、言ひかへれば閣下をお怨みまうしてもよいのです。

瓊缶　言ふな、誰にもやりそくなひはある。人間が神でない以上、多少不出來なこともある。だが、勝つたからいいではないか、結局勝てばいいのだ。

手彦　併し明日は大將軍から、軍律に照して裁かれませう。

瓊缶　ばかを言へ、一々そんな些末なことで咎めたてられて仕事が出來るものか。戰爭はなんだ、人を殺し國を奪ひあふのだ。その目的が通ればいゝではないか。朝廷の儀式とは違ふ、やりそくなつても勝てばいゝのだ。

手彦　でも、恥辱を知らなければなりません。

瓊缶　（苦笑）お前が恥といふことを語るのか！（氣むづかしく）手彦、汝の恥は三才子も知つた恥だ。白旗のことは、知らぬから知らぬので、思ひ違ひはあつても過失ではない。

手彦　（ふくれる）

瓊缶　しかし、余の勢力が、あの事件であぶないと思ふのなら、なるほど逃げついでだ、何處までも逃げてゆくがよからう。余は前へ前へと進む人間だ。退くことは知らない。それがいいかわるいか、それは此余にも分りはしない。だが、今

いつた通り、あとを振りむかないから、昨日の方がよかつたなぞと、どんな時でも弱音は吹きはしない。見てゐろ、この余が、あれつぱかりの過失で失脚するかしないか！余(おれ)ほど余自身を大切にする者はありはしない。余は余の信念のままに動く。どいつが、どんな悪名を附けてもいい。余の頭の上の空は何時も靑く、日は華やかに照す、星が輝く。——甘美媛、お前は余を祝福してくれるな。

甘美媛　（目覺たやうに）はい、あたくしは貴夫を知つてをります。

瓊缶　では、なんといつてくれる？

甘美媛　見よ、明日を！——暗いのは今夜ぎりでございます。

瓊缶　その通りだ。

甘美媛　何事も、何者も投げうつて、貴夫はあなたの道に、一向にお進みなさらなければなりません。

瓊缶　よく言つてくれた、其通りだ。

甘美媛　鏡も曇る時が御座います。けれど、磨くと一層涼しくなります。

瓊缶　（立つて媛を抱上げる）だからお前が愛しいのだ。愛しくてたまらないのだ。お前は余のためならどんな恥辱も忍ばうとする。荒武者の男共の嘲弄も、お前は余を知つて忍んでくれる。甘美媛、お前はどう思ふ？お前の夫が敵に後を見せた方がいいか、勝を常念として、思はず進んで失策した方がいゝか、どつちが頼母しい男だ。

甘美媛　お進みなされたのが貴夫だから、あたくしはその方に加膽いたします。

瓊缶　なんだ此女め、余は眞劍で訊いてゐるのに。（顔をよせる）

甘美媛　（反けながら）手彦が苦い顔をしてをります。

瓊缶　手彦ゆるせ。そしてもうお前も遠慮してくれ。余だつて矢つ張り氣は痛めてゐる。休息がしたいよ。

手彦　夫人の御機嫌もおとりなさらなければなりますまいからな。

瓊　缶　さうつけ〳〵言ふな。優しい手で、心の勞れをさすつてもらうのだ。

手　彦　閣下の御持論は、一に運命の行路へ前進、二に夫人繰從。

瓊　缶　氣に障つたらなんとでも言ふがいい、余はまだ若いのだからな。

手彦幕の外へ出てゆく

瓊　缶　やつと二人になつた。今日はまつたく勞びれた。――媛、顏色がわるいが、いま手彦が言つたことなら氣にしないでおくれ。余にはお前が、なにもかにも第一だといふ事は、お前の方がよく知つてゐる筈だ。彼奴は自分が不機嫌なので二人をも不愉快にしてゆかうとしたのだ。あんまり仲がよすぎるので、他の者が嫉妬してしようがない。今日のことだつて大袈裟に言ひはやすのも、日頃の鬱憤が發したのさ。ね、こんなに仲が好いのだもの、妬かれても仕方がないさ。

甘美媛　あたくしは、貴夫のためになら、どんな事もしようと思つてをります。

瓊　缶　何をしようといふの？　だがね、余はお前に苦勞なんぞはさせたくないよ。

甘美媛　いゝえ、どうぞそんな事を仰しやらずに、貴夫のお苦しみをあたくしの苦しみにさせて下さいまし。あたくしで償へることならば――貴夫のためにはなに事でもしようと決心してをります。

瓊　缶　そんな決心なんぞ役にたたない方がいいね、さあ寢よう。

甘美媛　それはいけません。

瓊　缶　何故だ。

甘美媛　先刻調の吉士の聲をききました。あの人は申してをりました。今夜は眠つてはならぬ、酒を飲むのも節しろと申附けてゐました。

瓊　缶　なんのためにだ。

甘美媛　新羅の夜襲に備へる用意に。

瓊缶　ば、ばか。そんなたわいもないこと——彼は役目で、下役の者を警しめただけだ。おそらく彼だつて敵が來るなどと思つてもゐはすまい。嘘だと思ふなら覗いてごらん、あの男は大栗子の懐で大鼾だらう。

甘美媛　あなたはお休みなさいまし。あなたは勞れきつていらつしやいます。あたしは貴夫のお心づかひを思ふと、勿體なくつて、好い氣になつて寢てはをられません。起てゐて番をしてをりませう。

瓊缶　そんな强情を張らないで、呼んだらば來るものです。女がかうして一緒に來てゐてくれるのは、夫を慰安してくれるためではないのですか!

甘美媛　ではもうちつとだけ此處においてくださいまし。眠たくなつたらすぐに參ります。

瓊缶　ねむたくなつてからならば來なくつてもいい。情の强い女だ、そんなら勝手にするがいい。

甘美媛　(憂鬱に脣を嚙む)

瓊缶　どれ、それでは孤獨で寢るとしようか。寢苦しい心を撫てくれるものもない。——こないでもいい、こないでも宜しい。

甘美媛　(靜かに夫の臥床にゆく)あんな事を仰しやつたつて、お勞れが激しいと見えてもうおよつてしまつた。——汗が出てゐる(瓊缶の額を拭ふ)お可哀さうに——口ではああ仰しやつても、お心を痛めていらつしやると見える(凝と見詰めてゐるうちに涙をおとす)あ、ごめんください。——お目が覺めなくつてよかつた。(額に脣をあてる。瓊缶眠つたまま薄く笑ひ、妻の手を握る)——笑つてゐらつしやる。あなた、何時までもかうしてゐてね(も一度額に脣を捺す)——お!、心の物音は?

甘美媛急いで立つ。

幕の外を久禮さきに立つて新羅の下士等忍び込んでくる。

甘美媛(時雨)

前庭の篝火は更けてゐる。

甘美媛　其處へくるのは誰です。

久禮　（ギョッとして）あたくしは御使（おつかひ）にたつた登弭でございます。瓊岳将軍にお目にかゝらせて下さいまし。

甘美媛　登弭ならば、傳令の者が取次ぐ筈です、後にも誰か居るではありませんか。

久禮　いゝえ、手前一人でございます。決して僞りは申上げません。

甘美媛　（叫ぶ）調の吉士、怪しい者です。

久禮　ど、どうぞおしづかに！　大将さまは御承知のものでございます。登弭でございます、大将様のお室をお知らせ下さいまし。

大葉子燭をもつて現はれる。

大葉子　あなたのお聲なので、あたくしが参りましたが、どうかなされましたか！

甘美媛　（久禮を指さす）

大葉子　何者です、顔をおあげなさい。お前は日本人ではないね。

久禮　はい、歸化人の登弭でございます。御使に出た登弭でございます。

大葉子　あたしたちが登弭を知らないとお思ひか、登弭なら登弭でよい、返書を受取りませう。

久禮　それは私は持つてをりません。あちらから別の使者が参りました。

大葉子　案内をして來たとお言ひなのだね。

久禮　はい、大将さまに直々お目通りが出來るやうに願ひます。

大葉子　（甘美媛に）油斷は出來ません。すぐにお知らせして下さいまし。（久禮に）新羅の間諜どの、どの位の人數を引つぱつてお出だ。

久禮　（いまくしさうに）御婦人、失禮ながらあなたは思ひ違ひをなすつてお出でです。

伊企儺、甘美媛の知らせに破鐘のごとき聲を絞つて出てくる。

伊企儺　その使者とかに俺が逢はう。

逃出さうとする久禮の頭を引き摑んで引摺つてゆく。新羅の士卒、伊企儺の勢ひに後退りしながら取りまいてゆく。
士官たちその聲に夢をさます。と、同時に爆聲閧の聲起る。
士官達跳起きて、雪崩のごとく入込む軍卒の中に飛込み、撃退する。
火擧る。瓊缶奮戰して敵を追ふ。すさまじき亂軍となり、大葉子勇しく働きながら甘美媛を探し求める。

大葉子　さあ媛、この間にお供いたしませう。逃れなければいけません。いゝえ、なんとおつしやつても、女子が死ぬところではありません。屍を殘しておいても見苦しうございます。生捕られたりしたら猶更です。女子どもが此處に居ることは、夫たちを不便にします。さあ、强かりなさらなければいけない、逃れるのも容易ではありません。

甘美媛　殘してお出下さい。あたしは瓊缶と一緒に死にます。あなただけ逃れてくだい。

大葉子　何を仰しやるのです。美しいあなたを敵の手に渡したくないからこそ、あたくしまでお伴をするのです。貴女はこの上の恥辱を殘さうとなさるのですか？　さ、この間に！

舅子馳けよつてくる。

舅子　父上は敵の血を浴て、仁王のやうだ。おれも戰つた。

大葉子　それどころではない。早う馳抜けて、紀の將軍の軍に知らせるが役目ではないか。

舅子　行きます、行きます。だがも一度父上を見て――（馳去る）

大葉子　（甘美媛を見失つて）お！　甘美媛！

烈んなる火の中を、大葉子甘美媛の名を呼び探し廻る。

甘美媛（時雨）

伊企儺火を帶び、血を浴て阿修羅のごとく防戰する。

第四場

第一場とおなじ登弥の家。

時刻第三場の末とおなじころ。

登弥疲勞しつくし泥まみれの姿にて立つてゐる。妻は前よりも身奇麗にしてゐる。

登弥　あの火の手が氣になる。おれは立寄つてはゐられない。

妻　倭軍の方が敗けたつて、お前ばかりの罪とはいへない。强ければ自力でも勝つはづです。それにまた、敗軍したのなら猶更行かれやしません。そんな處へうつかり行つたら命がないでせう。强情を張らずに家のなかへおはいりなさい。

登弥　さうはゆかない。わたしには責任がある。戰爭はいやだ、俺は大きらひなのだが、受合つたからには責任がある。俺の氣弱さからこんな事になつてしまつたのだ。この役目を仕おうせば、長い日を樂しく、お前と暮せるといふ事が分つてゐながら、つひ足がいふ事をきかなかつたばつかりに、とんでもないことをしてしまつた。

妻　だからあたしも、お前に濟まないと思つて、久禮の奴がどうも怪しいから、それとなくなんして見たのだけれど、彼奴別人のようになつてしまつて――

登弥　久禮がやつぱり拾つたのだな？

妻　とうもさうではないかと思はれるのだけれど。

登弥　妙な樣子だつたか？

妻　彼奴もね、急に用事が出來たといつて、お前さんが行くとすぐに出かけたのですよ。

登弥　（久禮の門を指す）まだ歸つてゐないやうだな。

妻　まだ歸つてはゐません。

登弭　（門に寄りかゝつて考へ込む）

妻　ですがねえ、百濟の人達も譯がわからなすぎますね。倭からの密使だといつたら、逢ひさうなものぢやありませんか。

登弭　輕々しい事柄ではないからな。證據がなければ水かけ論だ。落したといつたとて、それが證明にはならないからな、取合はないのに不思議はない。惡い結果になれば、みんな俺の責めだ。

妻　（やゝ皮肉に）明けても暮れても戰ひばかりで、この加羅の國に生きてゐるのが嫌になつたと、家も妻も捨て、あなたに言はせると、天上の樂土のやうな、蓬萊の島のような日の本へ、生れかはりにいつて、日の帝の赤子とかにおなりなのだから、それは〳〵樂しい愉快な事づくめで、歸へるのも嫌になつたのであらうと思つてゐたのに、矢つ張り人殺しの戰爭の手傳ひをして、精根をもむとは、お前といふ人もよつぽど變つてゐる、あたしには分らないよ。

遠く罵しり騷ぐ聲する。

妻　なんだらう？　おや、火はすつかり靜まりましたよ。――なんだか騷がしいが、此方へ近よつてくるやうですよ。傍杖をくふといけないから隱れませうよ。とにかく樣子を見た上でなさいね、さあ早く、さあ！

無理に登弭を引立て家に連れ込む。すぐに窓を閉し燈を消す。月登る。

久禮ホク〳〵して歸つてくる。門を閉けやうとして隣家の窓にむかひ聲をかける。

久禮　居るかね？

妻　（顏を出す）

久禮　留守に變りはなかつたかね、登弭さんはどうした。

妻　さあ、どうしたか、あれつきりです。

久禮　それはそれは。（相恰を崩す）さうなると、あの時の約束はどうなるね、あの話を續ける氣かね？

妻　さあね、あんまり投つておかれたし、あの時袖ない仕振りだつたから、もう氣が拔けてしまつてね。

久禮　金はたんまりあるよ、わたしを亭主に持つてごらん、登弥とはちつと違う働きものだよ。

妻　どうしてお金を儲けたのさ、きかせてくれたらあの話を續けてもいいね。

久禮　どつこい、それはまだ言へないよ。何しろ御覽、こんなに痛み所までこしらへて――ね、頭を見てもわかるだらう。體の方は大痛事なのだからね、なにしろあれから、不眠不休だ。金は仲々樂には儲けさせないものさ。

妻　そんなに何處を歩いてお出だつた。

久禮　ま、ま、それはいづれお床入りの時の自慢ばなしとしようよ。それまではお預けだ。

久禮門に這入つてゆく。
登弥の妻窓を閉す。と、久禮また門から出てくる。

久禮　さう〱、いま直に好い見世ものが通るから、窓を明けておいて見物するがいい。もう間もなく來るだらう。――おゝ、來た、來た。そらあの喧騒(さわぎ)がそれだ。あの中には俺の咽喉を締上げて、すんでの事にあの世へ行かせようとした憎い奴もゐる。とても人間業ではない強い奴だつたが、彼奴も縛られてゐるから安心だ。俺もゆつくり面を見直してやらう。

夜襲の一群引上げてくる。久禮見向きもしないそれらの人々に、一々丁寧に挨拶する。

久禮　御苦勞様でございました、御苦勞様でございました。

登弥の窓細く開く。
この一隊が通りすぎる　、烈しく罵りたてて、捕虜を追立てくる。

久禮　御苦勞様でございます。別してお骨折りで御座います。ところで伺ひますが、捕はれ者の中に、鬼のような男がをり

は致しませんか？彼奴は怨みのある奴でございます。これ御覧じませ、この通り、この咎人めの頭を割り、咽喉をしめて、地獄の中ほどまで投り込みました。憎い奴でございます。わたくしの微力でなど、とても仕返しはおろか、唾ひとつ吐きかけてやることも思ひも及びませぬ。恐れながら、廣邊な、かぎり知れない新羅の勇者方のお力、御恩惠をもちまして、張られた面をはりかへす復讐は出來ませぬまでも、足で砂を引つかけてやるとか、尿でもひりかけてくれたうございます。御足のお勞れをお休めになる少時間を、笑ひものを見てやるといふ御雅量を、わたくしめのためにお投げくださいまし、お願ひ申上げます。

久禮しやべりながら捕はれ人を物色する。

久禮　ほう！これは／＼、あの鬼めや、副將や、他の男共はいかになりました。

新羅卒　彼等は他の道を行つた。

久禮　やれやれ。（いま／＼しげに唾を吐く）ではあのお强い奥方にお目にかからうか。美しい若い方のもお出だな。よう――これは／＼夫人方、へい、登弭めでござます。先刻は失禮仕つりましたな。やれやれおいたはしい。おう／＼、副將の夫人さまのお足からは、爪がはがれて血が流れてゐる。――ああ、あ、お氣の毒な、自體あたくしめは佛性で、他人の難義が見てすごされない性分でございます。お穿物を獻じませう。（窓にむかつて）これ、そなたの穿きふるした、厠の下穿でも持つて來てやれ、明日は首を斬られる奴等だ、功德になるからほどこしてやれ。

窓の中にて爭ふ物音。登弭、新らしい穿ものをもつて飛出してくる。

登弭　將軍の夫人、あたくしめが登弭でございます。惡人に賣られました。許してくださいまし、お許しくださいまし。（泣伏す）

久禮　ほ、登弭は貴下だつたか？　これは／＼。なるほど貴殿が登弭だ。あツはツはツは。ところでもう密使はすんだかな？　見受るところ、あまり都合よくはいかなかつたやうだが――細君の懐は寢心地がよからうが、可愛がられ過

ぎるとえてしても、物ごとはグレハマになるものですぞ。（妻の方へ）これ女、あの人はもう歸りますまいなんぞと、よくも瞞したな。だが、かうなると結局登弭が居てくれた方が面白いよ。暴れたりすれば强い方が多勢お出だから、ただはお置きなさらない。久禮はあの方達に殊勳をさせたのだから、いはば恩人だ。久禮は弱いが附いてゐる方たちは强いぞ。――しかし、すこし暴れてくれても好い、俺はまだ人間が蜂の巣のやうに穴のあくのを見たことがないから、見せて貰つてもいいな。

登弭、袖で甘美媛の足を拭つて履を穿かせる。

登弭　將軍の夫人、わたくしの申譯もたつた一言お聞き下さいまし。あたくしはあなた方と、おなじ國に生れなかつた、下賤の歸化人だからと思はれるのが愁うございます。まうすまでもない私めの失策ではございますが、惡魔は姿を見せないが至るところに飛行してゐるといふ事を忘れてをりました。人の皮着た人鬼は、至るところに住んでゐるといふ事を忘れてをりました。私めが此處の辻に一足停んだのが魅入られる透きを與へたのでございます。惡魔めはささやきました、お前の家の窓だと――夫人、その窓には、わたくしの生死を、長い歲月案じ暮してゐる妻が住んでゐたのでございます。あたくしは今更、私の命を幾つ投出したとても、足摺をして悔んだとても足りない事を存じてをります。舌を嚙んでも死にきれない苦しみでございます。ただ知つていたゞきたいのは、惡意あつてしたことではないといふ、それだけでございます。

久禮　さうはいふが登弭さん、惡意はあらうがなからうが、かうなつて見ればまあ同じやうなものだね。

妻　（久禮を指さす）彼奴が人鬼なのでございます。（哭く）夫の罪ではございません。あたくしが理不盡に止めましたのです。密書を盜まれたのもあたくしの罪でございます。

久禮　あツはツはツは、あツはツはツはツは。ヘイ夫人方、全くその通りでございます。あたくしがその人鬼で惡魔めでございます。夫妻が仲よく抱きあつてゐた時に、チョッピリと彼奴らの幸福を盜みました。その惡魔めでございますよ。

妻　登彌の罪ではございません、許すと一言仰しやつてやつて下さいまし。でないと、氣の小さい夫は死んでしまひます。

妻、大葉子の裳裾に縋つて訴へる。

大葉子　今更咎めたとてどうならう。そなたも惡い者とは思はない。（妻にいふともなく）夫をたてるは妻の心懸けひとつ――妻が至らぬと、夫にまで汚名をきせる。

妻　夫人、あたくしはいま氣が附きました。あたくしが惡魔だつたのでございます、お許しなさつて下さい夫人。ああ！あたしはどうしたらいいのか――（甘美媛の足許にひれ伏す）その御足で、蹴つて、蹴つて、蹴殺して下さいまし。

甘美媛　そんなに苦しまないで下さい。軍人の妻は覺語してゐます。怨んだとてどうなりはしない。それよりも其處を退いて、行く道を通してください。あたしたちは女の足だから急いでも遲れる。少時の手間どりが、取返しのつかないお別れになつてはならない。

久禮　それは旦那樣がたの事ですかね？　なあにそれなら、成たけ遲くお出なすつた方がいい、始末のついたあとへ行く方が、大きに氣がきいてゐますよ。何がさて、新羅の殿さまがたは女子には優しい、しかも貴女は美しいお方だから、大切にしておもらへなさるだらう。

甘美媛　（裵く戰のく）

新羅の士（久禮に）もう用はないか？

久禮　はいはい、御苦勞樣でござります。酒でも一口差上げたいのでございますが、何がさて不時のこと、志だけお酌みくださいまし。

新羅士　陣へ來い、祝酒を振舞はう。

久禮　はいはい、はいはい、有難うございます。勝戰の御酒は、一層甘うございませう、イヒヒヒヒ。へいこれは、どなたも、どなたも、御苦勞樣でございます。

卒たち、罵り喚いて追立てゆく。

久禮　やれやれ、やつと去つた。親類の葬式が前を通るのとおなじで、悦んで見てゐる譯にもゆかず、といつて、默つて引込んでゐれば無愛想だ。これで一骨折すませたが——どつこい、それどころではないぞ。夫が歸つてくれば、食料は二倍にしてかへすと、大きな口を叩いた女めが殘つてゐた。どれ、金を拂つてもらつてから歸るとしよう。

妻　長いこと隣家に居くさつて、今がいまのことでもあるまい。明日でも持つていつて歸してやるわ。

久禮　いやさうはゆかぬ。夜逃げをされたらば元も子もない。約束ぢやもらはう。なければお前わしの家へ來い。

妻　いやなことだ。

久禮　長い間の約束だ、登弭にきかせたとて惡いことではない。

妻　明日拂つてやる。

久禮　ないな、あてにしてゐた懷中は淋しいのだな。——これ、一體いくらばかりしか持つて歸らないのだ。俺を見ろ、懷はズツシリと重いぞ。まだ／＼これを変にして、これからが大金持になる。な、とかく、金といふものは金を呼ぶものだ。ない奴はだん／＼と貧乏がひどくなるのだ。な、裏切り者に誰がビタ一文でもくれるものか。な、な、分つたか

妻　金持ちは好きに違ひないが、そなたは嫌ひだ。

久禮　よし！　それでは登弭から渡してもらはう。金か、女房か、どつちでもいゝのだ。おい、何を考へてゐるのだ。おい、どつちにする。返事をしてくれ、夜が更けた。

登弭　（髮を毟り）俺は、俺は、むごたらしさがいやさに、日の本へ歸化したのではないか——

久禮　ねえ登弭さん、一體お前がわるいよ。若い女房を、かうして獨身者のわしの隣家へ、いつまでも投つたらかしておくものだからな、その、へへ、妙な氣持ちを起させたのも無理はなからう。ねえ登弭さん、お前怨んでは困るよ。そのね、ついわたしは、惡心からではないが、癪に障つたのさ。そこで、食料の貸はどうしてくれるね、おかみさんを貰

登弭　つていつてもいゝかね。

妻　――

登弭　お前さん、何とか返事をしてやつてください、ね。

妻　それどころではない。あの女人達はどうなるのだ！

登弭　（ムッとして）他人の夫人のことばかり考へてゐずと、あたしのことも考へてください。

久禮　さうだ、さうだ、お前さんの御亭主は人情なしだなあ。

妻　どうしてくれるのです、お金をやつてくださる？　え？

久禮　いや、あながち金でなければならないのではない。おかみさんを貰つた方がいいのだ。どうしてくれるね、登弭さん。

登弭　うん、かうしてやる。

登弭突然腰刀をつきつける。久禮驚いて門の中へ逃込む。

妻　お前さん、何をするの。

登弭　放せ。

久禮　（門から顔を突出して）そんな金ならほしくはない。覺へてゐろ、明日になつて泣面かくな。

門内へ逃込む。登弭妻を振拂つて追つてゆく。

妻　あ、あ！（救ひを求め空に手をさしのべる。）大變なことになつちやつた。（門内を覗き込んで身を縮め指の爪を嚙む。）

（つゞく）

婦人彙報

消費組合運動

消費組合の運動は與むめを女史が年來熱心に提唱して來たところのものであつたが、この程赤松明子女史と共力していよいよ實行に移ることになり、消費組合協會と名付けて、發會式を飯田橋の產業組合中央會階上に擧げた。消費組合運動が、消費を主とする家庭の主婦にとつて如何に切實な問題であるかは今更ら云ふまでもない。子供に手のはぶけるやうになつた母親や、少しでも社會のために働きたいといふおかみさん達が可なり大勢集まつたといふことである。今後の目覺ましい活動を期待して見守らう。

雜誌「勞農」の婦人版

五月一日から雜誌「勞農」の附錄として、婦人版が發行されてゐる。これは左翼婦人の指導機關として發行されたもので、無產階級婦人の啓蒙運動の一つである。無產運動の强硬な仰壓、戰線の分裂狀態のうちにあつて、この僅か八ページの婦人版が持つ意義は充分大きなものでありたいとねがはずにはゐられない。この婦人版はもともと「勞農」の附錄として出たものであるが、希望者には別に分けて、一部三錢、五部拾錢、十部十五錢、五十部三十錢、百部五十錢（全部送料共）の割合でおわかちする由である。七月號の內容は

▲火事どろ。
▲農婦よ團結せよ
▲消費の合理化とは
▲國際消費組合同盟と左右の對立
▲製絲女工の現狀
▲無產政黨と婦人の組織

大西洋橫斷の婦人飛行家

アメリカのイヤーハートといふ二十九歲の婦人飛行家が、最初の大西洋橫斷飛行に見事に成功した。場所はニユーフアウンドランドのトレバシーからサツスウエルスの南海岸ラネスリー附近のバリーポートまで彼の女の愛機「友情」號によつて飛んだもので、その所要時間は約二十二時間であつた。

博士論文を書く西村唐子女史

我國最初の女醫博士が出來やうとしてゐる。東京女子醫專の卒業生で現に東大醫學部附屬病院耳鼻科に務めてゐる西村庚子女史で、耳鼻科の權威岡田和一郎博士に師事して專心研究すること七年　完成すれば博士論文として立派なものだと思ふ、といふ師岡田博士の折紙つきである。研究は內耳の中でも最も困難とされてゐる骨の內部の研究で、博士や同僚達は極力推賞してゐる。

出產率の減退調査

東京市の出產率が地方のそれに比較して低下しつゝあるといふので、今度十五歲から四十五歲までの婦人について受胎能力の調査といふ變つた調査をするさうである。調査の方法は既婚者と未婚者とを區別して兩者の統計をとり、既婚者については受胎回數——出產、死產、流產——および受胎能力の期間を調査し、未婚者については現在の健康診斷と、母親の受胎回數を調査して類推するので、この調査はやがて、都市生活における保險上の根本的改善策の基本材料をなすものと見られてゐる。

婦人の麻痺性痴呆症の增加

最近統計が女性の麻痺性痴呆症のおびたゞしい增加率を示してゐる。麻痺性痴呆の重な原因は黴毒で、黴毒患者の增加は歐洲大戰の齎らした大景氣の殘した惡結果であると云はれてゐるが、單に黴毒のみが唯一の原因であるとすれば女性の精神病の增加率は男子のそれと略同割合でよいと云へる。ところが殊更ら女性においてその增率の甚だしいのは生活難激甚に結果する現象ではあるまいかと見られてゐる。したがつてそれはある

意味において女性の社會苦に對する反應を示すものとも見られ、その證據には、女性精神病者の妄想の多くがその事實を示すと云ふ。

吳俊陞夫人の殉死

張作霖の北京退去の折爆彈を投げられて、即死した吳俊陞の第二夫人、王氏は悲しみの極一夜俊陞のなきがらを抱いて泣き明かした果に毒藥を呑んで悲壯な自殺を遂げた。支那革命の幾多の犧牲者の中でも美しくも悲しい吳夫人の殉死を傷んで與謝野晶子夫人は追悼歌を詠んでゐる。

　吳夫人の生死を知らで初めより
　　夢の花かと思ひけらしな。

「女子學聯」の檢擧

六月十五日の新聞は男學生の社會科學研究會に對して、女子專門校、及び女大卒業生等によつて作られてゐた「女子學聯」と稱する團體の檢擧を報じてゐる。これは共產黨員と何等かの關係があるといふ理由に依るのであるらしいが委しい事は判からない。

問題になつた婦人雜誌

賣らん哉主義のます／＼露骨になつて來た近頃の婦人雜誌の傾向は、勿論今に始まつたことではないとはいへやうやく心ある人々の注目を惹いて、あちらこちらで問題にされ始めて、中央公論では六月號で婦人雜誌に現はれた性的記事に就いて諸家の意見を求めてゐるし、新潮六月號の合評會は婦人雜誌の批判會として、時代の反映としての婦人雜誌、婦人の社會的地位とその教養、趣味、生活程度及び文學的要素とか、使命將來など、婦人雜誌に就いて費されてゐるし、婦人問題研究會では五月の二十六日に婦人雜誌問題についての會合を開いた。

婦人雜誌の傾向の具體的事實については、誰でも相當に知つてゐるに違ひない。併し、今婦人問題研究會でこの一月號から六月號にわたつて調査した名題、廣告、記事の種類などに關する統計の一部を記してみやう。かうしてみると統計といふものはなか／＼面白い。

婦人雜誌特輯號名

婦人公論　戀愛賣買時代
　普選から婦選へ
　都會の誘惑
　戀愛行進曲

主婦の友　幸運案內號
　美容研究號
　中流模範住宅新築號
　夫の秘密號

婦女界　赤ちゃん號
　開運出世物語號
　夫婦間の貞操問題號
　結婚生活者の實話號
　出產より後の衞生號
　醫者の來るまで號

婦人世界　輝く新婚時代號
　思春期の秘密號
　安產と難產號
　誌上病院號
　美容法紙上講習號

婦人雜誌性病關係廣告扱數

（昭和三年一月號—六月號迄）

	一月	二月	三月	四月	五月	六月
主婦之友	三三	三六	三六	三六	三五	三九
婦女界	六	二	八	九	七	九
婦人世界	二三	二三	二五	三二	二六	二五
婦人俱樂部	一〇			一五	一〇	一六
婦人畫報	〇	二	〇	〇	〇	〇
婦人公論	一		一		〇	〇

編輯後記

水無月とは瑞々しくも清朗な空ではないか。いたるところに生々の氣はみちみなぎつてゐる。だがなんと、いま全世界で、この日本の女性ほど健かにめざましい生育をとげつゝあるものがあらうか？初夏のあした、ぽつぱいと潮が押あげてくるやうに、おさへきれない若々しい力をためさうとしてゐる同性のうめきをきくと、なみだぐましい涌躍を感じないではゐられない。あたしもその潮にをどりこみ、波の起伏に動きたいと祈る。

こゝに特にお禮を述べたいのは寄稿された方々のなみ〳〵ならぬ御厚意である。賴むもの賴まれるものみな眞劍で、多くの言葉を費さず結合されたことである。編輯にたづさはつた人々はもとよりである。この團結の力は、小さなものゝようでゐて、あなどりがたいものであらうと、自ら信じるも過當ではあるまい。（時雨）

▲何かを思ひ立つ。それがとんとん拍子にまとまつてゆく、その嬉しさといつたらない。今度この『女人藝術』について私たちが活動しはじめてからといふもの、何もかも待つてましたといはんばかり順調に帆をかけたやうな案配だつたものだから、この雜誌きつと將來、良い形勢にちがひない。はじめ吉ければすべて吉し。

▲情熱をもつて仕事をすることはたのしい。久々に私はそのたのしさを味つたのだ。十七年ほどむかし『女子文壇』によつて多くの親友とともに當時の文壇の空氣の中でそれ〴〵若い女性としての氣を吐いた頃の愉快さがおもひかへされたのだ。女子文壇、青鞜、ピアトリス、處女地、女人藝術。再び若き心は還り、この女人藝術によつて十分思ひ存分ものが云へることだ。回想、希望ともに私を十二分に幸福にする。

▲各方面女流諸氏の聲援、甚大、それはどんなにうれしかつたでせう。どうか今後とも益々よろしくおねがひ申します、何分とも忌憚なき御批評を乞ふ。（花世）

▲名付けて女人藝術といふ。現代雜誌界に二つなき、女人のみの集ひなり。亦樂しからずや。まあ、こんな雜誌の出來るのを、私たちどんなに待ちわびてゐたでせう：」女人の君たちの歡びの聲は、私たちの心を若鮎のやうに躍らせ力づけて下さる。「女たちばかりで何か出來るかい」かくのたまふ男子方には、かく答へよう「待て！而して見よ！」（誰かのまねぢやなくてよ）

創刊號にしてこの顏ぶれである。二號にはあゝして、三號にはかうして：：考をめぐらすだけでも心樂しい。『女人藝術』に作品の出ない女流作家はまだ〳〵二流どころだといはれるやうになる事が、必ず來ることを信じる。（しづか）

ある機縁から私もまたお仲間入りさせて頂いたことを感謝いたします。恐らくこれが動機となつてこれまで兎角振はなかつた女流文藝家の目覺ましき活動が初まることゝ思ひます。偏へに男性文藝家に加擔してゐたジャーナリズムとコンマーシャリズムとの鞭は今や私たちに加擔するでせう。而して女流文藝家の眞の天分が發揮されるでせう。（かど江）

▲或る日城さんが私に言ふ。あなたが人生の歡びと悲しみとをほんとに味ひたいと思ふのなら結婚なさいよ、と。で女人藝術は私に歡びを洩らしてくれないであらうか、同時に悲しみも：：？と私は威張つておく。（素子）

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	四錢
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

▲誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい。
▲郵便切手代用一割増の事。

昭和三年六月廿八日印刷
昭和三年七月一日發行
（毎月一回一日發行）

發行者　長谷川時雨
編輯者　素川絹子
印刷者　生田花世
印刷所　株式會社秀英舍

東京市牛込區左内町三十一番地
發行所　女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七五八二五

廣告掲載料

種類	定價	頁
普通	四拾圓	一頁
表紙の二、三	七拾圓	同
表紙の四	百圓	同

▲廣告掲載希望の方は[illegible]本社[illegible]
▲普通頁の場所指定は二割増の事、三ケ月以上掲載の場合は割引致します。



オリエンタル帽子店
店ハ三軒集マツテオリマス ドノ店ニオ出下サツテモ、夏ノ御洋装一式直チニ揃ヒマス。
オーキ絹店
電話京橋 三七四六
セキドの靴
銀座尾張町 交叉点際

昭和三年六月十八日印刷納本



株式會社秀英舎印刷